



# 案山子



2015年冬号

新潟大学文芸部

## 目次

---

### ◆お題作品『傘』

ペルソナ・グラータ	文月遼、	3
「傘」二編	日曜日 憂	4
雫に傘鳴る浪漫譚	高天美月	5

### ◆一般作品

月と姫	七乙女昴	7
ア・ローン・プレイヤー	文月遼、	8
隠し扉と上書き保存	幼夏	9
銀河超皇帝TAKASHI	今畑 鏡	10
チェッカーフラッグ	自分	11

特別な後輩	落谷アツムネ	12
混合（中）	<b>Puney Loran Seapon</b>	13
クリプトビオシス	日曜日 憂	14
夢の通り路	芳野 朔	15
ノワールの神話	惇 暉	16
箆笥集（一）	惇 暉	17
神様恋物語	片西 結月	18
本当の妖怪は私たち自身なんじゃないかって	浦木 英智	19
花咲き乱れて、神は囓う ～無花果の章～	帽子屋	20

# お題作品集 お題「傘」

ペルソナ・グラータ

文月遼、

久しぶりに会った友人は、目許をすっぼりと覆い尽くす仮面を被っていた。

「……睦月君？ あー、やっぱり。ムツ君だ！」

人もまばらな駅の改札口。ぱらぱらと振っている雨を見て、折りたたみ傘を探して鞆を探っていたおれの後ろから来た声。

それに振り返ると、目元に光沢のある青い仮面を被った少女がいた。

長らく会っていない彼女にあったことも驚いているが、それ以上に強烈なインパクトを持つものを見せつけられて、おれは一瞬言葉に詰まった。まるでアニメのキャラクターがしているような、派手なデザインだ。

この異常なファッションに気付くものはいないのかと周囲を見渡してみたが、彼らはその仮面に関して何の反応も示さない。声がるなあ、程度にちらりと彼女を見ても、それ以上は隅に置かれた観光ツアーのチラシに向けるほどの関心さえ払わない。

仮面女子なる流行でも出来たのか。おれの困惑と若干の躊躇いを他所に、彼女は面白いものを見つけた子犬のように駆け寄って来る。もっと気の利いた事を言えただろうに、おれが言ったのは平凡で、退屈なことだった。

「お前……由佳ちゃあ……<sup>あまめ</sup>天目か？」

「他に誰がいるの。もー、いつぶりだっけ。ええと」

「七年くらい前だったか」

「七年！ そっかー。あたし達も、もう高校生だもんね」

天目由佳は大袈裟に驚きながら、七年というおれたちの人生のほぼ三分の一という、極めて大きな時間の隔たりを欠片さえ感じさせない、人懐っこい笑い方だった。

後ろに結った艶のある髪が小刻みに揺れた。彼女はとりたてて美人というわけではないが、道行く十人に一人くらいは振り返るかもしれない愛嬌がある。

その笑顔というやつは人を落ち着かせる何かがある。細かいことがどうでもよくなるような包容力でも形容しようか。もっとも、その人を揺さぶる何かがあり、細かいことでは無い仮面を見せつけられたせいで、その魅力は差し引きゼロといったところなのだが。

「そういや、どうしてまたここに？」

「今まではお父さんの引っ越しに付き合ってたけど、これからはここのお婆ちゃんの家に住むことになったの。お父さんはこれからきままな一人暮らし」

「なるほど、単身赴任ってやつか。天目んところも大変だな」

「そうでもないかな？ これで都会に遊びに行く理由も出来たわけだし」

屈託がない彼女の笑みに、おれは苦笑を返すだけだった。

雨は弱まっていた。それでも春先とは言え、夜になれば柔らかな日の暖かさが残る場所は無かった。冷たい風に天目がぶるりと身を震わせた。

「寒いなあ、もう……そうだ。ムツ君、アドレス教えてよ」

おれは頷いて携帯電話を取り出す。アドレス交換をしている間、おれはずっと彼女の仮面を見ていた。正確にはその奥を見ようとした。

「お、来た。あれ、どうかしたの？」

「ああ、いや……そうだ、送っていこうか？」

おれの視線に気が付いた彼女が見上げてくる。六年前を思い出した。あの時の目線は同じくらいだったけれど。

「平気だよ。結構近いし」

「もうじき八時だぜ。最近不審者も多いし……」

「傘があるし、大丈夫だって。」

彼女は、少し乱暴に扱っただけで骨の折れそうな、頼りないビニール傘を剣のように構えて見せる。

「バカたれ。ガキのちゃんばらじゃ……」

肩を竦め、子供じみた仕草をする彼女にそう言いかけたところで、仮面の奥が見えた気がした。奥に、彼女の目元に、みみず腫れのように膨れた傷の跡が見えた気がした。薄い桃色をした血色の良い顔の、その部分だけが毒々しい色を放っている。その毒々しさと、混じりっ気のない笑顔のギャップがあまりにも痛々しくて、おれは視線を天目から話した。

「そっか。気を付けろよ」

「へ？ ああ、うん……じゃあね」

おれが視線を戻すと、天目はひどくゆっくりとしたペースで歩き始めていた。時折、こちらを振り返る。彼女の顔は、距離もあつたせいでどんな表情をしているのか分からなかった。その時にはもう、仮面の奥は見えなくなっていた。

二年生の五月という、ある程度つるんだりするグループが固定され直してくる時期ということもあって、転校というイベントはそれほど大きなイベントにはならなかった。

転校生という肩書が力を持たなくなる最初の場所とも言える高校で、天目はすでにクラスの一部に溶け込めたのは、ひとえに彼女の実力……というのも変だが、そういう魅力とか、立ち回りの上手さだった。

その時も天目は駅で会った時と同じ仮面を被っていた。そして、仮面については誰も気にかけない。友人に話を聞いたりもしたが、「仮面などつけていない」以外の答えは出て来なかった。

「ムツ君、どうしたの？」

午後の眠気に閉じそうなまぶたをどうにか開く。仮面の白い眼がおれを見据える。実際のところはどこを向いているか分かったものではないけれど。頬杖を止めて、大きく伸びをする。仮面

のせいですり減った精神の疲労は、なかなか取れない。

「ああ……お前のこと考えてた」

「……へ？」

首を傾げた彼女を見て、俺はようやくとんでもなくクサイ、ガラにもない事を言っただけのけただと気が付いた。

「ああ、いや。そうじゃなくてな」

「なにがそうなの？」

慌てる様子に、彼女は口許に意地の笑みを作った。仮面の下は分からないが。

「いや、もと住んでたところでもさ、環境も結構変わってるし……その、大丈夫かなって」

おれの苦し紛れの返事を聞いて、口許をさらに歪ませる。溢れてくる笑い声をせき止めている

。

「そんなおかしいことを言ったか？」

今度は喉までも絞っているのだろうか。小さな笑い声では無く悪い魔女のような、しゃくり上げるような笑い方になった。

「だって、ムツ君はほとんど変わってないから、安心しちゃって。なんか、あたしのこと避けるみたいでさ」

「そうか？」

「変なところで気遣ってきたり、ぶきっちょなことか。全然」

「不器用……？ そんなことないだろう」

「ぶきっちょ」

「違う」

「ぶきっちょ」

「だ一、もう！ 俺は………むう」

思いのほか大きな声が出て教室が静まり返った。気まずさで死にたくなる。天目はついに限界を迎えたのか、ゲラゲラと笑いだした。涙が滲んでいるらしい目じりを拭う。その指は仮面など無いかのように青い光沢を放つそれをすり抜けた。

「ほーら、ぶきっちょだ」

「ぶきっちょは関係ないだろう。今の」

うひーだの、ひえーだの。およそ年頃の少女の出すべきでない笑い声を上げた後、こう言った

。

「勝手に怒ったそっちの落ち度じゃん。分かったでしょ。少なくとも、ムツ君をおちよくれるくらいには大丈夫」

大丈夫。その言葉を聞いた瞬間、吐き出しかけていた息が止まった。心臓を、肺を、身体の中のあらゆるものを冷たい手に愛撫されたような感覚。逃げたくても逃げられない、悶えるような苦しさ。それを厚い面の皮で覆い隠す。

「ああ、良く分かったよ……」

そう言うと同時に始業のベルが鳴ったのは幸運なことだった。教師の目を逃れる時、女子と言う生き物は恐るべき俊敏さを見せる。天目も同じだった。

やる気の無い号令の為に立ち上がる。礼をした姿勢のまま椅子に座り、同時に教科書を開いて突っ伏した。

俺はスクリーンを見るようにして、ある光景を眺めていた。果てを見通せないくすんだ十月の空。<sup>オクトーバースカイ</sup>小学生ほどの子供が二人いた。年に三回も使われれば良い方だろう、寂れた公民館。

同じく人気の無い公園。まばらに生えている草だけが、お情け程度には草むしりがされていることが分かる。

ここは彼らの――いや、おれと由佳だけの遊び場だった。何が危ないだとか、そうじゃないだとかいう分別がろくにつかない、向こう見ずな子供だったときの遊び場だった。<sup>ロケットボーイ</sup>

苔の生したベンチよりはましだとばかりに地面に投げ捨てられた、赤と黒のランドセル。

間抜けな姿勢でぽかんと立っている男は、おれだった。小学校三年生の、山地睦月だ。

おれから顔を背けてうずくまり、手で顔を押しさえているのが、

「……由佳ちゃん」

声変わり前の声が、天目の名を呼ぶ。その手に握られていたのは、見ていると目がちかちかしてきそうな黄色の蛍光色の傘。天目の足元には、白地にカラフルな水玉の傘。

誰も来ない公園は、選ばれた者しか立ち入ることの許されない神聖な場所だった。

二本の傘は正義と悪を司るつがいの剣だった。

バカバカしいと言えはその通りだが、そのバカバカしさを本当のことだとして受け止めるだけの純粋さと想像力は十を超えるか超えないかまでしか残らない。

そして、バカバカしさを本当のことと受け取るあまりに加減とかを忘れるのも、その年頃だった。

「痛い……痛いよお……」

天目の口から細い声が漏れる。おい、どうした。山地睦月。はやく答えろよ。すなおにごめんなさいと言え。簡単な言葉だろう。スクリーン越しに急かそうとしてみるが、当然ながらむつき

「……由佳ちゃん」

子供のおれが、やっとのことでひねり出した言葉は、二メートル先にいる彼女に届いているかどうかすら分からない、吐息のように掠れた声だった。

「ムツ君……」

すすり泣きの中で返す彼女の声のほうが、まだはっきりとしている。天目が振り返った。その顔を、おれははっきりと見ていた。

「大丈夫……大丈夫だよ」

おれは、睦月は彼女からじりじりと後ずさり、逃げ出していた。ランドセルを掴み、天目のことを振り返ることさえ無く走っていた。

自分の部屋で座り込む、子供のおれがいた。よく覚えている。激しい後悔と、誰かに罰してもらいたい。それでも、自分からは言い出せないという躊躇い。都合の良いことだと分かっ

ても、自分の口からではなく、誰かの手によって暴かれ、責められたいと。

翌日の金曜の朝。次は休日だと、疲れを滲ませながらも楽しみに思いを馳せる生徒の波。子供のおれの視線の先に天目がいた。目にパッチを当てている。彼女がおれに、睦月に気付いた様子は無かった。

「由佳ちゃん、その眼、どうしたの？」

「うん、ちょっとぶつけちゃって」

その言葉が聞こえたのか、おれは背を向けた。その日は金曜日で、おれは学校を休んだ。そして週明けに、彼女が転校したのだと知った。

背中に何か小さな固いものがぶつかった気がした。身を起こして振り返ると、マスク……天目がいる。口許がにいと笑っている。足元には消しゴムが小さく跳ねていた。肝心の教師はというと、黒板に活用だとか何だとかをしきりに書き込んでいる。

おれはポケットにもぐらせていた携帯電話を取り出した。よくないことだと分かってはいたが、それでも、今しかないと思っていた。メールを打ち込む。

《ちょっといいか》

天目が俯いた。携帯電話が震える。振動を抑え込む。

《授業中、今》

《分かってる。放課後付き合ってくれ》

《どこに》

少しは躊躇えよと思わなくもない。

《その時に伝える》

《了解》

音を立てないようにして携帯電話を閉じる。さいわい、教師が気付いた様子は無かった。授業中というイレギュラーとは言え、喋る時とは随分違うメールの文面に少し驚いた。軍人かよ。

そして今日のはじめて、天目に直接話すのではない連絡手段を使っていることに気が付いた。

終業のベルが鳴る。本を読んでホームルームを聞き流す。最後のやる気の無い礼を終えて、荷物をもとめていると、天目がおれの机に腰掛けた。

「ムツ君も、結構ワルだね」

「机に座りこむ天目ほどでは。部活とか大丈夫か？」

「大会はまだ先だからね、ムツ君は？」

「大会は近いが補欠の補欠だからな。そういや、傘はあるか？」

「置き傘ならあるけど……」

「持っていこう。夕方から荒れるみたいだから」

天気予報、そんな事言っていたっけ、などと呟きながらも、しっかりと傘を持って着いて来てくれる辺り、優しい奴なのだ。



「ねえ、ムツ君。ここって……」

おれが天目を連れ込んだ先……というのも語弊がある。案内した先は、寂れた公民館の裏だった。ついに遊具もベンチも取り払われ、公園だと分かるようなものは、申し訳程度のコンクリート製の車止めだけだった。

辺りを見渡す天目をよそに、おれは鞆を適当な場所に放り棄てる。傘は持ったままだ。それから顎をしゃくって、そうするように促す。天目も、誘った時から変わらない、頭の上に疑問符を浮かべたまま鞆を放った。

「久しぶりだな。ここに来るのも」

「え？ ……確かに、そうだけどさ」

「昔はここで色々をやったよな。おれが魔王でお前が勇者で、みたいなごっこ遊びとかさ……今から考えればバカみたいなことだけど」

おれの言葉に、天目は傘の柄を握ったまま小さく頷いた。

「折角会って、久々に来たし、もう一度バカをやってみないか」

ぽかんと天目が口を開けたまま立ち尽くす。おれが最初に彼女の仮面を見た時と同じか、それ以上に間抜けな顔だった。

「傘を使って、ちゃんばらとかさ……ほら、偶然にも」

「偶然にも……って！ それはムツ君が持って来いって」

天目が何かを言い出す前に、俺は傘を大きく振りかぶった。狙うのは天目の肩辺り。とはいえ、思い切り当てるつもりもない。天目はおろおろとしながら傘を構え——おれの傘を受け止めたと思った瞬間におれの脇腹に軽い衝撃が来た。

「ちょっとムツ君！ いきなり何を……」

こっちの台詞だった。明らかに動きがおかしい。でも、これはこれで好都合かもしれない。

「問答無用！」

今度は手首を使って天目の傘を弾こうとする。思い切り力を入れたにも関わらず、天目の傘は動いたと思ったらばねのように跳ね返り、おれの右ひじを打った。痺れがくる。

なにくそと振り上げる。上げ切る前にその手の甲を打たれた。

手元を狙う。それよりも先に手元を打たれ、頭を守ろうとした瞬間に横腹を打たれた。

おれの振るう傘がことごとく受け流される、どころかカウンターとばかりにぼしぼしと叩かれる。いつの間にかおれもむきになっていた。

動く前に手元で潰される。受け止められて、返す勢いに乗った傘がおれのあちこちを叩く。すれ違いざまにやられる。

おれが大きく傘を振り上げ、一步を踏み出す。その目の前に傘の先端が突き出されて、反射的に後ろにのけぞる。そのままバランスをくずし、おれは倒れ込んだ。

「いきなりでビックリしたけど……大丈夫？」

「……ごめん」

「ごめんって、何が？」

「天目が、引っ越す前の時、ちゃんばら……」

息切れする俺とは裏腹に、天目は汗を軽く滲ませるだけだ。何かを思い出すように見上げ、ぼんと手を叩く。

「ああ。そういえばそんなこともあったかも……最初の動き、なんか変だなあと思ったけど。まさか」

「そんなことって……、確かにそうだけど。変わりにおれを思いっきりぼこぼこにしてくれたらと思って」

パシッという音がして、目の前に光が走った。傘で思い切り頭を叩かれたのだ。怒気を含んだ声が耳を突く。

「変なところで気を遣う！ 大丈夫って言ってたでしょうに」

「でも、眼が……」

「眼？ 何のこと？」

天目が目の前にしゃがみ、顔を寄せる。目の前に大きな仮面が近づいて、その奥にある傷跡の痛々しさを思っ目目を閉じる。

「閉じない！」

瞼を親指で押され、そのままぐいと持ち上げられる。無理やり開かれた眼の前に、栗色の大きなアーモンド状の目があった。

青い仮面はどこにも無い。あの時に見た、醜い傷跡も。罪悪感の見せる幻覚——昔やったテレビゲームを連想する。

「それで？ 眼が？」

「何でも……本当。ごめん、ごめんなさい……由佳ちゃん」

「今のムツ君、すごいカッコ悪い」

「自分でもそう思うよ、本当」

おれは小さく頷いた。美味しいものをおごるなり何なり、スマートな手段はあっただろうし、そもそも謝るためにどれだけ回りくどくて、どれだけ面倒なことをしたか。

天目は、由佳は笑みを浮かべた。

「でもね、待ってたよ。その言葉を。こうやってまた、バカみたいに遊べる時を八年ずっと」

もう一度、おれも頷いた。今度は、確かに。

## 「傘」二編（日曜日 憂）

---

「傘」二編

日曜日 憂

狐の嫁入り

アスファルトのかがやき  
ばらまかれた宝石  
しずかな午後二時の宴  
ほほえみの陽と祝福の雨  
浴びないように傘をさす

歪

このごろ  
こころをかきむしって  
ふきだした血を浴びる  
かさぶたのごつごつで  
錆びている  
赤い雪がふりつもって  
もう耐えられない  
もう耐えられない  
骨が折れる音

# 雫に傘鳴る浪漫譚 [Jeux d'eau] (高天美月)

## 雫に傘鳴る浪漫譚 [Jeux d'eau]

「あ、見てみい、かたつむりや」キョウが指差す先には一匹の蝸牛。雨を凌ぐようにそれは動かない。

「え、どこや？」そう言って首を傾げながら、紫陽花の葉の裏を見上げるミヤコ。

「ああ……、」キョウは右手の人差し指をミヤコの目の前に置き、「ええとなあ……、」蝸牛のいる場所へと伸ばしていき、眼線を誘導する。「これや、これ」

「ほう……、これがかたつむりかあ、はじめて見たわ」

ミヤコは興味津々の様子でそのまま顔を近づけ……、不意に、キョウの人差し指をつまむ。

すると、キョウは驚いて立ち上がる。「なんや！」その拍子に躰のバランスを崩しそうになり、差していた黄色い傘を思わず落としてしまう。「おわっちよ！」彼女は足元の水溜まりを避けるために少し横に跳び、結局、長靴の左足が、すぽんと抜け落ちてしまった。

「おわっちよて、なんやそれ……」くすつと微笑みながら、ミヤコは左手を差し出して、ふらふら揺れているキョウの躰を支える。そして、自分のピンク色の傘をキョウの右手に渡し、彼女の傘を拾って差してから、長靴も回収する。

キョウのしっとり濡れた髪を見ると、ミヤコは溜息を吐きながら、「ああああ、もう……、雨で、ぬれてもうたやん」

「おおきに……」キョウは言いつつ、すぐ傍の水溜まりを恨めしげに眺めながら、「ミヤコがヘンなことしなきゃ、そう……、あぶない橋をわたることもなかったんや」

「よく知つとるな、そんなむずかしい言葉……」

「もっとほめなさい、なんせ、うちは日本つうやからな」

「そう……」

「なんがおかしいんや」

「べつにい……」ミヤコは、男の子に裸を見られたときのような顔で、「たあだ、はよう、くつをはいてくれんかなってえ……」

「ああ……、かんにんかんにん」そして、キョウは初めて、自分のその滑稽さに気がついたように、「あれ、もしかして、うちら、今、むっちゃおもしろいことしとるとちやう？」きよろきよると周りを見回しながら、「だあれもおらへんよなあ？」

「はようしてや！」ミヤコは握っている手をぶんぶん振り動かす。

「ああ、もう、わかったから！」

ミヤコはキョウの手を支えたまま、長靴を彼女の左足の前に置く。その中に、キョウは慎重に足を入れていく。それを見てから、ミヤコは手を離れた。

「おお……、ちべたい」震えが左足から全身を走ったように、オーヴァナリアクションをとるキョウ。

「自分のせいやろ」

「え、うちのせい？」

「ま、ええわ」ミヤコは気を取り直して、再び紫陽花の前にしゃがむ。「あ、まだおるな」

キョウもミヤコの隣に屈む。「どれ……」

彼女たち二人の視線の先にいる蝸牛は、先ほどまでの喧騒など知らん顔で、一ミリも動かずにそこにいた。

「あんさあ……、」ミヤコは目の前の蝸牛を凝視しながら、「かたつむりってなんなんや？ これは虫なんか？」

「さあ……、」キョウは軽く腕組みをして、思案する振りをする。「でも、ほら、足がないやん」

キョウがそう応えると、ミヤコはキョウの横顔に視線を向け、顔をぐいと近づける。「じゃあ、なあんでかたつむりはでんでん虫い、て言うんや？」

「知らんわ、そなん……」キョウは、ミヤコの顔の近さの方にむしろ気を取られていた。「ほなら、でんでんてなんや」

「うーん」唸って、ミヤコは再び視線を蝸牛に戻す。「それはたしかに、一理あるな」  
「なに、急に中国人のものまねなんかするんや？」  
「え？」  
「いや、なんでもあらへん」  
「うーん……、」ミヤコはキョウの言葉を聞き流し、首を傾げる。「そうかあ……、じゃあ、虫やないんかなあ」  
「ほら、せやから、見た目どおり、貝なんとちやうんか」キョウは指を伸ばして、蝸牛の殻にちよんと触れる。  
「見た目どおりい？」ミヤコは眼を丸くして、「貝がらだけやんか、似てるのって……。ええか、あさりにこおんな、」  
ミヤコも指を伸ばして、蝸牛の眼をぶにと押す。それは一瞬で引っ込んだ。「目なんかないやろ。それに貝って、海とか川にしかおらんとちやうんか？」  
「海とか川におるんなら、ここにいてもべつにええやろ、雨はふるんやし」  
「おおう……、どないしたんや、キョウ、なんか、今日、なかなかするどいんちやう？」ミヤコは言いながら、心底不思議そうにキョウの瞳を見つめる。  
「どういうこっちゃわからんわ」キョウは笑った。  
「ああ……、そういえば、」ミヤコは器用にぼんと手を打った。「ほら、かたつむりって、食べられるんやろ？」  
「うそやろ！」キョウは飛び上がる勢いでミヤコの顔を見た。「いやいや、だまされへんで。だいたい、かたつむりなんて、食べられるとこなんかあるんか？ どうやって食べるん？」  
「うーん……、やっぱ、焼くんとちやうか」首を傾げながらミヤコは応える。  
「焼いたらなくなりそうやけどな」  
「味とかも、しょっぱいのはむりそうやし……」  
「とける」  
「そう、とける」  
「せやったら、なめくじ食べてもかわらへんと思うがなあ」キョウは右手で紫陽花の葉をあちこちめぐりながら、「おらんな、なめくじ」  
「なめくじなあ……、かたつむりは、まあ、貝でもええけどなあ……」ミヤコも葉っぱを探り始める。  
「なめくじはわからんなあ」  
「そう……、わからん」  
ミヤコとキョウは同時に溜息を吐いた。そして、どちらからともなく笑い出した。

※

彼女たちの眼の前を、二人の小学生が追い越してゆく。  
黄色い傘とピンク色の傘を差して、赤いランドセルを背負い、少し大きめの長靴を履いた、まだまだ小さい女の子だ。その様子を見ながら、彼女は呟いた。「そうそう、これがロマンちゅうやつやで」  
「どういうことや？」隣でもう一人の少女が首を傾げる。「あ、もしかして、それはちよおっとまずいんとちやう……？」  
「いやいや、ろりこんとはちやうで」  
「まだ、何も言ってないやろ」  
「ああ、してやられたわ」  
「何もしてへんわ」  
そして二人が笑ったとき、空が光った。一瞬の<sup>のち</sup>後に、どすんと大きな音が落ちる。  
「きゃあ！」そう声を上げて、背の低い方の少女は、隣を歩く彼女に抱きつく。  
「何が『きゃあ！』や。雷くらいでびびるなや！」そう言いながらも、彼女は迷惑そうな顔をしている訳ではない。「そう言うのをな、『猫を被る』言うんやで」  
「あら、随分難しい言葉を知つとるな」  
「当たり前や、うちは日本通やからな」  
「そう……」

「何や？」

「いや、別にい……」口に手を当てながら、少女は笑う。

「何がおかしいんや」慌てたように彼女は少女の顔を見つめる。

「だから、何もなくて……」

少女は笑いながらごまかす。

そして、傘の柄を握る手を……、彼女の指を、その上から、包み込むように重ねる。

少女は、誰にも聞こえないように、心の中だけで呟いた。

「たしかに、ロマンやな……」

# 一般作品集

## 月と姫（七乙女昴）

### 月と姫 七乙女昴

満月が爛々と輝く。  
時刻は既に午前二時を過ぎている。少し肌寒い風が吹く深夜の住宅街は静寂に包まれており、外を出歩く人間は誰もいない。  
そんな住宅街から少し離れた場所に大きな公園がある。近辺に住む子供達の遊び場として昼間は喧騒に包まれるが、今宵は平常とは異なる雰囲気漂っていた。  
公園内にある広場の中央に一人の女性が立っていた。月明かりのせい、その女性の金色の髪は眩いほどに輝いている。  
「ねえ、立ちなさいよ。あれだけ挑発しておいてこれで終わりってことは無いでしょ？ ほらっ、早く起きなさい」  
地面に伏している男性の腹部を女性が無造作に蹴り上げると、男性の身体は広場の隅まで吹き飛んだ。そして、静寂が訪れる。  
「今日も収穫無し、か.....明日は南に行ってみようかしら」  
彼女は今日も、独りで夜を彷徨う。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ★

パーティー会場であるにも関わらず、場内は静寂に包まれていた。その静寂を一人の女性が破る。  
「ごきげんよう、クレイン卿。約束通り来てあげたわよ」  
「おお、モーラ嬢、いらっしゃいましたか。いやはや、貴女のような美女が参加してくれるだけで会場に花が咲くというものですよ。どうぞ今宵の素敵な時間をお楽しみください」  
「ええ、存分に楽しませてもらうわ。それでは、また後ほど」  
たおやかな一礼をクレイン卿にした後、モーラは挨拶巡りの為に各テーブルを回る。  
クレイン卿が主催したこのパーティーの参加者は主に独身の中流貴族である。一流ではないとは言え、彼らも由緒ある立派な貴族。誰もがそれなりに煌びやかな衣装に身を包んでおり、いずれも見目麗しい者ばかり。今回のパーティーの主旨は、家柄同士の交流を深める、ことであり、彼らは思い思いの相手を見つけて交流を深める為に集まったはずだった。しかしながら、会場内は今や異様な雰囲気が漂っている。それというのも、男女問わず彼らの視線はただ一人の女性に向いているのだ。その女性こそが、先ほどから各テーブルを回っているモーラである。  
シャンデリアの光を受けて輝く金色の長髪。サファイアを想起させる蒼眼。陶器のような精巧さを感じさせる肢体。身体の線が如実に判る真紅のドレスは背中を大胆に晒す趣向になっており、彼女の身体が揺れる度に髪に隠されていた白い肌が露わになる。  
——あの麗人はどこの家の者だ。  
——判らない。初めて見るお方だ。  
——恐ろしいほどに美しい。  
——まるで女神だ。  
その場に居る誰よりも存在感を放ち、彼らが今までに出逢ったどんな女性よりも美しい。彼らの美的感覚では彼女の美しさを推し量ることが出来ず、故に彼らは畏怖の念すら抱く。  
結局、彼らは誰一人としてモーラの挨拶にぎこちない笑みで応えることしか出来ず、話し掛けることも又叶わなかった。  
クレイン卿の居たテーブルにモーラが戻ると、彼は彼女の見知らぬ青年と談笑をしていた。  
青年との話が丁度終わったのか、クレイン卿はモーラに軽く会釈をして他のテーブルへと移動していく。会釈を返し、それから青年の方へ彼女が視線を向けると、青年は彼女の顔をまじまじと見詰めていた。  
「失礼、貴女がハールマン家の御息女でしょうか？」  
「.....ええ、私がモーラ・ハールマンよ。貴方とは.....初めまして、よね？ お名前を伺っても宜しいかしら？」  
「クルス・アルバートと言います。以後、お見知り置きを」  
握手を求め、クルスは右手を伸ばす。その手を一瞥してから、モーラは右手を伸ばして彼の手を握る。  
「貴方、とても素敵な髪の色をしているわね」  
「そうでしょうか？」  
「ええ。情熱的で男らしい緋色。お父さま譲りなのかしら？」  
「はい、父も私と同じ緋色の髪をしていました」  
「そうだと思った。ちなみに、私の髪は母上譲りなの」  
「成る程、貴女の母上も、さぞやお美しい女性なのでしょう」  
「褒めてくれてありがとうございます。そういえば 貴方 聲音がこの地方のものとは少し違うわね。牛ま



「はほどこののかしら？」

「ウェールズ北部のコンウィという街で育ちました」

「コンウィ……とても素敵なお城がある街ね！」

「御存知でしたか。十三世紀に時の長脛王、エドワード一世によって築き上げられた城があります」

「羨ましいわ。私、お城がとても好きなの。だけど、なかなか実物を見る機会がなくて……リーズ城とボディラム城しかまだ足を運んだことないの。ねえ、もっと話を聞かせてくれる？」

それから暫くの間、モーラとクルスの談笑は続いた。彼は幼い頃から両親と共に欧州各地を渡り歩いており、各地で起きた面白おかしい事件の数々を知っていた。彼女にとって、どれも興味深い話ばかりであり、彼女はその時の詳しい様子を事細かに彼に質問するのだった。

クレイン卿がテーブルへ戻って来た頃には、二人はすっかり意気投合していた。

「御二人とも、随分と親しくなったようですね」

「あら、クレイン卿。少々はしたなかったかしら？」

「いえいえ、感性の合う若者同士なら自然と会話も弾むことでしょうよ。主催した側としては嬉しい限りです。ところで、モーラ嬢、そろそろお時間なのでは？」

クレイン卿の懐中時計は二十二時を指している。

「もうそんな時間なのね。早く帰らないと父上に叱られるわ」

空になったグラスをテーブルに置き、ドレスの裾を摘んでモーラは軽く御辞儀をする。

「そういうわけで、私はこれで失礼させてもらうわ。とても楽しい時間をありがとう、クレイン卿」

「いえいえ、お楽しみ頂けたようでしたら幸いです。それでは、夜道には気をつけてお帰りになってください」

「ええ、ごきげんよう。それから、クルスさんもありがとう。また機会があれば続きを聞かせてね」

モーラはクルスに軽く会釈をしてから席を離れ、各テーブルへ簡単な挨拶を済ませてからクレイン卿と共に屋敷を出た。玄関前には既にハールマン家の執事と思わしき男性が三人待機しており、彼女は屋敷の玄関の前に立つクレイン卿へ一礼した後、ハールマン家の屋敷へと帰っていくのであった。

☆ ☆ ☆ ☆ ★ ★

モーラがクレイン卿の屋敷を出てから数十分が経過した。彼女の歩く速度は依然変わらないが、周囲の景色はどんどん緑の度合いを増している。

郊外にある住宅街を抜け、人気の無い森に足を踏み入れたところでモーラは足を止め、指を鳴らした。すると、それまで側に控えていた三人の執事の姿が一瞬にして無数の小鳥へと変化し、彼女の周囲を飛び回った。

「ここまででいいわ、ありがとう。後は自由に住処まで帰りなさい。……ところで、貴方はまだ帰らなくても良いのかしら？」

誰も居ないはずの空間にモーラが語りかける。数秒の沈黙の後、彼女の視線の先にある樹木の後ろからフードを被った一人の男性が現れた。

「……驚いた。俺のことに気が付いていたのか。隠密行動には結構自信あったんだがなあ」

モーラの方へゆっくりと歩み寄る男性の左手には、一振りの剣が握られている。

「私、人の気配には敏感なの。それで、質問に対する答えは？」

「もし、帰らないつもりだ、と答えたら？」

含み笑いを見せる男性に対し、モーラは金色の髪を靡かせて妖艶に微笑む。

「その時は『私の家で二次会と洒落込まない？』と誘うつもりだったのだけど……どうするの、クルス、さん？」

モーラが右手の人差し指を微かに動かすと、突風が起きて男性のフードがまくれた。結果、男性——クルスの瞳が彼女の前に晒される。敵意のこもった視線を彼からぶつけられ、彼女は内心ほくそ笑む。全ては彼女の算段通りに進んでいた。

「やる気になっているところ申し訳ないけど、戦いたいなら後にして。私、今はそんな気分ではないの」

呆然と立ち尽くすクルスを尻目に、モーラは森の奥へと進む。

正常な警戒心と恐怖心を持つ人間なら決して歩を進めないだろう獣道を抜けると、それまでの不気味な雰囲気から一転し、心地良い風の吹く丘がクルスの眼前に広がった。

「この丘の周辺一帯がハールマン家の所有地よ。どう？ なかなか良い場所でしょ？」

先導しているモーラに倣い、クルスも周囲を見渡す。

月明かりを頼りにするしかなかった森の中と違い、仄かな光が丘一帯を包んでいる。驚くべきことに、その発光源は群生している花々であった。

「そうだな……実に幻想的な場所だ。これが自然の生み出した奇跡の産物なら、国は此処を保護区にするべきだな。しかし、この花たちはどうやら神の恵みではないらしい」

「あら、それなら何だと言うの？」

「間髪入れずに答えるクルス。

「魔力によって咲く花。つまり、洒落た小道具の一つだ。もっとも、これほどの数を持続的に咲かせられる人間なんて見聞きしたことがないが」

「大正解。確かにこの子たちは人工の花よ。大地に栄養があろうとなかろうと、魔力さえ取りこめば咲くことができる。それに、今夜は満月だから……と、屋敷の前に着いたわね」

「光る花に囲まれているとは言え、外壁も前庭も無い屋敷の外観は小金持ちの平民の家と相違ない。深い森を抜けた場所に建っているという点を除けば、この屋敷に絶世の美女が住んでいるとは誰も想像できないだろう。」

「見てくれは少々貧相だけど、内装はなかなか素敵よ。さあ、入ってみて」

クルスは言われた通りに扉を開き、屋敷内へ足を踏み入れた。

屋敷内の空気は冷たかった。灯りが点いていないことは外から見て判っていたが、それでも、眷属の一体や十体は潜んでいることをクルスは想定していた。しかし、実際には、眷属はおろか執事やメイドといった従者の姿すら見受けられない。

吸血鬼とは、眷属の数と質を以って己が強者であることを誇示する種族である。欧州各地を渡り歩く吸血鬼殺しであるクルスの経験則からすれば、モーラの一人暮らし、は有り得ないはずなのだ。

しかし、この瞬間、彼のその常識は覆された。

「さすがに月明かりだけでは暗いわね。今、明るくするわ」

モーラが指を鳴らした瞬間、何らかの魔術が発動したことをクルスは感じ取った。夜明けが訪れたかのように屋敷内が少しずつ明るくなり始める。十数秒が経つ頃には先刻のパーティー会場と同等の明るさになった。

クルスは改めて屋敷内を見回す。

玄関ホールは吹き抜けになっており、白い壁には風景画や彫刻オブジェが、床には紅い絨毯が敷き詰められている。ホールの四隅には石柱が天井まで伸びており、左右には二階へと続く螺旋階段。各部屋ないし渡り廊下へと続く扉は一階だけで四つ。二階を合わせるとかなりの部屋数がありそうだと判断できる。

「外観に比べて随分と広く感じられるな。それと、天井のシャンデリアが気になる。どうやら一般的な型とは発光方法が異なるようだが」

クルスが見上げた天井には、小型のシャンデリアが計八つ垂れ下がっている。

「よく分かったわね。確かに屋敷内のシャンデリアは光る仕組みが普通のそれとは異なっているわ。実を言うと、この屋敷内の器械は全て魔力によって動いているの」

「……熱源として魔力を貯蔵する術式か。珍しい技術を持っているじゃないか」

「ええ、魔術に詳しい父上が内装を改造したの。内装だけ派手にして外観はそのままにしておくなんて、お茶目な人でしょ？」

「成程。貴女の父上は大層凄腕の魔術師でもあるらしい。そして、それは貴女にも受け継がれているという訳か……魔術を扱う吸血鬼だったとは、酷く厄介な御仁だ」

「あら、厄介だなんて随分と酷い言い草ね。それに吸血鬼だなんて謂れもない——」

「先月、そして先々月、貴女が男性を襲っていた所が目撃されている。今日と同じ、満月の夜だ」

クルスはモーラを正面から問いただす。

「襲われていた男性の身元は判明していないが、目撃者の証言と貴女の身体的特徴は合致している。それに、使い魔を使役していたことは俺の目で確かめた。間違いなく、貴女が犯人だ」

臆することなくモーラを指差すクルス。

数秒の静寂の後、モーラは小さく溜め息を吐く。

「……いいわ。貴方がそこまで私と戦いたいと言うのなら、付き合っただけ。幸い、時間はまだ充分に残っているし」

それまで浮かべていた微笑を崩し、モーラはおもむろに瞳を閉じた。

「改めて自己紹介をさせてもらうわ」

依然として変わらない、気品を感じる佇まい。

「私の名はモーラ・ハールマン。今宵は存分に愉しみましょう」

しかしながら、次に彼女が瞼を開いた時、二つの蒼は紅へと変貌していた。

月夜に照らされる男女。

影が重なる度に深紅の花びらが舞い、影が離れる度に名残惜しそうに散る。エンハンス

ナイフよりも鋭い爪先で皮膚を引き裂かれる度に苦悶の表情が浮かぶ。身体能力強化の魔術をかけているとは言え、相手も同じ強化の魔法が使えらるれば大した意味を成さない。

近付いて攻撃しようとするれば体術でいなされ、距離を離そうとするれば魔力を練り固めた弾丸が襲ってくる。遠距離でも近距離でも実力差は歴然であり、詰まる所、防戦一方。

弾丸の嵐を潜り抜けて接近し、決死の袈裟斬りを試みる。しかし、左半身を反らすだけで容易に回避されてしまい、相手は逆に、反らした勢いを利用して脇腹を目掛けて回し蹴りを放つ。防御が間に合わずに直撃した結果、二十メートルほど吹き飛び、その拍子に剣が手から離れる。

「剣士が剣を手放すなんて駄目じゃない。死にたいの？」

直紅に輝くドレスを身に纏った女——モーラがクルスに肉蕩する。彼女の空准を咄嗟の垂直蹴り

で避けたものの、それを読んでいた彼女は振り向きざまに左手から弾丸を放つ。直撃。激しく地に叩き付けられた彼の上半身に彼女がのしかかり、喉元を左手で締め付ける。呼吸が出来ない息苦しきから何とかして逃れようともがくが、彼女は万力のように無慈悲に締め続ける。「最初の威勢は一体何処に消えたの？ 痛い？ 辛い？ 苦しい？ もう止める？ 降参？」このまま窒息死してしまうというところで、モーラの身体が忽然クルスから離れた。窒息死は避けられたものの、失血多量による貧血と酸欠のせいで彼の意識は遠のき始めていた。それでも尚、全身全霊を込めて上半身を起こし、モーラの姿を探す。一人の男と対峙しているモーラの後ろ姿を確認したと同時に、クルスは意識を手放した。

☆ ☆ ☆ ★ ★ ★

月夜に照らされる男女。  
男の影がゆっくりと女の影に近づく。  
女の影もそれに合わせて動く。背後で倒れている青年を隠すように、あるいは護るようにして男の目前に立ち塞がった。  
男は足を止め、血に濡れた女を舐め回すように視る。不躰な視線を浴びせられた女は不快の色を隠そうともせず男を睨みつけたものの、その視線は却って男に下卑た笑みを浮かべさせた。「おやおや、こんな夜更けに若い男女が何をしているのでしょうか？」  
仰々しく礼をする男の容貌は三十代前半相応。大量の血が付着している女のドレスとは対照的に、身に纏っている純白のタキシードには染み一つ付着していない。  
「用が無いなら今すぐ消えて」  
女の放つ殺気は先程の戦闘時とは比べ物にならない。今なら視線だけで人を射抜き殺すことさえ可能かもしれない。  
「これはこれは、御取り込み中のところ申し訳ありません。まさか逢瀬の真っ最中だったとは予想していなかったもので。それにしても……随分とお愉しみだった様子」  
そんな殺気を物ともせず、男は涼しげな顔で流暢に語る。  
「用が無いなら消えてって言っているじゃない！」  
「おお、怖い怖い。そんなに怒らないでくださいよ。折角の美人が台無し……どころかますます魅力的に見えてしまう。ところで――やはり`彼、でしたか」  
男の視線の先には、気絶している赤髪の青年。  
「……アンタには関係無いでしょ。それに、私が要請する以上の干渉は不要だと言ったはずよ」  
「今回の邂逅を用意したワタシに対して、それは些か扱いがぞんざい過ぎだとは思いませんか？  
ワタシが巧く根回ししたからこそ、こうして彼が貴女の下へやって来てくれたのですよ？」  
「それについては感謝している。だけど、それとこれとは話が別よ。既に契約は満了し、対価は支払い済み。アンタの道楽に付き合う義理は私にはもう無い」  
「ふむ、貴女を少しだけでも味わえるかもしれないと期待して来てみたのですが、どうやらそれは叶わない様子」  
男はシルクハットを深く被り直した。  
「さて、そろそろ彼の手当てをするべきでしょう。このまま放っておくと死んでしまいますよ？」

」  
急所に傷を受けていないとは言え、クルスの身体からは血が流れ続けている。このまま放って置けば彼は失血死してしまう。  
「判っている。アンタが居なくなったらすぐに屋敷の中に運んで手当をする。だから、今すぐ消え失せろ」  
「相も変わらず手厳しい。はて、ワタシが人間だったらもう少し優しく接してくれるのでしょうか？」  
「……種族のことを抜きにしても、私はアンタの性格が気に入らない。人間を墮として愉悦に浸るなんて下衆の所業極まりないわ。だから、アンタの手のひらで踊るなんて真っ平ごめん」  
「……実に素晴らしい！ ああ、高嶺の花という言葉はやはり貴女の為の言葉だ！ 貴女のことを知れば知るほど愛おしきが増してくる。どうか、その気高き魂を大切に。それでは、またいつか逢いましょう。――御機嫌よう、モーラ嬢」  
出会った時と同様、二人の真紅の瞳が交錯する。  
「――次は来世で遭いましょう。ごきげんよう、クレイン卿」  
吸血鬼は森の中へ颯爽と姿を消した。それを確認したモーラは微動だにしないクルスの身体を担ぎ、屋敷の中へと戻る。  
夜はまだ長く、満月は未だ衰えることを知らない。

☆ ☆ ☆ ★ ★ ★

クルスが目を覚ました時、真っ先に視界に映ったのは蒼い宝石だった。ぼやける視界の中で、二つの宝石だけが恐ろしいほど鮮明に映る。  
「おはよう。よく眠れた？」  
「俺は 確か 貴女に敗れてから意識を失って |

「ええ、だから、私が屋敷まで運んで治療をしておいたわ。ついでに、血で汚れてしまった衣服の着替えも」

安楽椅子に座っているモーラの服装が、赤いドレスから薄桃色のネグリジェへと変わっていることにクルスは気付く。上体を起こして自身の服装も確かめようとした途端、彼女が彼の肩を押さえつけた。

「目覚めたばかりなんだから、もう暫くは大人しくしていて。ええっと……背丈や骨格は父上とほぼ同じみたいだから窮屈ではないはずなのだけれど、大丈夫？」

「あ、ああ、それは全く問題ない、問題ないのだが……そもそも、どうして俺は生きている？ いや、生かされている？ どうして俺に治療を施した？ その行為の意図は？」

吸血鬼と人間による、殺すか殺されるかの死合。それに負けたクルスが生き残る可能性は万が一も無いはずだった。しかしながら、結果として、彼は死ぬどころか五体満足の状態で見ている。現状を把握した彼の心に真っ先に浮かんだのは、生の喜びではなく、困惑。

「とりあえず、紅茶でも飲む？ 少しは心が落ち着くはずよ」

モーラは立ち上がり、薔薇の模様に入ったティーカップに紅茶を注ごうとしたが、クルスが上げた制止の声を聞いて動きを止める。

「その前に一つ聞かせてくれ。今は何時だ？」

クルスは窓の外に視線を向ける。窓の外は暗闇であり、少なくとも太陽が出ていないことは判る。

「もうすぐ日付が変わるところね」

「……ちょっと待て。それは流石におかしい。クレイン卿の屋敷を出たのが二十二時、そこからここまで歩き、それから貴女と戦い、意識を失って……済まない、質問を変える。俺は気絶してから何時間寝ていた？」

「そうね、四十六時間くらいかしら」

「……二日間も眠り続けていたのか。道理で異常に胃が悲鳴を上げている訳だ」

「ごめんなさい、紅茶よりも先に料理を出すべきだったわ。少し待っていて、すぐに温めて持ってくるから」

「この手厚い看病のことも含めて色々問いたいのだが……今はとにかく何か食べたい。悪いが宜しく頼む」

モーラが用意した料理に手をつけ始めてから約三十分、クルスは一時も食事の手を休めなかった。いや、休められなかった。二人前を軽々と平らげ、食後の紅茶までも一気に飲み干してから、彼はようやく一息つくことが出来た。

「御馳走さま。正直、美味すぎて貴女が吸血鬼だってことを忘れかけていた。貴女は人間と同じ食事をしないだろうに、どうして料理が得意なんだ？」

「答えは単純にして明快。私、人間だもの」

「そのようなジョークを聞きかかったわけではないのだが」

「本当よ。貴方、まだ私のことを誤解しているのね」

溜め息を吐いてクルスを睨み付けるモーラ。気圧されたクルスは視線を逸らしつつ弁解を図る。

「誤解も何も、俺は『恐ろしく綺麗で強力な吸血鬼』という情報を元にして貴女を探し当てた。

第一、貴女と戦った時に人間離れした力を体感している」

「なかなか強情ね……まあ、確かに私の振る舞い方が悪かったのかもしれないわ。わかった、よく聞きなさい」

カップをテーブルに置き、モーラはクルスの目を見詰める。

「私は吸血鬼でも、ましてや奴らの眷属でもないわ。吸血鬼の血が混じった人間……それが私、モーラ・ハールマンという女の正体よ」

ゆっくりとモーラは語り始める。彼女の出生に纏わる不幸な事件と、今は亡き両親の宿敵の話を

大きく息を吐くとモーラは立ち上がり、空になったカップに紅茶を淹れた。更に、戸棚から取り出したウイスキーを少量加えてゆったりとかき混ぜる。その様子をぼんやりと見ていたクルスは数十分振りに口を開いた。

「貴女が人間だと言い張る理由がようやく解った。その話が本当なら、確かに貴女は人間の子だ」

「やっと信じてくれたのね。ふう、これで本題が切り出せる」

「まだ信じ切っていないのだが……まあいい。それで、本題とは一体何なんだ？」

「貴方を生かしておいた理由よ。私は、私の家族の幸せを壊した吸血鬼が許せない。だから、私は父上が亡くなって以来、各地を回って吸血鬼と接触し、母上を襲った奴の情報を集めてきた。そして先月、遂にその正体を掴んだ」

モーラは一度言葉を切り、ウイスキーティーを飲む。それからカップを静かに置いて目を瞑り、自身の宿敵の名を口にした。

「フリッツ・デンケ——それが私の復讐すべき吸血鬼の名前」

「フリッツ・デンケ……確か、港町を取り仕切っている男がそんな名前だったな」

ドイツ北部 バルト海沿岸部の土地を領有している有力な地主にして、自他共に認める大の女

好き。それがフリッツ・デンケという男に対する社会的認識である。

「十三日後、新月の夜に開かれる社交ダンスパーティーに彼が参加することになっている。そこで、貴方に一つ頼みたいことがあるの」

「俺に、復讐の手伝いをしろ、と？」

「端的に言えばそうなるわね。でも、心配しないで。貴方に頼みたいのは、役者としてのお仕事と最期の後始末だけよ」

モーラはクルスに作戦の概要を説明した。内容自体は作戦と呼べるような代物ではなく、むしろ彼には非合理的で欠陥だらけのように思えた。彼がその事を告げると、彼女は上目遣いで『お願い』と言い続ける。そんなやり取りを数十回ほど交わした後、根気負けした彼は渋々と言った様子で受諾した。

それから彼は、モーラに誘われるままに屋敷に暫く滞在することを決めた。その時の彼女の嬉しそうな様子を見て、彼は初めて彼女に見惚れてしまう。

シャワーを浴びている間、彼は今までの出来事を整理する。モーラを殺すことが当初の目的だったこと。自身の中で彼女に対する敵意が既に無くなっていること。彼女の事を放って置けなくなってしまうこと。彼女の手が暖かかったこと。

クルスは自身の顔面にシャワーを浴びせる。彼もまた、両親を失った世界で誰かの温もりに飢えていた。

☆ ★ ★ ★ ★ ★

連日続いてきた長雨が去り、それまで身を潜めていた数多の星が煌々と瞬く。

イギリス南部に在るリゾートタウン『ブライトン』で最も大きいホテルにモーラは足を踏み入れた。開始時刻より五分ほど遅れての入場であり、扉を開けた途端、当然ながら参加者の注目を一身に浴びる。しかし、参加者唯一の遅刻者を咎める者は誰も居ない。それどころか、声を発する者すら居ない——一名を除いて。

「御機嫌麗しゅう、モーラ嬢。相も変わらず、有無を言わせぬ美しさですな。しかしながら、遅刻とはあまり感心しませんぞ」

「.....ごきげんよう、クレイン卿。貴方も今回のパーティーの参加者だったのね。サプライズにしておくなんて、相変わらずいけずな人」

「申し訳ありません、一度貴女の驚いた顔を見てみたかったです。御詫びと言っては何ですが、後々の事後処理、はお任せください」

「.....わかったわ。それじゃあ、宜しく。ただし、あまり盛り過ぎないように」

「はっはっは、肝に銘じておきます。それでは、ワタシはこれで失礼。僭越ながら、待たせている女性が他に居ますので」

クレイン卿の視線の先には、群青色のドレスに眩い装飾品を身に着けた女性が独りでグラスの中身を空けている。唯一、参加者の中でモーラとクレイン卿のやり取りを注視していない。

「あら、恋人なんて素敵な存在が居たのね。ごゆっくり」

クレイン卿は一礼してモーラの側を離れる。それを合図にして、ホール内はようやく緊張状態から解放された。次第に四方から笑い声が聞こえるようになり、モーラが最奥のテーブル席に着いた頃には先程の静寂など無かったかのように振る舞う人が大半であった。

それでも尚、数人から視線を集め続けているモーラに、一人の男性が近寄って来た。

「失礼、何処かで会ったことないかい？」

「.....あら、奇遇ね。私もちようど同じことを思っていたわ」

「貴女のような美女を忘れるはずがないんだが.....ああ、申し訳ない、自己紹介が遅れた。オレは、フリッツ・デンケと言う。宜しければ、貴女の名前を——」

「運命、かしらね」

「.....は？」

「私、今日ここで貴方と会えたことが運命のように思えてならないの。ねえ、お願い。どうか私と踊ってくれない？」

指先でフリッツの頬を艶めかしくなぞるモーラ。今までに抱いたどんな女からも感じたことの無い色気を肌で感じ、彼は魔法にかかったかのように彼女の言葉を受け入れてしまう。

「あ、ああ、勿論だとも！ このフリッツ、喜んで御相手させてもらう！ それでは.....ゴホン。オレと、踊っていただけますか？」

モーラは密着させていた身体を離し、フリッツは改めて彼女に右手を差し伸べる。ホール中央では殆どのペアが流れているワルツ楽曲に合わせて既に踊り始めており、二人の周辺には誰も居ない。

「ええ、喜んで」

モーラは微笑み、フリッツの手の上に自身の手を重ねる。その瞬間、二人は初めて見詰め合った。行きましょう、というモーラの声と共に、初めからそうすることが定められていたかのようにホール中央へと踊り出る。中央で舞踏する美男美女のペアに、観る者も踊る者も心を奪われた。そして、ホールは二人の独壇場となる。

ワルツ タンゴ ブルース チャチャ ジルバを踊り終えると、モーラとフリッツはテーブル席

へ戻ることにした。二人が良くも悪くも目立ちすぎてしまい、主催者側からやんわりと休憩を勧められた為である。

「とても楽しかったわ。私、足手まといになってなかったかしら？」

モーラは右手でグラスを持ち、左手をフリッツに腕を絡ませて上目遣いで見る。

「そんなこと全くないさ。むしろ、オレの方が貴女に釣り合っているのか終始不安だった。ところで、すっかり訊きそびれていたんだが、貴女の名前を――」

「いけない、もう時間だわ。ごめんなさい、これからどうしても外せない用事があるの」

絡ませていた腕を解き、モーラは申し訳なさそうに俯く。

「……つまり、もう帰らなければならない？」

「ええ、残念だけど。折角こうして貴方に出逢えたのに別れなければならないなんて、神様って残酷ね」

「そうか……良かったら、途中まで見送りするよ」

「本当？ 私、貴方とお話したいことが一杯あるわ」

「こうして出逢えたのも何かの縁……いや、運命だろう。是非とも貴女と言う女神に何か御礼をしたい。さあ、そうと決まれば早く此処を出よう。主催者にはオレから言うておくから」

フリッツは逸る気持ちを抑えて主催者に途中退席の旨を伝え、モーラと腕を組んでホテルを出る。

南東の方角へ歩き、煌びやかな高級レストランやナイトクラブの前を通り過ぎると、徐々に海が見え始める。砂浜では、多くのカップルが思い思いの幸せな一時を過ごしている。

「さて、これからどうする？ オレが泊まっているホテルはすぐ近くにあるけど？」

「あら、随分と自分勝手な送り狼さんなのね。でも、好きよ、そういう人」

モーラは更にフリッツに身体を寄せた。その反応を見て、彼は極上の獲物が釣れたことを改めて悟る。

フリッツはモーラの用事が嘘であることを確信していた。同時に、彼女が自身に抱かれたがっていることも確信していた。それと言うのも、彼女が時計を見ずに『帰らなければならない』と口にしたことの真意を推測した結果である。

「オレが付いて来なかったらどうする気だったんだ？」

「その時はその時よ。歩いている適当な男に声をかけていたわ」

「……まったく、その容姿なら引く手数多だろうに、何だってこんな真似をしているんだか。一体、今まで何人の男を愉しませてきたんだ？」

「あら、自分だって何人も侍らせているのに嫉妬？ 意外に可愛いところあるじゃない」

「ぐっ……何だって良いだろう。ほら、このままチェックインするのか？」

「そのことなだけで、ホテルはちょっと……」

「何か不安なことでもあるのか？」

「……私、声が人よりも大きい。前もそのせいで面倒なことに巻き込まれたことがあってね……だから、ホテルは嫌。その代わり、私の別荘に来ない？ そこなら誰も居ないから安心できるし、多少無理しても平気よ？」

耳元で囁くモーラの甘い吐息が、百戦錬磨であるはずのフリッツの心拍数をいとも容易く加速させる。会話の主導権はモーラが完全に握っていた。

「わ、判った、そうしよう。それじゃあ、道案内を頼む」

「ええ、そう遠くないところにあるから安心して。それじゃあ、行きましょうか」

一組の男女が深い森の中へと足を踏み入れる。視界の悪い獣道を進むと、それまでの不気味な雰囲気から一転し、心地良い風の吹く丘が二人の眼前に広がった。

「到着したわ。どう？ なかなか洒落た場所でしょ？」

「……これは凄い。実に神秘的な場所だ。足元で光っている花は何と言う種類の花なんだ？」

「明日の朝になったら教えてあげる。それよりも今は……ねえ、私、これからの事を想像するだけでドキドキが止まらないの。早く別荘の中に入りましょう？」

急かすようにして別荘、もといハールマン家の屋敷の中にフリッツを入れるモーラ。屋敷の中に彼を入れる瞬間、彼女は彼の口角が上がった瞬間を見逃さなかった。

吸血鬼は招かれたいと人の家に入ることが出来ない――故に、吸血鬼は招かれた家の主を`獲物`と認識するようになる。

玄関の傍に置いておいたランタンを点け、階段を上って二階へと向かう。モーラが寝室のドアを開けた瞬間、屋敷の玄関が開いた。同時に、若い男の声が屋敷内に響き渡る。

「お嬢様！ いらっしゃるのですか！」

執事服を着た男性が階段を上り始める。その音を寝室のドア越しに聞く二人。

「ごめんなさい。最悪のタイミングで執事が私の居場所を突き止めたみたい」

「……ふむ、道中で話していた通り、確かに仕事熱心な執事らしい。さて、これからどうするつもりだ？」

「大丈夫よ、適当に言い包めて帰らせるわ。それまで貴方はベッドの下に隠れていて」

「……仕方ない。ちょっとしたスリルを楽しませてもらうか」

モーラに言われて渋々ベッドの下に身を潜めるフリッツ。それから数十秒後、寝室のドアが荒々しくノックされた。



「そこに居るのでしょう、お嬢様！ 今日と言う今日は観念してもらいますからね！」  
「はあ……入ってきて良いわよ、アル」  
その声を聞くや否や、執事がドアを開けてモーラに詰め寄る。  
「お嬢様、どうして稽古をサボって別荘に来ているのです？」  
「もう稽古は必要ないと何度も言っているでしょ？ それに、肝心の婿候補がいらないのに花嫁修業をしたところで何の意味もないわ。それならまだ、花婿候補を探し回る方が有益よ」  
「その言い訳が何度も通用すると思ったら大間違い——」  
「アル、紅茶を淹れなさい。命令よ」  
「……はあ、かしこまりました。不本意極まりないですが、少々お待ちください」  
紅茶を淹れる準備を進める執事を一瞥した後、モーラは術式が書かれた紙を持って静かに魔力を込め始める。  
「お待ちせ致しました、ウイスキーティーです」  
数分後、執事がカップをテーブルの上に置いた。そこにモーラが指先を向けると、術式は静かに発動して紅茶に魔力が溶け込み始める。込められた術式の効果は、筋肉弛緩と催眠。  
「ありがとう、アル。それと、今日はもう帰って。本当のことを言うとね、ついさっき花婿候補に振られたから泣きそうなの」  
「……申し訳ありません、そこまで考えが至りませんでした。今日は大人しく帰ります。ごゆっくりお休みください、お嬢様」  
「ええ、お休みなさい」  
入って来た時の勢いとは違い、執事は気遣うように足音を忍ばせて寝室を出た。ドアの閉まる音が聞こえてから数十秒後、ベッドの下からフリッツが這い出る。  
「何と言うか、随分と執事の扱いには手馴れているんだな。巧く話が進み過ぎて、拍子抜けしちゃったよ」  
「ご期待にそえず、ごめんなさい。お詫びと言ってはなんだけど、そのウイスキーティーを飲んでもいいわよ。喉、渴いているでしょ？ 私は自分で淹れるから、遠慮しないで飲んで頂戴」  
「そうか、なら飲ませてもらう」  
「ウチの執事は、紅茶の淹れ方だけは一人前なの」  
フリッツはウイスキーティーを一気に飲み干した。  
「……確かに美味しいな。ところで、聞きそびれていたアンタの名前を……つと、とと。何だ？ やけに眠くなってきやがった」  
突然、強烈な脱力感と眠気にフリッツは襲われた。外傷に強い吸血鬼だろうと、体内の異常をすぐに治すことは出来ない。  
「私のことは、姫、とでも呼んでちょうだい。どうせ一夜限りの関係ですもの。後腐れは無い方がいいわ」  
「そう……か。オ…は綺…な…が抱けれ…それ…良……」  
数秒の沈黙の後、フリッツは寝息を発し始めた。  
「……眠ったわね。チャームをかけられたまま殺されるなんて、実に滑稽な吸血鬼ね」  
絨毯に伏して動かないフリッツを背負い、モーラは屋敷の裏庭へ運ぶ。裏庭の中心部に出ると、全長二メートルの十字架のモニュメントが待っていた。十字架の傍には執事服に身を包んだクルスの姿も見える。モーラは彼と協力して十字架にフリッツの身体を鎖で嚴重に縛り付ける。そして——着火。

★ ★ ★ ★ ★ ★

数十分後。驚くほど容易く、フリッツはただの灰と化した。その灰をガラス瓶に詰め込みながらクルスが呟く。  
「これで、満足したのか？」  
「大満足よ。一滴の血も流すことなく掴んだ完全な勝利に不満なんかあるはずがないわ。後は、これを海に流せば再生することは二度と無いはずよ」  
「でも、当人ではない俺が言うのも何だが……遣る瀬無いな」  
「……確かにあの整った顔をほんの少しでも良いから歪ませてやりたかったわ。母上の代わりに呪詛の言葉を吐いてやりたかったわ。でも、私は人間として、父上と母上の間に生まれた人間の子として、吸血鬼に復讐したかったの。だから、これで良かったのよ」  
灰が詰まった瓶を片手に持ち、二人は無言で歩く。裏庭から海へと続く崖下の道を進むにつれて、波の音が大きくなる。淡い輝きを放つ彼岸花が咲いている地点で、二人は足を止めた。  
「さて、これが本当の最期。数年に渡る復讐劇の、幕引き」  
モーラが瓶の蓋を緩め、水平線を目掛けて全力で瓶を投げる。助走の割には大した飛距離が出なく、クルスの肉眼で捉えられる範囲で水飛沫が上がった。しかし、それでも、彼女の復讐はこれで終焉を迎えた。  
「ねえ、以前、私が言ったお願いの二つ目、憶えている？」  
海を見詰めたまま、モーラはクルスに問い掛ける。  
「ああ、憶えているさ。それと、覚悟も決めた」  
「ありがとう。それじゃあ、頼んだわよ」

おもむろに瞼を閉じ、モーラは静かに「最期」を待つ。その背中を目指し、彼は剣を抜いてゆっくりと歩み寄る。

――静止。一閃。斬。

「モーラ・ハールマンという女の数奇な生涯は、たった今、幕を閉じた」

金色の絹が海風に攫われて宙を舞う。

「ところが、幸か不幸か、役目を終えた器と魂は現世に留まってしまったらしい。さて、そんなガラクタを持ち帰ったところで俺には何の得にもならない。だから、俺はこの器と魂に新たな名前を付けて持ち帰ることにする」

振り向いた女性の目には、涙が滲んでいる。

「モーラ・アルバート――お前は今日からその名で生きろ。俺に尽くせ。俺に身も心も捧げろ。

――絶対に死ぬな」

この瞬間、モーラ・アルバートという一人の女性が誕生した。

《閉幕》



## ア・ローン・プレイヤー（文月遼、）

ア・ローン・プレイヤー

文月遼、

「撃ち墜とされる日があるとすれば、そいつはきっと、今日みたいな日だと思うんだ。お前はどうか？ ウィズ？」

夜の闇に紛れ、真っ黒な飛行機が空を飛んでいた。F266——スウィート・ウォーカー<sup>ヨタカ</sup>と呼ばれた戦闘機は柔らかな月光に照らされ、従来の飛行機とはかけ離れた平べったく、角張った外観を晒し出している。

カーキ色のジャケットと、近未来じみたデザインの丸いヘルメットを被った男、パイロットであるデール・ゼルコ大尉はうんざりしたように、それでいて機内に流れる大音量の『デンジャー・ゾーン』に負けない程度で前に向かって喋る。

返事は来なかった。薄暗く、狭い機内には至る所に取り付けられた計器類がぼうつとしたほどの暗い緑色の光を放つばかりで、彼以外の姿は無い。単座(1人乗り)のため、当然同乗者がいるはずもない。

僚機と言うべき機体も、管制機もいる。しかし、ある理由によって通信は制限されている。彼の孤独は大音量で流される音楽。そして、キャノピーに汚い文字で書かれたケン・ウィズ、デュエル大尉からのサインに向けた愚痴だけが彼の孤独を癒している。

スウィート・ウォーカーは俗に言うステルス……レーダーから探知されにくい、見えない飛行機だった。暗闇を長い間飛び続け、監視の目を欺きながら敵陣深くに忍び込み、重要施設と1メートルも変わらない精度で必殺の電子誘導爆弾<sup>ベイブウェイ</sup>を叩きこむ。それが彼の仕事だった。

それ故に、スウィート・ウォーカーは孤独な飛行を余儀なくされる。ステルスとはいえ透明になれるわけではないし、そのような技術で、爆撃任務の護衛が出来るような高性能の護衛戦闘機を作ることは未だにかなわない。

通信の制限もそうだ。楽しいお喋り。それは上司の悪口であったり、機体への文句であったり。任務の詳細であったり——

をほんの拍子に聞かれて、対空見張りを厳とされてはのろのろと飛ぶ爆撃機は的でしかない。

仲間から遠く離れ、外部からの情報ほとんど遮断し、暗夜を何時間と飛び続ける。そうすること以外には、この巨体を隠す術は無い。孤独に飛び続けるはぐれた鳥。それがスウィート・ウォーカーだった。

ゼルコ大尉は目の前にある全地球測位モニターを眺める。今のところは規定のルートを、予定通りの時間をコンマの狂いも無く飛行していた。

「同じ航路で行けなんてね……こいつを過信しすぎやしないか、ええ？」

ゼルコ大尉はグローブをした手で計器を小突いた。

こうした攻撃へのルートは作戦ごとに変化させるのが常識である。腹にたくさんの爆弾を積んでのろのろと飛ぶスウィート・ウォーカーは爆撃機であり、本来であれば戦闘機に付けられる

ファイター

「F」の名を冠してはいるものの、スウィート・ウォーカーは音速で飛ぶことも、派手な機動も出来ない。それどころか、まともレーダーさえ持っていないかった。

勇ましくも <sup>ナイトジャー</sup>ヨタカ と呼ばれていたはずが、いつの間にか <sup>スウィート・ウォーカー</sup>娼婦 という下品で弱弱しい名前と呼ばれるのも、自衛の手段の心細さから来ているのだ。

とはいえ航行ルートに、機体の貧弱さに文句を言っても何も変わらない。自動操縦である上、ルートを変えるほどの無駄な燃料も時間も——おっと、身分もか。俺には何もかもが足りない。ゼルコ大尉は心の中でそう付け加えた。

別の計器を確認して、機体の姿勢を確かめる。計器は確かにスウィート・ウォーカーが水平に飛んでいることを示していた。それでも、ゼルコ大尉は手元のパニックスイッチを押す。コンピューター制御によって機体の姿勢が改めて調節された。

複雑な機動を行う戦闘機、そして平衡感覚を失うような暗闇を長時間にわたって飛ぶ爆撃機には、そうした補助機能はなくてはならないものだった。

「俺を臆病だって笑うか？」

ゼルコ大尉が自嘲気味に笑う。長時間の夜間飛行はどれだけ訓練を積んだプロフェッショナルであっても判断を鈍らせる力がある。

鈍った判断は機器への不信、ないし自分の腕への過信に姿を変える。アルコールや薬物のように直接的な原因を思い至らせることさえなく、それと同じように、いや。それ以上に空を飛ぶパイロット達を蝕んでいく。

再度ゼルコ大尉は計器を確認した。変化は無く、体が揺れる感覚も無い。それが計器と共に大尉が正常であることを示している。

流していた音楽のボリュームを下げる。電子の地図に、目的の町が見えたからだ。読むことが出来ない目的地の名前が示されていた。どこそこの国にあるどこそこ市。その程度の認識でしかなかった。

ゼルコ大尉の任務は町の中にあるビルの1つ。民族紛争を広げた犯人—— <sup>ジェノサイド</sup>虐殺 のリーダーである誰それ将軍が拠点にしているというビルを誘導爆弾によって破壊することだ。機内を流れていたボリュームを下げ、無線に報告を送る。

「目標に近付いた。アルマイル31アウト」

最小限の連絡を済ませ、音楽のボリュームを再度上げる。

この戦争がどうして始まったのか、どうして全く関係のない自分たちが出る羽目になったのか、ゼルコ大尉は知らない。

民族対立による紛争。多数派による少数派の抑圧。そして反抗。世界の警察のお出ましというお決まりのコース。それが彼の知る限りの情報だった。

「俺たちにこんな奥にまで入らせて、まだ戦争をしようって言うのかよ」

ゼルコ大尉はブリーフィングで眺めた将軍の顔を思い浮かべた。浅黒い肌に、整髪料でてらてらと光る白の混じった髪。さまざまな欲望にぎらついた眼——そこまでだった。

ボタンを1つ押すだけだ。ゼルコ大尉は己に言い聞かせる。俺はボタンを押すだけだ。下で何かの爆発が起きようとも俺に直接のかかわりはない。殺すのは爆弾だ。1メートルの誤差さえなく目的を狙うことの出来る爆弾なのだ。

狭いコクピットを埋め尽くすうるさい音楽は彼にとって耳栓であり、アイマスクだった。ボタンを押すことで目的の、もしかすると中には何の罪も無い人間を殺すという事実を覆い隠すものだった。

そこでどんな人が暮らし、笑い合い、夢を育てているのかを忘れ去るものだった。

「スリー、ツー、ワン……」

ぼうっと薄暗い緑の光を放つ腕時計を眺めながら、その針が8時15分を示した瞬間、ゼルコ大尉はスイッチを押した。

弾薬庫が開かれ、精密航空電子誘導装備——ペイブが重力に従うままに投下される。

ぼやけた緑色の暗視モニタに、子供が描いたような、不細工な形状の爆弾が2つ落ちてゆく。

爆弾のお尻にある安定翼が開き、折りたたまれていたカナード翼が大きくそのからだを伸ばす。先端に備わったレーザーの照射装置をはじめとする電子機器が現在位置や速度を逐一管理する。家一軒が悠に建つほどの価値を持ったものがわずか数秒で周囲のものを巻き込み、爆発を起こすまでにはそれだけの手間がかかる。着弾<sup>インパクト</sup>の数秒間、ゼルコ大尉は誘導爆弾の仕組みを頭の中でなぞっていた。

戦争の仕組みは分からないのに、機械がどのように殺すのかという仕組みが分かるのは不思議だなど、酸素の薄い機内で大尉はぼんやりと思った。

「来ました。フリスビーです」

何十年も昔の地对空ミサイルを備えた車の中で、ダニエル・ゾルタン中佐は緊張をはらんだ部下の報告に、固い椅子に沈めていた身をわずかに起こした。

彼らも決して無能では無い。ステルスと言えども透明になったり、攻撃をすり抜けたりする訳ではないことを知っていた。

そして、機体の形で受動<sup>パッシブ</sup>のステルスを実現したフリスビー(スウィート・ウォーカーの平べったい外見を彼らはそう揶揄した)は弾薬庫を開くときに、必然的に歪が生まれることにも気づいていた。後は爆撃の場所さえ分かればいい。

航行ルートを予測し、彼らはミサイル部隊を置いた。予想通り、過信したフリスビーは以前と似た……いや、まったく同じルートを飛んできた。

……逃がすことも出来たが、彼らはそうせず、将軍は実際に場所に留めた。彼らも戦争にはほとんどうんざりしていたのだ。

「見えました！」

「よし、撃て」

中佐の声に合わせ、四本のミサイルが静かな夜に似つかわしくない光と煙、そして音を立て、お腹を晒したスウィート・ウォーカーに吸い込まれた。

目標が大きな煙を噴き上げて崩れていく。その結果に僅かな満足を感じた瞬間、目の前が光った気がした。スウィート・ウォーカーの右側面から激しい振動を感じた。まるで箱に閉じ込められ、巨人に蹴られたのではないかと思うほどの衝撃。

計器上は何も問題が無かった。ポリウムは下げたままだが、それでも未だに陽気な音楽は流れている。ゼルコ大尉は音楽を切った。今の衝撃が明らかに危険なものであると彼は理解していた。

横を向く。ちょうど右翼が炎を吹き上げているのが見えた。

ああ、くそ。ゼルコ大尉は舌打ちをした。やはり、嫌な予感は当たっていた。

「メイデイ、メイデイ。アルマイル32！ ホークアイ！ 被弾した、被弾した！」

「被害を報告しろ、アルマイル31」

ゼルコ大尉は遠く離れた僚機と管制機に向けて緊急通信を送った。管制機、ホークアイからのわずかな焦りをにじませた声。

ゼルコ大尉は小さく舌打ちをした。まさかこんなことになるとは思わなかった。情けない名前とはいえ、最新鋭のステルス爆撃機だ。相手とはむこう10年は技術力はあるが戦力差の小競り合いで、数億ドルの機体の損失など誰も考えない。

そして、彼らはそのまさかに直面していた。

「ミサイルが右翼に命中した。炎を吹きあげている。今は制御できるが、いつまで保つかは分からない」

「脱出しろ。緊急用の無線を忘れるな。パラレスキューが迎えに来てくれる。いいな？」

ホークアイの、ゼルコ大尉の焦りは徐々に収まって行った。動揺の先に待つものが破滅しかないという理解できる人間だけが空を支配する資格を得るのだ。

強襲捜索救助部隊か。ゼルコ大尉の胸に僅かな安堵が訪れる。無事に脱出して、武器も何もない素っ裸の状態に敵陣深くに放り込まれ、数時間敵味方関係なく救難信号をばら撒いて、その上で味方に助けってもらえるならば、自分は生存することが出来るのだ。

「わお、そりゃすごい。最高だ……了解」

「愚痴は後にしろ。神の御加護を。アウト」

ゼルコ大尉は大きく息をつき、キャノピーに描かれたケン・“ウィズ”・デュエル大尉の文字。

「じゃあな、ウィズ」

彼はレバーを引き上げた。キャノピーがボンと小さな爆発を起こして吹き飛んだ。ゼルコ大尉は強風と炎に晒される。顔を覆ったところで、座っていたシートごと生身を空に放り出される。

決して慣れることのない、胃がもみくちゃにされる浮遊感。パラシュートを開く。ハーネスが身体に強く食い込み、ゼルコ大尉は痛みに顔をしかめた。

からっぽになったスウィート・ウォーカーが炎の跡を残しながら宙を流れていく。やがて砂漠に落ちて、彼が落とした爆弾からすればずっと小さな爆発が起こった。

流れ星だ。ゼルコ大尉は空に残る炎の軌跡を眺めた。零れて、もう戻らない。無口なウィズに愚痴を漏らすことも、一人音量でお気に入りのCDを聞くことも無いのだ。薄い酸素の中、思考の回らない頭でぼんやりと大尉はそう思った。

数分の浮遊感の後、緑が近づいて来る大尉は体中を木の枝でもみくちやにされながらも、無事に地面に降り立った。

そこはちょっとした林になっていたが、木の間隔こそ広いが、夜も深い今、隠れるにはちょうどよい場所だった。

ハーネスを切り離し、パラシュートを出せる限り——それでも、ゼルコ大尉の胸までの大きさはあったが。それを木の根にねじ込み、顔に泥を塗りたくった。腰のホルスターから小さな45口径ピistolを取り出す。スライドを引いて薬室にホローポイント弾を送り込まれたことを確かめた。拳銃の中に残る八発の弾丸と、二つの予備弾倉だけがゼルコ大尉の頼りだった。冷たい感触と、使い方を忘れていない自分の手つきが彼を安心させ、同時に恐怖させた。安全な空から落とす爆弾とは訳が違う。

ウォークーキー  
携帯無線の救難信号チャンネルを開き、彼は身を屈める。木と木の隙間から、彼は遠くの、どこそこの街が見えた。見えたと言うよりも理解した。ある一角が煌々と燃えている。その炎に何某将軍のぎらついた眼を連想しかけ、頭を振った。

残り数時間、誰にも見つからずにいればいい。スウィート・ウォーカーが敵の手に渡るのは癪だが、彼女が誰彼かまわずその身を晒すことは無い。スウィート・ウォーカー 娼婦の割に貞淑なのだ。

腕時計を見ると、時計は既に日付が変わっていることを知らせた、もうすぐかと緩む緊張を突いたかのように、低い車のエンジンの音が響いた。迎えかと大尉は期待したが、パラレスキュー部隊が、敵地にのうのうと車で救援を寄越すとは考えにくかった。

今にでも飛び出したい衝動を抑えて身を伏せ、木の陰に隠れた。林の先にある道路に一台のトラックが停まった。敵だ。

元々は白かっただろう、錆びついた、古臭い軽トラック。そこからこれまた古臭いAKライフルを持った兵士が降りてくる。

さらに荷台に置かれた分厚い鉄板と金属の塊——12・7ミリ機関銃。勝てるのはジョン・ランボーかフランク・マーティンか。とにかく拳銃で太刀打ちするものではないと彼は理解した。

敵の搜索部隊だ。ゼルコ大尉は身を固くした。救難用の無線は敵味方関わらずに開かれている。複雑な暗号通信が可能な端末もあるらしいが、少なくとも爆撃機に搭載されたサバイバルキットのちやちな無線はそういったぜいたく品では無かった。

爆撃機乗りが行く末を彼は束の間考えた。狙撃手は遠距離から、意図的に人を殺す。今は面でフォッグ・オブ・ウォーの戦い……誰が誰を撃ったか分からない 戦場の霧の中、狙撃手だけは霧を意に介さず殺すことが出来る。噂話の類ではあるが、そうした彼らは戦争では捕虜にされることなく殺されるという。爆撃機はどうだろう。昔のように手当たり次第に爆弾を落とすなら——それはそれで殺されそうだが。とにかく、精密な誘導を持つ爆弾は狙撃手と同じではないか。士気高揚の餌にされることは間違いない。

ゼルコ大尉は、伏せたままじりじりと下がり、木の陰に身体を押し込んだ。腰にライトを携え、ライフルを持った男たちは散らばっていく。大尉は息を殺し、彼の手にはやや大きな拳銃を握りしめた。どのみち、撃てば瞬時に周囲から蜂の巣にされることは分かっている。彼が出来ることは彼らが自分に気付くことなくこの搜索を止めてくれることだけだった。

普通、こうした行動はツーマンセルが基本だった。しかし、兵士たちはそれぞれがばらばらに動いている。歩き方もどちらかと言えばのろく、深夜にこうした仕事に駆り出されていることに

いたく不満を抱いているふうだ。幸運なことに、彼らの練度はそれほどでもなく、士気も低かった。

だから、1人の兵士がゼルコ大尉の隠れた木の傍を通り過ぎて、彼に気付くことはなかった。

「うすのろめ」

ゼルコ大尉は口をもごもごさせるようにぼやいた。このまま無事に帰れそうだ。ゼルコ大尉が僅かに気を緩めたと同時。彼の目の前が一瞬真っ白に染まった。

白が薄まる。目の前にライフルを構えた若い青年がいた。目をまんまるに見開いた彼の驚愕は、ぺらぺらの布団にもぐることが出来ないと知った顔だった。

やぶれかぶれだった。ゼルコ大尉は身を低くしたまま身を低くして不運な兵士めがけて突進する。

兵士がライフルの狙いを定めた。と、同時にゼルコ大尉の腕がライフルの側面に添えられる。裏拳でライフルを押し退け、銃口を逸らせたのと、AKが7・62ミリ弾を吐き出したのは同時だった。

そのままゼルコ大尉は銃身を掴んでライフルをもぎ取る。間髪入れずにその銃床<sup>ストック</sup>を振り上げて驚愕に満ちた顔に叩き込んだ。

声を上げることなく兵士は倒れる。しかし、その銃声は他の兵士を職務に引き戻すには十分すぎた。

逃げる間もなく兵士たちがゼルコ大尉を取り囲んだ。初めはライフルを昏倒させた兵士に向ける大尉だったが、やがて奪った銃を下ろして両手を上げた。

兵士が近づいてライフルを蹴る。拳銃も地面に落とすように指示した。大尉は抵抗しなかった。

少しの時間が経って、別の兵士が落ちているパラシュートを見つけ、言葉の通じない彼らにも、ゼルコ大尉が空から来て、爆弾を落とした張本人のひとりであると証明された。

大尉は彼らの顔を見渡した。同じ表情を浮かべていた。無表情だ。しかし、その下に怒りを見た。嘆きや悔やみ。そして憎しみがあつた。大尉は視線をそらさなかつた。そらせなかつた。

彼らは今にも自分を八つ裂きにしたいのだと、大尉は理解した。やがて隊長らしい、初老の男が落とした拳銃を腰のベルトに挟み、ライフルを拾い上げて歩くように促した。

殺したいと思っけていても、彼らはしばらくの間は自分を殺せないのだ。ゼルコ大尉の胸に安堵とは別に、胸の底に沈む淀みが生まれた。

兵士たちはゼルコ大尉を四方から囲うようにして歩いた。トラックにゆっくりと近づいて行く。機関銃にもたれ、たばこをくわえた男が大尉を見た。大尉も彼を見た。そして、そのずっと奥に見えるスコープの反射光を見た。

軽い、ポップコーンの弾けるような音と同時に男の頭の右半分が弾けた。ゼルコ大尉が反射的に屈む。それと同時に左右の兵士たちも同じようにして頭の一部を抉り取られて地面に脳と血と眼球をこぼした。

前を歩いていた初老の兵士はライフルを構えて車の陰に身を隠した。同時にバラバラと聞こえ

る音が大きくなる。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ! 瞬間、苛烈な5・56ミリ弾の局地的豪雨が降り注ぐ。

ダダダダダダダダダダダ! GAU-27のトラックごと人間を引き裂く機銃掃射。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダ! バラバラの肉片が大尉の傍に散らばる。返り血を浴びる。

後ろを歩く兵士はゼルコ大尉が殴った兵士だった。でたらめに宙に撃つ彼と、視線が合う。歯をむき出しにして、唸る――秒間千発の轟音にかき消される。そこには大尉に向かう、発酵した憎しみがあつた。ゼルコ大尉は足元を見る。数ヤード離れた先、バラバラになった腰の一部。そこに差してある45口径ピストル。

足元を銃弾が抉る。前に転ぶように身を投げ出す。銃を抜く。確かな銃の重さ。弾倉は入ったままだつた。ゼルコ大尉が撃つのと、顔を腫らした彼が引き金を引いたのは同時だった。大尉は激しい痛みを感じると同時に、男の胸に赤い花が咲いたのを見た。そして意識が途切れた。

目を覚ましたゼルコ大尉を、スカル 髑髏マスク奥の碧眼が見ていた。

「デイル! やっと起きたの? このねぼすけ野郎」

大尉は背中に固い金属と振動。そして肩に鈍い痛みを感じた。

「レナ……いや。…オーウェル少尉」

「残念だけど、今は中尉よ、デイル。レナで良いわ」

エレナ・オーウェル中尉はマスクを脱ぎ、汗ばんだアッシュブロンドを外気に晒し、起きようとするゼルコ大尉を制した。

「生きてて良かったわ。墜落から生還。重傷を負いながらも果敢な反撃で敵を射殺。ひゅー、まるでFPSね」

「死んでないだけさ」

オーウェル中尉の茶化しに大儀そうに答え、ゼルコ大尉は開かれたままのドアから見える景色を見た。

「レナ。俺は、初めて人を殺した」

「爆弾を落とすのも変わらないんじゃない。爆弾のが残酷よ?」

「まさにそうなんだ。でも違う。銃を持つときには何も無いんだ。目標を隔てる建物も距離も、誘導爆弾の複雑な仕組みもない。爆音を隠す音楽も無い、目の前で、小さな弾丸で死ぬ」

オーウェル中尉は眉をひそめた。

「長い夢をみていて……そいつから醒めた気分だ。ウィリー、俺はこれからどうなるんだろうな。」

「その腕で、そんな考えで操縦桿をまた握れるならね」

デール・ゼルコはその後、帰国し少佐へと昇進。これ以降は教官として人生を歩む。しかし、

心的外傷後<sup>PTSD</sup>ストレス障害に悩まされ続け、2年足らずで退役した。

ゼルコ少佐の作戦により終戦に近づいたとメディアは報じる。だが戦争が終わったのは、彼が退役した3年後だった。

あとがき

下敷きになる話があるし、楽ちんだろ！ 多少ミリタリーはかじってる！（慢心）



## 隠し扉と上書き保存（幼夏）

---

隠し扉と上書き保存

幼夏

病室からは、すべての色が失われていた。この土地に、この冷たい建物ができる前、ここには何があったのだろう。様々な車が点々と停められた、月極め駐車場だったかもしれないし、くるぶしほどまでノビルの生えた、広大な広場だったのかもしれない。もしくは、数えきれない稲穂が頭を垂れた、水田群があったのか――いずれにせよ、ここにも色があったはずなのだ。しかし、不思議なことに、ここには何の色もない。備え付けられたテレビは黒いし、貸し出されたタオルは淡い青色なのだが、そういう話ではないのだ。ベッドを四つ並べるのに丁度良いこの空間には、あるべき色が欠けている。目を覚ましてから、ずっとそんなことを考えていた。いくら考えても、違和感の源泉を見つけられないのは、私の頭の中がごっそり抜けおちているからかもしれない。あるいは、抜け落ちてしまったのは私そのものなのか。

「退院の準備は出来たかい、美晴」

いつの間にか開いていたらしい扉の向こうから、男性のやさしい声がした。彼は私の唯一の家族、本田光久さんだ。大切なことはすべて忘れてしまった私を、献身的に見舞ってくれる。私は、彼との思い出を残らず谷底に置いてきたというのに、暖かく抱きしめてくれた光久さん。私の婚約者だ。

「もう少しです、もう少し」

彼が近づいてくると、少し緊張してしまう。何か思い出さなくてはと、頭蓋の中をかき回さなければならぬからだ。退院の準備を進めながらも、眉根を寄せ、記憶の糸口を探す。そんな私の様子を見ると、彼は決まって私の頭を撫でるのだ。脆い卵の表面をなぞるように、慎重な手つきで。

「敬語を使わないでくれと、言っただろう。美晴はいつも、僕のことを『みいくん』と呼んでいたじゃないか」

「ごめんなさい、覚えていなくて」

彼と目を合わせずに済むよう、視線を荷物に落とした。しかし、荷物の上に彼がそっと手を置いたことで、むしろ彼の存在が明確に意識され、なぜだか鳥肌が立つ。背筋がぞわりと粟立った。

彼の手の甲には、積み重ねられた年齢が表れている。くすんだ肌の向こう側に、硬い筋が埋まっているのが見える。光久さんは、今年三十になるそうだ。社会に出たばかりの私が、どうやって彼と出会ったのだろうか。もし尋ねれば、「思い出せそうか」と期待の眼差しを向けられてしまいそうで、聞けずにいた。

「あとは僕が詰めておこう。美晴はお手洗いを済ませておいで」

「ええ、ありがとうございます」

「まったく、他人行儀だなあ」

彼は苦笑する。決して美しいとは言えない彼の顔。私は、彼のどこを愛して、結婚を決めたのだろうか。やはり、彼のやさしさだろうか。少なくとも、外見に惹かれたのではないということは、確かだった。

\*

彼の車は大きくなかったが、どこか落ち着く香りがした。

「いい香り」

思わずつぶやくと、彼はくすりと笑った。

「君が好きなカモミールの香りだよ。美晴は本当にカモミールの香りが好きでねえ。柔軟剤も香水も、カモミールの香りだった。君は週末になると、シャンプーに少しだけ香水を混ぜて、僕を誘惑したものだよ」

誘惑、という単語に、思わず体が熱くなる。なんだかいかかわしい響きがあつて、顔を覆いたくなった。不自然に思われぬよう、窓の外に視線を泳がせた。

遠くに、先ほどまで我が身を横たえていた病室の窓が見える。規則的に並んだ窓は、遠ざかるにつれて建物に張り付いた模様になっていった。さらに離れると、窓も柱の凹凸もぺたんこになり、白く大きな塊として目に映った。あそこには色がなかったはずなのに、私は大切なものをあそこに置いてきたような気がする。私が大切なものを落としたのは、谷底なのだろうか、それともあの病院なのだろうか。

私が谷底に投げ出されてから、もう二か月の時が過ぎているという。しかし、私が引き出すことのできる記憶は、ここ三週間分だけだ。私は一か月以上、深い眠りに落ちていたことになる。あまりに長く眠っていたので、記憶が出汁のように私から染み出して、病室に吸い込まれてしまったのかもしれない。

光久さんによれば、私は両親と共にドライブに出かけた先で、車ごと崖を転がり落ちたのだそうだ。彼がその時、車に同乗していなくてよかった。もし、彼も一緒に事故にあっていたら、生き残った私は一人きりだったはずだ。

「ほら、見えてきたよ美晴」

どれくらい外を眺めていたのだろう。いつの間にか、眼前は見慣れない景色で埋め尽くされていた。彼が顎で指す丘の上には、白壁に桃色の屋根の可愛らしい住宅が建っていた。車は徐々にスピードを落とし、その家の脇に停まった。

「美晴、鍵を開けてごらん。何か思い出せるかもしれない」

まるっこいキーホルダーのついた、小さな鍵だった。まるでおもちゃのようなその鍵は、鍵穴へぴたりと収まった。ゆっくりと鍵をひねると、扉の奥からかしゃんと小気味のいい音がした。その感覚に、ちっとも覚えはない。扉を開け、玄関に足を踏み入れると、かすかな木の香りがした。

「中はきれいに片付いているよ。さあ、お入り」

光久さんに促されるままに、足を踏み入れた。廊下の奥は薄暗く、足が向かない。階段の上、

二階から差し込む光に誘われるように、段に足をかけた。足先に力を入れても、少しも軋むことなく、私の体重を受け入れる階段の底板。そのまま一歩二歩と、上っていく。

二階まで上り終わると、光の入り口が明らかになった。二階は大きく開けたりビングになっており、うんと大きなガラス戸があった。レースカーテンの向こうから、太陽光がたっぷり差し込む。カーテンをゆっくり開けると、ガラス戸の向こうには広々としたバルコニーがあった。

「すてきね！」

思わず振り返り、久光さんに声をかけた。光久さんはただ目を細め、こちらをじっと見ていた。想像していなかった表情に驚き、私の体は強張った。すると、光久さんは「ほら、こちらにおいで。このソファーに座ってごらん」と促した。指さされたソファーに近づき、ゆっくりと腰を掛ける。ソファーの座面は深く沈み、腰を包み込んだ。

「美晴はここで、よく本を読んでいたよ」

「本を……ですか」

「そう、君は本が好きだったんだ。どんな本も好き嫌いなく読んでいたよ。怖いものは苦手なのに、ホラー小説を読んでひどく怯えていたなあ。そんなに怖いなら読まなければいいのに、と何度も言ったが、君はそれでもまたホラー小説を買ってくるんだ」

光久さんは愛おし気に語る。私との思い出を、舌の上で転がして、味わっているように見えた。

「私は、どんな服を着ていたのでしょうか」

「美晴の服のほとんどは寝室に置いてあるけど、余所行きの服だけはそこのウォークインクローゼットの中にあるよ。覗いてごらん」

言われるまま、ウォークインクローゼットに入る。その中には、フリルのふんだんに使われたワンピースが、数多く並んでいた。

「こんな服を、私が着ていたなんて……」

「こんな服だなんて、酷い言いようだね。僕が選んであげたものも多いのに」

「そう、ですか……」

こんなに甘ったるい洋服を、自分が着ている様子が想像できなかった。着たいという気も起らない。今一時的に借りて着ている、光久さんのTシャツのほうが、まだ私に似合っている気さえした。

「そうだ、君の荷物は僕が戻しておくよ。いいね？ 君は戻すべき場所も、覚えていないだろうから」

光久さんが悲しげに言う。これ以上、彼を困らせるわけにはいかない。何とか、ほんの少しでも、記憶を取り戻したかった。

「いえ、私にやらせてください」

「いいよ、病み上がりなんだから、無理をすべきじゃない」

「お願いします、やらせてください」

食い下がる私に、光久さんは少し顔をゆがめた。しかし、いくら言っても無駄だと判断したのか、最後には荷物の入ったポストンバックを私に手渡してくれた。カバンの中身は、ほとんど衣

類だ。普段着は寝室にあるという、先ほどの彼の言葉を思い出し、彼よりも前を歩いて寝室を探した。

寝室は、一階の奥に位置していた。ベッドのシーツやタオルケットはピンと伸び、病院のそれとほとんど変わらなかった。

「肌着の類はそこ、羽織ものはその上だよ」

彼の指示に従って、一枚ずつ衣類を棚に戻していく。その過程で、私はあることに気が付いた。

「おかしい、下着が一枚もないわ」

私の一言を、彼は聞き逃さなかった。

「病院に下着を一式忘れてきてしまったかもしれないね。明日の昼に、病院の近くに立ち寄る機会があるから、回収してくるよ。心配はいらない」

「そうですか、ありがとうございます……いいえ、ありがとう、みいくん」

恥ずかしさをこらえ、なんとか彼をあだ名で呼ぶ。記憶を失う前の自分に近づくためだ。どのような努力も惜しんではならない。記憶が空洞のままでは、自分が自分であることを確認できないように感じてしまう。本当に自分の心と体が結びついているのか、不安が私の足元を蝕んで、まっすぐ立っていられなくなるのだ。一刻も早く記憶を取り戻し、自身の存在を確認したい。それが今の自分にとって最も重要な事柄であり、私を愛してくれる彼に対する最大の恩返しでもあるように思われた。

\*

彼が私との思い出を語るたび、少しずつ自分の存在が戻ってきているように感じていた。「思い出している」という実感はないが、彼の話を通して自分の人格を知ることが出来たからだ。

彼とバルコニーで風にあたっていると、事故現場がこの近くであることを彼が教えてくれた。バルコニーから見えるか見えないかという位置であったが、そのあたりの道路が非常に細く、ほんの少しの衝撃で転落しそうに険しいことは、遠目にも見て取れた。

「あのあたりは危ないから、決して行っては行けないよ。君の心の傷をえぐってしまうかもしれない、危険な場所だ」

バルコニーに立つたび、彼は繰り返し言った。

彼が「行ってはいけない」と私に告げるたび、事故現場への関心は強くなっていった。彼の言いたいことはよく理解しているのだが、「心の傷をえぐる」ということが、記憶を呼び戻す引き金になるのではないかという期待があった。

\*

彼は、毎朝八時ごろになると、仕事へ出かけて行った。彼が家を出ると、私は気晴らしと体力づくりを兼ねて、よく散歩へ出かけた。

ある晴れた日、いつもより少し遠くまで足を延ばした時のことだ。木陰に隠れるように、古びた

バス停があるのを見つけた。金属板やポールはペンキがはがれ、厚い錆におおわれている。時刻表の紙を守るプラスチック板もひどく黄ばんでいたが、文字が読めないほどではない。見にくい時刻表に目を凝らすと、十分もしないうちに次のバスが来ることが分かった。

胸が高鳴る。

何かに呼ばれているような気がした。このバスの行く先に、事故現場があるからだ。もちろん、崖の下まで降りることはできない。しかし、私の父が突き破ったガードレールくらいは見る事が出来るかもしれない。谷底に、私の記憶が落ちているかもしれないのだ。この機を逃す手はなかった。

こんなにも長い十分を、私は知らなかった。もしかしたら、失われた二十数年分の記憶の中には、これ以上に長い十分が存在しているかもしれない。しかし少なくとも、私の今繰り出せるすべての記憶の中では、もっとも長い十分だった。

ようやくたどり着いたバスは、バス停の立て看板にも負けず劣らず錆びて、不恰好だった。空気が押し出されるような大きな音を立てた後、ゆっくりとバスの入り口が開く。古ぼけた発券機から乗車券を抜き取ると、チンと間抜けな音がした。このバスを待つ客がほかにいるとは思えないけれど、バスは遅れまいとせっかちに発車した。

\*

すぐ近くだと思っていた事故現場は、案外遠かった。バス停を三つほど通り過ぎたあたりで、方面が間違っていたかと不安になったが、五つ目のバス停でようやくそれらしき細い道に差し掛かり、急いで下車ボタンを押した。

バス停を降りると、風の音しかしない、静かな場所に一人きりになった。先ほどまで私を載せていたバスは、急な曲がり角を器用に曲がっていった。慣れたものだ。その曲がり角には、ガードレールがない。バス停同様、古びるに任せられているようで、事故の痕跡は手つかずのまま残されていた。

崖の下をのぞき込むと、派手に変形した車体が転がっているのが見えた。大きなシルバーのワゴン車は、両のドアが外れており、翼をもがれた鳥のように痛々しい。三人で乗っていたにしては大きな車である。私の父は、大きな車が好きだったのかもしれない。車体はかろうじて周辺の木々に引っかかっているようだ。このワゴン車が跳ね飛ばしたはずのガードレールは、見出すことが出来ない。

崖の下には、底がないように見えた。いくら覗き込んでも、さらにその下がある。

底なしの谷が、私を呼ぶ。

木々が一斉にざわめいて、囁くのだ。おいで、おいでと。私は何に呼ばれているのだろう。その声の主を探すように、ガードレールから身を乗り出す。木々の会話に耳を澄ませれば、彼らの言葉がわかる気がした。

おいで、おいで。

「誰、私を呼んでいるのは」

問いかけると、谷は無数の見えない手を私に伸ばした。見えない手は私の腕を、腰を、頭を強く掴む。叫び声をあげる間もなく、私の体は谷底へ引きずられた。

\*

私を受け止めたのは、積み重ねられた段ボールだった。中身は何かやわらかいものだったのだろう、私の四肢は、すべて正しい位置にくっついていていた。

しかし、体中に傷がついているのか、あちこちがひりひりと痛い。周囲を見渡すと、崩れた車体の一部と木々に挟まれ、身動きの取れない状態であることに気が付いた。しかし不思議だ。なぜこんなにもたくさんの段ボール箱が転がっているのだろう。折り重なった段ボールと木の枝が、アスレチックのように見えるのだ。

驚いたことに、この谷には本当に底がないように見える。私は何メートル転落したかはわからないが、木に引っ掛かっていなければ、闇に飲み込まれていただろう。自宅のバルコニーから転落したなら、ここと同じ谷へ引きずり込まれる。それくらい幅が広く、どこまでも深い谷なのだ。がっかりしたのは、この谷に私の記憶が落ちていなかったことだ。何のフラッシュバックも起きない。

どうにかして、ここから抜け出さなくてはならない。彼の待つ家に、戻らなくては。

手をかけようとした枝の先に、何か光るものが引っかかっているのに気が付いた。私は枝に手をかけるのも忘れて、その光るものに手を伸ばす。私の中指が、なんとかそれを捕え、引き寄せた。その光るものは、ロケットペンダントだった。ペンダントと言っても、通常のロケットペンダントよりはかなり大きく、とても首にかけて歩くような代物ではない。遠目に見れば、懐中時計に見えるのではないだろうか。銀の装飾が施されたそれは、私の手の中で鈍い光を放った。

ロケットの蓋をやさしく開くと、中には写真の一部らしきものが貼り付けられていた。映っている人間は四人。そのうち一人は、私だった。キャミソールにデニムパンツというラフな格好の私は、幸せそうに微笑んでいる。私の背後には一組の初老の夫婦。そして私の隣には、私の手を握る一人の男性がいた。整った顔立ちのその男性は、私よりも頭一つほど背が高い。

「誰……？」

それが光久さんなのではないかと、目をこすってから凝視した。しかし、どこからどう見ても光久さんではない。

しばらく写真を眺めていると、右目に何か入ってきたのを感じた。液体のようだ。目を開けようとするれば、痛みが走る。私は思わず、右目を強く押さえた。開くことのできる左目で、手に付着した液体を確認する。その液体は、血だった。

右目へ滴り落ちてくる血をたどって、傷口を探した。頭だ。どうやら私は、また頭を打ってしまったらしい。次こそ記憶だけではなく、私の体そのものも、手放すことになるかもしれない。記憶も体も失った私に、いったい何が残るだろうか――。

意識が遠のいていく。最後に見たのは、ロケットペンダントをポケットにしまう、自分の左手だった。

\*

「美晴！ 美晴！」

何度も私を呼ぶ声に目を覚ます。眼前には、ぼんやりとした光久さんの姿。そして、白い天井。

「みつ、ひさ、さん」

滑らかに発語したつもりだったが、唇の間からこぼれた声は擦れ、途切れ途切れであった。

「美晴、何か、何か思い出したのか？ 思い出したか？」

光久さんは私の肩をゆすり、大きな声を上げた。私は恐怖のあまり声も出ず、必死に首を横に振った。

「そうか」

光久さんは私から手を放し、その場にくずおれて、私のベッドに突っ伏した。

「ごめん、なさい……」

「よかった……あそこに行つてはいけないといっただろう、美晴」

私の謝罪の言葉は聞こえたのだろうか。彼は、ベッドに顔をうずめたまま、動かない。光久さんを包んでいるのは、真っ黒のスーツだった。お葬式にでも参列するかのような、黒いスーツだ

。

「みつひささん」

「なんだい」

光久さんは顔を上げない。ようやく元通りに声を出せるようになった喉をいたわりながら、私はゆっくり発言した。

「みつひささん、おそうしきに、行っていたの？」

光久さんは、ようやく顔を上げた。

「いや、そうか、美晴には言っていなかったね。僕の職業は、霊柩車のドライバーなんだ。すぐそこの、葬儀屋のね。いつも職場でスーツに着替えるから、この姿を見せるのは初めてだね」

「そう、なの」

初耳だった。棺を運ぶ光久さんの様子を想像した。妙に似合っていて、薄気味が悪かった。

「僕は仕事に戻らなくてはならない。君は今晚、ここに入院することになったからね。幸い軽傷ですんだから、明日には退院だ。明日の朝、迎えに来るからね」

光久さんは私の額にキスをして、病室を出ていった。相変わらず、この部屋には色がない。私は体を起こし、ベッドから出て立ち上がった。左腕につながれた点滴が、わずかな音を立てて揺れた。透明な点滴バックから、透明な液がゆっくり落ちる。

カーテンを開けると、日が山の向こうへ落ちようとしているのが見えた。私を見つけて、救急車を呼んでくれたのは誰だろう。発見されていなければ、私は暗い谷の中腹で、瓦礫と一緒に冷たくなっていたに違いない。

「高橋美晴さん」

女性の声が私を呼ぶ。

「はい」

「お目覚めでしたか、お夕食お持ちしましたよ」

看護師の女性だった。

「ありがとうございます」

「お食事の前に、検温と血圧測定させてくださいね」

やさしい笑顔を向けられ、私はベッドに戻る。ベッドに腰掛けると、彼女の白くて細い指が、私の病人着の袖を捲った。彼女の指は、見た目に反して暖かい。

「あの」

「何でしょう」

彼女は笑顔を絶やさない。

「救急車を呼んでくれた人の名前って、わかりませんか。お礼をいいたいのです」

看護婦は不思議そうな顔をして、答えた。

「高橋さんが足を滑らせたとき、お連れの方とご一緒だったのですよね？ 高橋さんを救い上げたのも、ここへ運んだのも、先ほどいらっしゃったお連れの方だと聞いていますが」

\*

なかなか寝付くことが出来ない。頭の中が、混沌としていた。私の記憶では、私が谷に落ちた時、私は一人だった。しかし、看護師の言うことが事実ならば、私はあの時光久さんと一緒にいたことになる。自分の記憶が、丸ごと間違っているとしか思えない。いつの間にか私は、自身の記憶をまるごとすり替えたということだ。そうでないと、辻褄が合わない。

真っ暗な病室の中で、私は一人考え続けていた。勿論、答えは出ない。そんなとき、どこからか声が聞こえた。

おいで、おいで

それは、谷底で聞いたのと同じ声だった。私は思わず起き上がり、点滴の下がったスタンドを引いて歩き出した。

病棟の廊下は薄暗い。そして、風もないのになぜか肌寒い。光源は、三メートル置きに設置されている足元ライトと、ナースステーションの明かりに限られていた。声に呼ばれるまま、病棟の廊下を進んでいく。不思議なことに、一度も人には会わなかった。

ある部屋の前に来た時、声がピタリと止んだ。その部屋は、霊安室だった。扉に手をかけると、何の抵抗もなくそれは開いた。廊下以上に冷たい空気が、部屋の中から流れ出てくる。私はそっと足を踏み入れ、後ろ手に戸を閉めた。

霊安室には、大量の棺が並んでいる。棺は一つ一つ、それにぴったりの冷蔵庫に収められていた。すべて番号で管理されているが、私は迷わず二十八番の棺を引き出した。

ここに、声の主が眠っている。



なぜだか確信があった。大きな冷蔵庫から棺を引き出して、音を立てないように静かに蓋を開けた。

その瞬間、棺から色が飛び出した。病院全体から失われていた色があふれ出して、私の視界を満たしていく。棺の中に横たわっていたのは、タロットペンダントの写真で私と手をつないでいた、大柄の男性だった。

「ああ、そうか、あなただったのね……ありがとう、智也」

苦しうに、顔をゆがめた遺体の、頭部を繰り返し撫でた。

全部思い出したのだ。

私の記憶をすり替えていたのは私ではない。本田光久——私の担当患者だった。

\*

カーテンの間から朝日が差し込んでいる。私は、あの男が迎えに来る前に、着替えを済ませた。大きなロケットペンダントを首から下げ、髪をきつく結った。

「おはよう美晴、目は覚めたかい」

「ええ」

気を抜けば、にらみつけてしまいそうだった。できるだけ目を合わせないように注意した。

そのまま彼の小さな車に乗り、白い壁に桃色の屋根の、あの家へと帰った。そして私は、一直線にある部屋へ向かう。寝室だ。

「み、美晴、どうしたんだ？」

「もうその名で呼ばないで！ 私は高橋美晴じゃない、秋月由紀奈よ！」

「な、何を言っているんだ美晴！」

早足で歩く私の後ろを、本田光久は小走りで追いかけてきた。

二人の歩みは徐々に速度を上げ、瞬く間に寝室にたどり着く。寝室の大きなクローゼットの前に立ち、私はそのクローゼットを勢いよく真横へ引いた。

クローゼットの後ろから、隠し部屋が表れる。小さな四畳半の壁には、びっしりと私の写真、私の下着、私の使ったティッシュペーパー等が貼り付けられていた。想像以上の光景に、体中の毛が逆立った。

「美晴、どうしてこの部屋を……！」

本田光久がうろたえる。

「どうしてですって？ 笑わせないで！ 当然じゃない、ここは私と智也の別荘なんだから！」

\*

事故が起きる数か月前に、話は遡る。私は大学病院で働く、勤務三年目のひよっこ医師だった。そして、私の婚約者である道島智也は、同じ大学病院で働く三つ上の先輩だ。大学時代、ボランティアサークルで知り合い、付き合い始めた私たちは、愛を育み結婚を目前にしていた。

そんなある日、新米医師である私が初めて担当についた入院患者が、本田光久である。胃痛を訴える彼は、検査のために一日入院するという。初めての担当患者に、私は必要以上に張り切っていた。とはいえ、単なる検査入院である。大きな問題もなく入院期間は終わり、私は安堵していた。

この出会いが、悪夢の始まりだった。

本田光久は、繰り返し消化器内科を受診した。消化器内科一年生の私ではあるが、再診患者であるので、担当は変わらず私だった。

毎回、プライベートな質問を繰り返された。最初の数回は適当にいなしていたが、だんだん気持ちが悪くなった。智也に相談すると、「気にしすぎもよくない」と慰められた。

何度目の受診日だっただろう。その日はたまたま、婚約指輪をつけていた。

「ご結婚されたんですか」

本田光久が、啞然とした表情で尋ねてきた。

「ええ、まあ」

最初から、こうすればよかったのだ。これで、もう変な興味を持たれることもないだろう。そのときは、そう思っていた。

このころからだった。私の私物が頻繁に紛失するようになったのは。病院のロッカーに放り込んだはずの、伝線したストッキング。自宅の勝手口に置いてあったはずのごみ袋。診察室に置き忘れたボールペン。いつも持ち歩いていた、カモミールの香水。最初はとりとめのないものばかりであったので気にしなかったが、外に干した下着を盗まれるようになったとき、ようやく警察に相談した。そのほか、どこを出歩いても常に視線を感じるようになったが、これについて警察は動いてはくれなかった。

私の精神はどんどん追い詰められていった。どこにいても気が休まらない。友人にカウンセリングを進められるようになったころ、別荘が完成した。

「せっかく設けた別荘だ。来週有給をもらって、一緒に休養しよう」

智也のやさしさに、涙が出たのを覚えている。

何より楽しみだったのは、寝室の奥に作った隠し部屋だった。子供が出来た時のために作った部屋。子供がかくれんぼの最中、この部屋を見つけたらどれだけ興奮することだろう。隠し部屋の扉となる据置型クローゼットは、子供の手でも簡単に開けられる仕様になっているはずだった。自宅からはずいぶん遠い、片田舎の丘の上に建てた別荘。人目から逃れるには、最高の場所だ。完成したばかりの別荘には、何の家具もない。大型の家具は引っ越し業者に頼み、小型の家具は自分で輸送することにした。智也の大きな車は、家具の輸送に十分な大きさがあった。乗りなれたシルバーのワゴン車の中は、段ボールでいっぱいになった。

「それももっていくのかい？」

智也に尋ねられ、私はロケットペンダントを首にかけた。

「うん。お守りだもの」

「お義父さん、足を悪くして残念だな。そうでなければ、四人で出かけられたのに」

「こうして写真だけでも、連れていくわ」

ワゴン車は走り出した。二時間ほど走ったあたりで、別荘が見えてきて、車は細い谷際の道路に差し掛かる。そしてブレーキが利かなくなり――ガードレールを押しつけて、坂の下へと転落したのだった。

\*

「やっぱりあなただったのね、本田光久。私の私物を盗んでいたのは……！」

「あ、あ……」

本田光久は、声にならない声を漏らしながら、私に背を向けて逃げるように寝室を出ていった。

「許せない……」

これが何のための部屋だったと、思っているのだろう。私と智也が夢を込めた希望の隠し部屋は、下劣な行為で蹂躪されたのだ。

「馬鹿め！」

背後から、男の大きな声がする。振り返ると、底には包丁を握りしめ、小刻みに震える本田光久が立っていた。

「大人しく全部忘れていれば、かわいがってやったものを！」

「な……何をして」

「わからないのか！ お前を殺……殺して、ぼく、ぼくも死ぬんだ！」

彼は包丁を滅茶苦茶に振り回した。一瞬でも隙を見せれば、あの刃が私の体を切り裂くだろう。

「死ねええ！ 美晴を、美晴を返せえ！」

包丁を大きく振り回した勢いで、彼は何度もバランスを崩し、転びかけている。少しずつ後ずさりして、距離をとりながら、脱出のタイミングを計る。するとある瞬間、ついに彼はバランスを崩し、床に転がった。転げた彼とベッドの間をすり抜けて、私は寝室を飛び出した。

上だ。

私はまっすぐバルコニーへと向かう。男の奇声と五月蠅い足音が、私の後ろをついてくる。その間も、包丁が空を切る音が絶えず聞こえていた。

バルコニーに立ち、後ろを振り向くと、本田光久が息を切らしながらゆっくりこちらへ向かってきた。無暗に包丁を扱ったからか、彼は彼自身の身体を傷つけていた。

「美晴……みは、みはる」

何度も同じ名前を呼んでいるようだ。彼はついに、包丁を落としてしまった。落ちた包丁は、彼の足に突き刺さる。彼は擦れた短いうめき声をあげると、その場にうずくまった。そして――泣き出した。

「ここ数週間、ぼくは、ぼくは……美晴ここに、住んでいたんだ……！」

その狂気的な叫びに、私は思わず息をのんだ。そして、小児科の患者に話しかけるように、問

いかけた。

「美晴って、誰のことなの？」

「美晴は、ぼくの……僕の、恋人だ」

高橋美晴は彼の恋人だったのだと言う。恋人は事故で無くなり、彼は一人になった。そんな時出会ったのが、高橋美晴に瓜二つの、私だったのだという。

「君のロッカーからカモミールの香水をくすねた時、運命だと思ったよ！」

彼は突然饒舌になり、話し出した。

「美晴はやっぱり生きていた、死んでなんていなかったんだってね！ 下着の趣味まで美晴と同じなんだから！」

胃の中身が、喉元までこみ上げる。先ほど目にした隠し部屋の様子が、はっきりと思い出された。

「でも、おかしいんだ、君はフリルのワンピースが大好きだったはずだ。なのに君はちっともスカートを履かない。それで気づいたんだよ、全部あの男が悪いんだってね！ 新しい男の趣味に合わせるだなんて……君らしくないじゃないか美晴。しかも、あんな男と結婚しただなんて！

君は僕を裏切った！」

彼は立ち上がり、勢いよく両腕を広げた。

「だからブレーキに細工したんだ！」

広げられた両腕はゆっくりとしたに下がる。そして彼は少しうつむいて、続ける。

「でも困ったよ。二人とも死ななかつたんだ」

「……智也の死体には窒息跡があったわ。あなたが殺したの？」

「あの男の名を呼ぶなあああ！」

数秒の静寂の後、彼は再び口を開いた。

「そうだよ。あの男の死体はバラバラにするつもりだった。僕にはその権利がある。君の死体は、剥製にするつもりだったから、死体は二つとも回収したんだ。なのに、あの男は生きていた。だから仕方なく、僕が首を絞めてあげたんだ。勿論、そのあとは何度も手を洗ったよ。死体を隠すために、予定通りあの男は霊柩車に乗せて病院へ運んだ。僕と君の記念日に、あの男をバラバラにするつもりだったんだ。最高の記念日だよ、洒落てるだろう」

怒りが全身に満ちる。目の前の包丁を拾い、この男を滅多刺しにしたい思いを抑えるのに、必死だった。頭に血が上る。握りしめた拳の中で、爪を掌に食い込ませ、痛みで自我を保った。

「君が活着ていることに気づいたとき、殺さなくちゃと思った。でも、できなかつたよ。美晴を傷つけるなんて、僕にはできない。そしたら、神様は僕に美晴を返してくれたんだ！ 病院で目覚めた君は、何一つ覚えていなかったけど……だからこそ、美晴だと確信した！ あの男に騙されていた時間を、全部忘れた僕の美晴……みはるだ！ だから思い出さないで欲しかった、あの男との時間を。僕の美晴、僕との思い出は、どうしてなくしたままなのか！ 君が現場に行くのを恐れて、毎日現場を見に行っていた。君が再び僕の前からいなくなるくらいなら、昨日君をあの場に置いてこればよかったよ！」

涙を流しながら叫ぶ彼に、私は微笑みかける。

「みいくん」

「み、美晴……」

「ごめんね、みいくん。思い出したよ。こっちに来て」

私は両腕を広げる。バルコニーに差し込む光が私を照らし、慈愛に満ちた女神のように見えるに違いない。

「おいで、みいくん」

「みはる、みはる……！」

彼は立ち上がり、私のもとへよろけながらも駆けてきた。彼が目の前までやってきたところで、私は身を翻す。彼は走った分の勢いを殺せず、そのままバルコニーの手すりに乗り上げた。

「さよなら」

私は彼の背中を軽く押した。彼は丘の下へ転落していった。声もなく谷底へ吸い込まれる彼の表情は、絶望で歪んでいた。そんな彼の顔を見て、私の口角は思わず吊り上がった。

「やったよ、智也」

足の力が抜け、その場に膝をつく。私はロケットペンダントを握り、天を仰いだ。

本田光明の遺体は、永遠に見つからないだろう。なんせこの谷は、底無しなのだから。

＊

実家の玄関を開けた時、両親は幽霊でも見たような顔をしていた。私は一か月半もの間、失踪者として捜索されていたのだという。両親に正確な旅行先を伝えていたら、もっと早く事態は収束していたはずだ。

二十八番の棺の中で、眠りについてた智也の遺体は、引き取った。智也のご両親に遺体を返すと、彼らは静かに涙を流した。

智也は今、この墓の下に埋まっている。

「同じお墓に入りたかったよ、智也……」

智也の眠る墓に、語り掛ける。彼のご両親には、新しい人を見つけるようにとされているが——当分、そんな気持ちにはなれそうもなかった。

記憶を失った私を、あの冷たい場所から呼んだ智也の声。今は、もう聞こえない。

「おやすみ、智也」

私はそっと、その場を去った。

おわり

あとがき

ある人をその人たらしめているものは、何でしょうか。人の体は老い続け、心は動き続けます。全く変化しない人は、どこにもいない。分子生物学の観点からいえば、今のあなたは明日、三分の一があなたではなくなっています。今あなたを構成している原子は、三日前後で跡形もなく失われ、摂食や呼吸により取り入れられた新たな原子に代わられるからです。科学的に見ても、

ヒトは常に変化の中にあるというわけです。じゃあ、私たちは何を根拠に、自分を自分としているのでしょうか。

さて、今回はいつもとは全く違う手法で書き上げました。ちょっと読みにくかったかもしれませんが。こんな読みにくい小説を最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございました。輪読会は、お手柔らかに。

以上、幼夏ちゃんでした☆

銀河超皇帝 T A K A S H I

今畑 鏡

『ユーザーの皆様へ。いつも「T40（タイタン・タクティス・トークン・トルーパー・オンライン……略称ティーフォーオー）をご愛顧いただき、誠にありがとうございます。この度は、皆様にお詫びしたいことがあり、お知らせの機会を頂きました。

さて、配信開始から五年経つT40ですが、来月の上旬、サービスの終了を正式に決定しました。突然のことで本当に申し訳ございま——』

「ふざけんじゃねえ！」

俺、タカシは手に持っていたスマホをディスプレイに投げつけた。バキンという音と共に四つあるうちの一つのディスプレイの液晶が真っ暗になった。Twitter専用ディスプレイである。

なんだ！サービス終了だって？

アプデ情報かと思ってツイートしてみたならこれだよ、いい加減にしろ。

T40とは、ネット上で配信されているMMORPGの一つであり、魔法あり、武道あり、何でもありのオンラインゲームだ。基本プレイは無料ということもあり、登録ユーザー数は二百万人を超えている。

このゲームの特徴として、ユーザーは一つの国に所属して国同士で領土を取り合うのだ。もちろん、ユーザーが自分で立国することもできる。

俺はこのT40のベータ版からプレイしている、いわば古参プレイヤーの一人である。そして、T40で最大の国である「NIT（ノース・イクリプス・テンペスト）」王様なのだ。

「俺がいくらお前らに貢いだと思ってるんだ！」

画面に叫んでも何も帰ってこない。

俺はいちよう現実世界では大学生と言うジョブをしている。

大学生というのは便利だ。まず、外に出ることが少ない。一人暮らしで親というオヤフラ（親が自分の部屋に勝手に入ってくる）もないし、毎月親から仕送りがくるし、奨学金だってもらえる。進級だってFラン私立だからテストの日に学校に行くだけで何とかなる。

俺は自分の金と時間のすべてをT40に費やしてきた。そのおかげでNITの王様になって五十万人以上の国民を統治しているのだ。

それなのに……クソ！

——ヴーヴーヴーヴーヴーヴー——

どっかでスマホが鳴ってる。こんな気分なのに誰だ？

俺は周りに転がっているエナジードリンクの空き缶と丸まったティッシュをどかし、Amazonの段ボールを踏みつけて足場を確保してスマホを探す。

エナドリもAmazonも命の元。特にエナドリは通貨にもなるっていうし。

案の定、電話の相手は母親だった。

「もしもし」

『もしもし、たかし？元気かい？』

「なんだよ、母さん。俺は元気だよ」

『そう。今日、仕送りをたかしの通帳に入れといたからね』

「おう、ありがと。話はそれだけか？」

『あっ、たかし。勉強はちゃんとやってる？』

「やってるよ」

俺は一国の王なのだ。帝王学の勉強はしっかりやっている。

『友達とは仲良くやってるかい』

「やってるよ。俺忙しいんだけど」

友達は、声しか聴いたことがないけどたくさんいる。

『そうかい。母さん安心したよ。今度実家に――』

俺は一方的に通話を切った。

伸び切った髪をぼりぼりとかく。

安心ってなんだよ。俺のアパートに来たことないくせに。それに王様に実家へ帰る余裕なんてないに決まってるだろ。

ああ、現実世界はイライラすることばかりだ。

こんな時は甘いものでも食べてストレス解消するしかないでしょ。ね、プロデューサーさん！

俺はAmazonの箱からプリンを取り出して（Amazonさんは何でも持っている四次元ポケットだ）ネット小説を検索した。

俺は小説を読むこととプリンとエロ同人誌が大好きだ。

ああ^~心がぴよんぴよんするんじゃあ^~

といっても、小説はネット小説、である。無料で読めるんだから小説は買ったことはない。俺の金はT40を最優先にしているんだから節約はしないと。節約は大事だ。

うん、やっぱり俺TUEEEEE異世界転生ハーレム日常系は面白い。この世じゃなくてあっちの世界に生まれてきたら絶対最強になれるのにつて毎回思うもん。

と、読者は思っているんだろうが、あいにく俺は別だ。俺はNITの王である。T40で最強の存在である。

俺はこの腐りきったこの世に飽き飽きしている。この世は残念なことに、俺には合わない。適材適所ってやつだ。この世に俺に適した場所なんてない。

ゆえに、T40こそが俺にとっての現実であり、生きていることを実感できる世界なのだ。だから俺はやらねばならない。自分の世界を守るためにも。

「俺がT40を死守する」

※

俺の一日は現実世界の午前四時から始まる。午前四時はT40のクエストが切り替わる時間なのだ。

今日も一日がんばるぞい！

俺はサクサクと演習などのルーチンワークをこなして玉座に座っていた。演習は大事だよね~提督~

俺の国、NITは中世ヨーロッパをイメージして作った。石造りの城はドラクエのサザンピーク城のように屋根の上を川が流れていてとても幻想的だ。

本当はレヌール城やエスターク城にしてもよかったのだが、結局サザンピーク城を参考に建築した。

すると、何人かが俺のところへやって来た。ドレスを着た美女が三人と鎧を纏った騎士が一人。

チャット画面が表示される。

レイ：ゼロ、緊急事態です。

ニコニー：昨日の発表でもう民衆は荒れ狂っております

セカイ：ログイン数も減ってきています

カイザー：隣国でも似たような事態が起きており、このままではラスカスとの戦は実行できません

ゼロ：うろたえるな



ゼロはこの世界でのハンドルネームだ。好きなアニメからとった名前だ。したがって、俺は黒の仮面をかぶっている。

俺の周りを囲んでいるのは、カイザー以外俺の後である。T40では一夫多妻制を認められている。ハーレム万歳だぜ！

ちなみに、カイザーはベータ版から共に戦ってきた一番の臣下だ。知名度は低いけど、俺と同じようにT40の腕前はピカイチだ。

ニコニー 流石、ゼロさまです。何か策があるんでしょうか。

ゼロ：ある。とっておきの策だ。それは――

俺はもったいぶって答えを書くのを止めた。

レイ：あのグリップスの戦役、ブラックリベリオン、一年戦争、さらに数多のイベントを勝ち抜いたゼロです。きっと、名案があるのでしょう。

ゼロ：そうだ。俺はゼロ。世界を変える男だ。俺の力で運営をも従えよう

セカイ：もしかして、あの力を使うのですか

ゼロ：そうだ。『ズヴィズダー』を行う。

ズヴィズダーとは、T40のすべての国を統一することである。ズヴィズダーすると運営が願い事を一つ叶えてくれるという。しかし、ズヴィズダーを成功させた者は現在一人もいない。

ズヴィズダーこそが運営が提示したこのゲームのゴール。

『神の力か？欲しけりゃくれてやるぜ…… ズヴィズダーしてみろ。この世の全てはその向こう側に置いてきた』

このキャッチコピーは、T40のプレーヤならだれでも知っていること。だが、ズヴィズダーなんておとぎ話だと疑う者も多い。

うわ……ズヴィズダーってタイピングすんのめんどくさいなあ。

カイザー：もう運営からのアイテム支給も終わってるんですよ。こんな状態でズヴィズダーなんてできませんよ

確かに、サービス終了宣言からアイテムの販売はストップされた。

ゼロ：できるぞ、藤堂。

カイザー：？俺、カイザーっすけど

もう、今ゼロになってるんだから空気呼んでくれよ。

ゼロ：いいから聞け、藤堂。アイテムが無くてもズヴィズダーできるぞ

セカイ：どうやって？やっぱりギアスでも使うんですか(笑)

ゼロ：いや。その必要はない。誰だってサービス終了は嫌だろう。NITは他の国と超合衆国を作るのだ

カイザー：超合衆国ですか。つまり、戦争で領土を争奪してきたこの世界で対話をするということですか

ニコニー：無血革命ですか！すごいです！

レイ：革命しちゃったらダメでしょw なんか本当のゼロみたいになってきましたね

ゼロ：この世界のピンチだ。敵味方など関係ない。協力してこの世界を守ろうではないか。

カイザー：名案だ。必ずズヴィズダーを完遂させよう！

ゼロ：この作戦名を「ヴェイガン」とする！

※

NIT国王ゼロによるヴェイガンの発令後、すぐさま、他国に使いを送り交渉を始めた。また、Twitter等のSNSを使って情報を拡散し同士を集め始めた。

ゼロはT40の有名人であり、もともと認知度も高かったこともあって瞬く間に情報は拡散された。

すると、サービス終了に防ぎたい者やT4Oが終わる前に「一華」咲かせたい者たちなどが大勢集まった。

だが、

カイザー：ゼロ、大変です。

ゼロ：なんだ

カイザー：実はラスカスも私たちと似たような動きをしているのです。これを見てください。俺はカイザーから送られてきたデータに目を通す。なるほど、俺が王様にズヴィズダーするのが許せないらしい。あいつら俺のアンチだもんなあ。しかし、これは予想済みである。

ゼロ：大丈夫だ。藤堂。気にすることはない

カイザー：俺はカイザーです。しかし、どうするんです。これはヴェイガン一番の障害です。

ゼロ：いや、今のラスカスの様子を見てみろ。いいものが見れるぞ

カイザー：見ろって言われても……あっ！爆発が。

画面上に表示された上空から見たラスカスはいたるところで爆発が起こっていた。

そう、俺はラスカスが従わないことを知っていた。だからこそ俺はある作戦を仕掛けていたのだ。

カイザー：まさか…… 捨てアカ特攻ですか！

捨てアカ特攻とは、自爆魔法を覚えたアカウントを敵国に送り込んで自爆させる戦法だ。いわゆる人間爆弾である。

昔、大量にアカウントを作成した奴がこの戦法をしていた。けれど、現在は運営のアップデートで一人が複数のアカウントを持つことはできなくなっている。

カイザー：なんてことを。これでは我が国にペナルティが課せられますよ

このゲームでは特攻を行ったアカウントと所属の国にはペナルティが課せられるのだ。

ゼロ：問題はない。俺が何人かをラスカス側に付くように仕込んでいたとしても、画面上では、ラスカス所属の者たちが好き勝手に自爆しているだけだ。

カイザー：そうですね……

カイザーの言いたいこともわかる。『これは人としてやって良いことなのか』

ゼロ：俺はこの世界を守るためなら鬼にでもなるし、悪魔にでもなる。撃っていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ。俺にはその覚悟がある。

ラスカスは数日のうちに自滅するだろう。俺の作戦勝ちだ。

※

俺の予想通り、ラスカスは自滅した。ラスカスの国王も責任逃れにアカウントを消して逃亡した。もう俺に敵対する国はいない。

今日はズヴィズダーをする重要な日である。たしか、今日は大学の期末試験の日だったかもしれないが、そんなことはどうでもいい。T4Oと明日の期末試験なら、T4Oを優先するに決まっている。試験だって再試を受ければなんとかなるだろ。

正午前、俺は自分の城に各国王を集めて会議を開いた。

ゼロ：ズヴィズダーの完遂後、必ずあなた方には領土と国民を返還しよう。賛成の者は拍手をチャット画面では「88888888888888——」とたくさん拍手が起こった。

ゼロ：ありがとう。では超合衆国を設立する。NITに無条件降伏を

俺はT4Oのマップを表示させた。マップ上はNIT色にどんどん塗りつぶされていく。そして——

全てがNITの領土となった。

またひとつ俺が伝説を作ってしまったか。

スコアランキングなんてものと比べ物にならない記録を作ってしまった。まあ、最強の俺にか

かればこんなの楽勝だ。さて、問題はここからだ。

レイ：おめでとう。ゼロ

セカイ：すごいです。本当にやってしまうなんて

ニコニー：また惚れ直しちゃいました

カイザー：さて、勝負はここからです。あなたにこの言葉を送ります。「その道を行け。勝つにしろ負けるにしろ、すべてを出し切らなければ、何も獲得できはしない。それは国でも個人でも同じこと」

ディスプレイに、ウインドウが表示され、そこにメッセージと電話番号が書かれていた。

『「ゼロ」様。おめでとうございます。N I Tはズヴィズダーを完遂しました。では、国王「ゼロ」の願いを叶えましょう——』

俺はスマホを取り出し、表示された番号に電話を入力した。

そういえば、母親以外にスマホで電話するなんて久々だな。

なんか緊張する。知らない人に電話かけるのは昔から苦手だ。

受話器のマークが描かれている発信ボタンが、なかなか押せない。

言うことは決まっているのだ。そして、相手は絶対に俺の要求を聞き入れる。あれっ、これってギアスじゃね？

.....よし、休憩してから電話をかけよう。

今期の深夜アニメを見るくらいの余裕は十分にある。焦ってしまっただけは仕方ない。自分のベストコンディションで挑まなくては。

結局、夕方まで時間がたってしまった。

いや、俺は悪くない。ただ単に、一本目に見たアニメがあまりにもクソだったんだ。声優は棒読みだし、絵は昭和かよ、ってぐらい可愛くないし.....。それで気を取り直して二本目を見たら、これは俺の嫌いな監督が作ってる作品で最悪だった。

なんだよ、こんな二期。誰も期待してないわ。声優と結婚しやがって、調子に乗るな。後でT w i t t e rとに2 c hで叩いてやるからな。

チツ.....こんな気持ちで世界は救えない。俺はこれで最後と三本目を見ることにした。

すると、このアニメ「エクストリーム・ストラトス・(E \$ ) はなかなかブヒれるアニメでな..... 肌色多めの女の子が可愛いなのって！しかも、俺の好きな声優のみもりんも出てる！

あまりのエロさに、このトリケン、前かがみです！

俺はみもりんが大好きだ。あのとろけるように甘い声と、突き刺さるようなまっすぐな声が好きだ。結婚したい。共同作業したい（意味深）

そのときの俺のテンションはマックスだった。マックスハートでハートキャッチだった！真っ赤なトランザムでN-TD状態である。

「.....ふう〜」

結論から話をしよう。今、俺の周りには、昔みもりんがやったキャラの同人誌とみもりんの写真集と空っぽのティッシュ箱が転がっている。伊藤ライフ最高だぜ（がんばれ がんばれー）

まあ、ええやろ。今の俺はフラストレーションを解放した状態だ。緑色である（UC）

王様が賢者になったのだ。これで最強のコーディネータ、ニュータイプ、アンサートーカー、明鏡止水、Xラウンダー、イノバイター、映画版のび太である。

※

俺は深呼吸を一つして発信ボタンを押した。

三コール以内に応答があった。

『もしもし。遅かったじゃないか。待っていたよ』

中田譲治を彷彿させる渋い声がした。

俺はこの相手は誰かすぐにわかった。『ツアーリ』だ。

ツアーリは、T40のエグゼクティブプロデューサーである。つまり、T40の生みの親、父である。

その類いまれなるカリスマ性でユーザーを魅了するゲームを数多く作ってきた。

ファンならば、ツアーリと会話できるなんて発狂してしまうくらいのことなんだが（SAN値ピンチ、SAN値ピンチ）だが大丈夫だ、問題ない。今の俺は賢者で皇帝のゼロである。屈することはない。

『ふっ、貴様がツアーリか。私はゼロ。NITの皇帝である。今回は貴様にギアス（要求）をかけるために電話をかけた』

いつも以上にロールに磨きがかかる。

『えっとー』

ツアーリは少しうろたえているようだった。しょうがないことだ。世界統一を果たした男と話しているのだ。ビビってしまうのも仕方がない。それにギアスをかけられるのだからな。

『フッ、ゼロが命じる。貴様はT40のサービスを継続するのだ！』

決まった……。今頃カシャンとツアーリの精神が曲げられ、瞳の輪郭は赤くなっているだろう。

『イエス、ユアハイネス……』

よし、俺の勝利だ。愛衣ちゃん大勝利！

『あー、そういうのいいから、タカシ君。正確には三浦タカシ君』

は、何いってんだ？ タカシ？ 何で俺の本名知ってんだ……

『な、何を言っている。俺はタカシなどという――』

『僕はT40のプロデューサーだ。君の個人情報なんてユーザー情報を漁ればすぐにヒットする』

ま、マジかよ……

『それに間違ってるし。正確には「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる――」だから。C、Cはゼロじゃなくてルルーシュにギアスを与えたんだから、ゼロなわけないだろ。それにルルーシュのギアスは、正確には直視しないと使えないし。本当にコードギアスが好きなのかな？ にわかかな？』

俺の頭の中でガラガラと何かが崩れていく。羞恥心がザブンザブンと心を満たしていく。

『あと、正確には、俺の本名は貝瀬正だから』

落ち着け落ち着け……。俺はがくがくと体を震わせていた。いかん、奴の流れにのまれては。これは精神攻撃だ。脳量子波が乱れる……

『くっ……。これがツアーリのペルソナか――』

俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ。俺はゼロ――

『だから、俺は、正確には「貝瀬」だってば。ホント勘弁して。大学生なのにまともに人と会話もできないのか。アスペかな？ それに、そこは正確には「ギアス」だろ。なんでペルソナなんだよ。設定ガバガバだぞ』



んだ。私の力で叶えることはできない』

『なんでだよ、あんたはT40の親父でしょ！ それぐらい朝飯前のことだって言ってみろよ』

俺らが好きなT40の父親がそんなかっこ悪いことを言わないでくれ。

『僕ができることは、ユーザーにアイテムの提供、ユーザーの好みに合わせたオーダーメイドのマップ開発、ユーザーのアビリティ向上、何ならステータスを全部マックスにすることも可能だ。』

そして、このゲームから嫌なやつを強制的に殺すことだってできる。この両手で、一瞬でできる。タカシ君たちが倒した

国、正確には「ラスカス」も一瞬でぶっ壊すこともできるし、一瞬で復活させることもできる。

どうだい？やってみるかい』

考えてみればわかることだった。貝瀬さんはT40の神である。神の一撃で俺の努力は一瞬で溶けてしまう。焼き払われた跡には何も残らない。

『あ、あんたはこのゲームで神だ。神様なんだろ！』

『そうだ。僕は父親であり、全権を握る神だ。だが、それは正確には「T40の中でだけ」だ。現実世界では、ただのゲームクリエイターおじさんだ。君たちを惑わせた、ただのカカシだ』

貝瀬は大きくため息をついた。

俺はため息することもできなかった。ため息すると涙が出そうだった。自分が今まで積み上げてきた時間が、金が、すべてを貝瀬さんが握っているのだ。

『タカシ君。君は僕のゲームを一番愛してくれたユーザーだ。心の友だ。だから、君には僕の思いを話そう。きっと分かってくれるはず。』

僕は、幼いころからゲームが大好きだった。初めてやったゲーム&ウォッチの「オイルパニック」だ。ツルツルのオイルの上で飽きるまで何度も遊んだ。

一番好きなゲームは「ドラゴンクエスト」だ。壮大な世界は僕にとって幻想的で刺激的な世界だった。

そして、僕はいつしかゲームの世界に行きたいと考えるようになった。

しかし、ドラゴンクエストには必ずエンディングがある。

遊園地に閉園時間があるように終わりがあったのだ。

僕はどうしてもそれが許せなくてね..... いつまでもゲームの世界で遊んでいたかったんだ』

『それでT40を作ったんですか？』

俺は、貝瀬さんは自分が神になってしまい、あの時のようにゲームを楽しめなくなったから、プレイヤーに戻りたいんだと思った。自分勝手な大人だと勘ぐった。

『そうだ。僕と同じ志を持ったクリエイターが集まってT40は生まれたんだ。』

オンラインゲームだから、何度でもアップデートが可能。プレイヤーはアップデートさえあれば、永遠に遊ぶことができるんだ。まさに、閉園時間のない遊園地、理想郷の完成だ。

けどね、僕たちが作った理想郷は、正確には「君たちを閉じ込める檻」だったんだ』

『檻？』

『そう、堅牢な檻だ。「井の中の蛙大海を知らず」っていうだろ？ 僕たちはその井戸を作ってしまったんだ』

『どうして檻なんですか？ 俺にとっては楽園だったんですよ』

『そうだね.....だけど、その楽園は人の人生を食べて大きく育つ檻だ。タカシ君のような現実、社会に怯えて逃げてきた、ならず者たちの住処になったんだ』

俺は自分の暮らしを振り返った。外に出る機会が減ったことを思い出した。

『当初はね、君たちみたいに時間とお金を際限なく吐き出してくれるユーザーは大歓迎だったんだよ。だって、僕にも生活がる。家族が妻がいて、娘がいる。家族を養うにはお金が必要だ。それに開発費が無ければゲームは作れない。』

お金のため、必要最低限な犠牲は仕方ないと思っていた。

そうしてT40を拡張していった。けどね、僕は大事なものを忘れていたんだ。僕はT40を優先するあまりに、家族との時間をなおざりにした。妻に言われたよ。

「私たちは、この世で生まれてこの世で死ぬしかできない生き物なのよ。私はここにしかいないのよ」ってね。

それ以来、妻とは別居中だ。そしてこれだけじゃなかった』

『何が起きたんですか？』

どンドンダンディな渋い声が弱弱しくなっていく。あんなに高くに居座っていたはずの神は、今は俺と同じ目線に居るような気がした。

『知っていたんだ。T40に熱中するあまりに引きこもりになる廃人が増加していることは。だけど、そこに自分の娘がいるとは思わなかった.....

娘はね、とっってもお父さん子でね、いつも僕が帰ってくるまでねむけ眼をこすりながら待っていてくれたんだ。僕の自慢の娘だ。

しかし、T40の開発が始まったころ、正確には「娘が小学校低学年」のころ、僕は家にあまり帰らなくなった。

娘には寂しい思いをさせたと思う。正直、嫌われてもしょうがないと思っていた。

けど、娘はずっと僕のことを好きでいてくれたんだ。

だから娘は、父親の、僕の面影を追いかけてT40を始めたんだと思う。T40は僕が作った世界だ。僕が会いに来てくれないとわかった娘は、自分の足で僕の職場に来たというわけだ。そしてわかりやすいように』

貝瀬さんの方から、ツターンとキーボードを叩く音がした。

すると、僕のパソコンにある画像が送られてきた。

それは、貝瀬さんのコラ画像だった。西洋の鎧を身に纏っている。それはどこか、見覚えのある画像だった。

『娘はね、僕に気づいてもらいたかったんだらう。性別を偽り、キャラクターを最大限、僕に似せて作った。

そして、僕が「ツァーリ」ってあだ名で呼ばれているから、それをドイツ語に変換して——』

『カイザー』

『そう名乗った』

貝瀬さんは唾をごくりと飲んだ。

まさか、カイザーの中の人が女性だったなんて.....そういえば仲間たちとオフ会なんてしたことなかったな.....だって、T40でいつでも会えるんだし。ララアにはいつでも会いに行けるから..... そんな甘い考えで、現実で会おうとは思っていなかった。

『僕は思い知ったよ。子供たちを甘い汁で誘って未来に蓋をしてしまったんだ。無限大な未来をT40という、バカの考えた行き止まりのある檻の中にね。

僕は.....僕は.....もう一度娘に、この世で.....「ひとみ」に会いたい.....この肌でひとみの温もりを確かめたい』

スピーカー越しから貝瀬さんが鼻をすする音が聞こえる。

俺は自室を見回した。Amazon空き箱、丸まったティッシュ、同人誌.....立派な檻がそこにあった。

『だから.....だからあんたは、貝瀬さんはT40に終止符を打とうと思ったのか？』

『そうだ。子供たちをネバーランドから帰してやらないと..... 子供たちに未来を返さないと... ..タカシ君をここから卒業させて、現実に戻してあげないと』

なんで、俺は勝手にT40に逃げ込んだだけなのに——

『なんで、もっと頭のいいことができなかったんだよ！ 貝瀬さんはT40の神様だろ？ 神様なら、俺たちの理想郷を作ったあなたなら、アツと驚かすような魔法で幸せな終末だってできた





誰かが、そう言った。気にしない。俺は玉座に座った。  
「私が、第九十九代T40皇帝のTAKASHIだ」  
『おい、ツァーリはどこに行ったんだよ！』というコメントが流れる。  
「先代の皇帝ツァーリは死んだ。私が殺した。よって私がこの世界の、いやこの銀河の皇帝、銀河超皇帝TAKASHIだ！」

『たかし？誰だそれ！』

『この野郎！認めないぞ！』

「この痴れ者を排除しろ！」

超合衆国の中の一人の王様が叫び、その国の兵隊と思しき集団が飛び出してきた。

うん。そこに兵隊がいることぐらいわかってるって。

俺は目立つようにパチンと指を鳴らした。

ドドドドドドド

『なんだあれ？ガンダムか？エヴァか？ラーゼフォンか？ナイトメアフレームか？』

『アイエエエ！』

『ニンジャ！？ナンデ！？』

『コワイ！』

『ゴボボーッ！』

色々なコメントやら声が聞こえるがどれも違う。

「違うぞ、IDE●Nだ」

赤と白のカラーリング、全長一〇五メートルほどある巨大ロボット（伝説）である。

「よし、撃て」

IDE◎Nは背中から巨大なライフルを取り出すと一筋の太い光が超合衆国に加盟している王様たちを包み込み.....

そして何もなくなった。

『うわあああああああああああああ』

『逃げろおおおおおおおおお』

悲鳴が聞こえる。個人チャットでは、  
ニコニー：何でこんなことしてるの？

レイ：冗談だよな？

セカイ：ゼロさん.....

ゼロ：うるさいぞ。ネカマどもは黙って消えろ！

「動くんじゃない。皇帝の話をしちゃんと聞けないのか？小学校からやり直せ」

俺は動いている奴らから片っ端に照準を合わせて小学校送りにしてやった。あれ？消えて亡くなっちゃった。

五分ぐらいたつと、みんなは動かなくなった。やっぱり死にたくないんだろなあ。

「わかったか。これが超銀河皇帝の力だ。ふははははは！はははははははは！独裁じゃあああああああああ」

民衆は完全に諦めていた。死んだ目をしていた。しかし、怒りに燃えている奴が一人いることを俺は知っている。

「お父さんの、お父さんの大事なものを壊して！」

ザクリ

俺は自分の胸元を見た。そこには剣が刺さっていた。

「ごめん、ごめんなさい。でも、どうして！どうしてこんなことを」

カイザーは泣いていた。怒りに燃えているというより、長年の友を切ってしまった自分を悔やんでいるようだ。

俺はカイザーの耳元でそっと呟いた。

「そろそろ、おうちに帰る時間だ、貝瀬。お父さんが待っている。さよならだ」

「えっ」

俺はわざとらしく壇上の前に躍り出た。

「くそ……臣下の分際が……こうなったら、死なばもろともだ。やれ、IDEON！」

俺はイデオンに最後の命令を下した。

——その瞬間だった。イデの発動が起こったのは——

T40は、インターネットの海の波になったのかもしれない。

※

その後、俺は、ネット上で大いに叩かれた。本名の特定はもちろんのこと、自分の個人情報は全てネットの海に放流された。

もう、ネット上で開けっ広げに歩けないだろう。

——ピンポン——

女性の声が聞こえた。

「——」

俺は少し笑って、頬を伝う涙をぬぐった。

あとがき

久しぶりにあとがきを書きます。私は、この作品を書くにあたって、自分の苦手分野に取り組んでみました。

実際、この作品は自分が散々批判してきたパロネタをドンドンと使っていくという強行に走り、自分の限界に挑みました（ページの的にもね）

さてこの作品を書く前に、二作品ほど泣く泣くあきらめたものもございます。（ページ数的に）できれば、完成させたいところです。こちらはパロネタありません。

さて、パロネタと言うのは、好き嫌いが分かれると思います。知らないパロネタが出てきたりすると作者を殺したくなりますよね。でも、その一方でその作品を好きになることもあります。

どっちが正しいんでしょうか？

答えはわかりません、です。上手にパロネタと付き合っていくしかなさそうです。

うわ……。もう、締め切りの時間ですね（ただいま金曜日午前十一時）

それじゃ。

## チェッカーフラッグ（自分）

---

チェッカーフラッグ

自分

「はい！」

高校二年の春。沈黙になるべき教室の空気を、頓着なくすり替えたのは一つの挙手だった。

つい「おいおい、マジかよ……」と呟きかける。まあ、そのくらいの物好きはいてもらって構わんよ。でも俺の真後ろで、しかもこの委員会で挙げるって。……そうか、こいつが噂の……。そう思ってちらとふりかえる。

黒髪を肩までおろしている彼女は、教卓の方を向いている。はるか彼方の旗だけを、ただひたすらに睨んでいるような。その瞳に、なぜか刹那的に吸い寄せられた……。気がした。

\*

「チバ君、だっけ」

教卓に肘をべたりとかけながら、黒板に書かれた他の委員会の役員を提出用の紙に書き写しつつ、話しかけてくる。肘元にはやつの布製の簡素な筆箱が置いてある。

「ああ、よろしくな」

「……」

無言かよ。中学も一年のクラスも違う初対面だったら、挨拶返すくらいするもんだろ、とため息が出る。ふと、筆箱のキーホルダーに目がいく。`GT、？` そんな形をしたシンプルなやつだ。それを謎に思っていると急に手を止め、

「……書いて」

と顔を向けて要求してくる。

「へ、何を？」

下の紙を見る。一番先頭の`生徒会執行部、の欄だけが、二人分白い。

「別に先に書けばいいじゃん。それにほれ、座席表もそこにあるし」

彼女は、腕の下に敷いていたものに目を向ける。

「こ、こういうのは男子を先に書くものでしょ？」

目が泳いでいる。だが、

「それに大事な役職なんだから、私が勝手に書いちゃだめじゃない！」

と途端に、問題の答えを発見したかのように強気になり、将棋の香車のような眼を差し向けてくる。……なんかメンドイなこいつと思いつつも、

「はあ、まあ何でもいいわ……」

とペンを借り、`千場<sup>ゆうま</sup>優磨、と手を動かす。書き終わると同時に手からペンと紙が抜き取られる。そして、やつはそのペンでそのまま最後の空白に、`諫山<sup>どうやま りこ</sup>理子、と埋めた。

＊

「いいか、お前らの先輩方が積み重ねてきた信頼があるからこそ、去年のような生徒主導の`自由な体育祭、ができたんだ。お前らがその信頼を壊したら、その時点で体育祭は中止だ」

今年度最初の執行部会。生徒会室で、顧問の多田先生がお決まりの訓示を、我々執行部役員に下賜くださっている。

ここにいる連中の大半は、昨年執行部だった部活の先輩に言われて、ノリでなったやつらばかりだ。

体育祭はお祭り。最低限のルールを守りさえすれば、面倒なお叱りも受けずに皆が楽しい時間を過ごせる。執行部はそのお手伝いをして皆に感謝され、ちょっとした達成感を得られる。

それで十分なんだ。先生のこの訓戒も、我々に最低限を忘れさせないための、トテモトテモありがたいお言葉。

そう皆が思って、この時間をやり過ぎそうとしているのに。

神の啓示を受けるがごとく、首をばねにして何度もなんども、話に頷いているバカが俺の隣に約一名……。

「うんうん」

とちよいちよい声も出す。やめてくれえ、諫山さんよ。何でやり過ぎだけの時間で、俺がこんなに恥ずかしい思いしなきゃいけないんだよ。空気凍りついてるぞ、と思った直後、

「体育祭にかまけて、本業である勉強が疎かになるなんて問題外だ。特に、運営するお前らがそんなんじゃ話にならないからな。定期テストはもちろん、小テストでも赤だったら活動時間を減らすぞ」

と先生がくぎを刺した瞬間、やつの首の振子が一時停止した。いや、刺さるんかい……。

しばらくしてまた揺れ始めたが、その振れ幅は明らかに小さくなっていった。

＊

先生さまがいなくなって数十分後の生徒会室。

「じゃあこの後は、まあ担当ごとに打ち合わせ入ってください」

脇坂祐輝生徒会長が全体に指示を出す。すると、二、三人程度に集まり、部屋のあちこちで、立ったままあるいは椅子に座ってそれぞれ自己紹介が始まった。

「総務担当の代表で生徒会長の脇坂でっしや」

と、役員が散らばったのを見て私ともう一人に向けて名乗る。

「三年の関口琴音です。よろしくね」

と割と目元が深くて美人な隣の女の先輩が言うのに続き、

「二年の千場優磨です。よろしくお願ひします」と、新しい学年にやや言いづらさを感じつつ返す。

「さっきもざっくり言うたけど、まあ総務は執行部全体を牛耳る役っちゃい。スケジュール通りに担当動かしたり、担当の情報集めて問題の対応したり、会議の準備したりする感じが大体やね。あとは――」

ちよくちよく入って来る謎の方言が気になりはしたが、自分なりに関心を持って耳を傾け、今後の仕事を何となく把握したんや。一応近畿の高校やし、そういう人がおってもかまへんのや、はい。

「あの子、真面目だね。てっきり総務かと思ったけど」

と、関口先輩が俺に囁く。いやはやと、早速美人な先輩に耳元で話しかけられ、ちよいと弾んだ気分になる。先輩と顔の方向を合わせると、三人の実行委員がいた。

体育祭は、執行部役員を数人一組に分けた`担当、で運営する。総務、競技、活動場所、衣装小道具、そして会計。役員それぞれの希望に沿って担当を決めた。俺は、特にこだわることもなく、何となくで選んだのだが.....。

「え？ ああ、諫山ですか」

そう答えたところで、「まあ」と会長さんも後方からささやきに加わり、

「彼女もわかって希望したと思うわな。ただ.....まあやりすぎないようにしてもらいたいね」とやや怪訝そうに言う。

活動場所担当。応援練習や各軍団の放課後などの体育祭準備活動を運営・管理する仕事らしい。

一学年各六クラスあるのを、抽選で紅・青・黄の三軍に各学年二クラスずつ割り振る、ってのが昨年だったな。今年も結局同じ感じで振り分けるんだろうけど.....。

うちの体育祭は三年生が熱中するイベント。んで、熱が入りすぎて、予定された時間をオーバーして授業に遅れる、なんてことが毎年のちょっとした問題らしい。今年もちよくちよく顧問さまに指摘されるんだろうな。

その辺の`管理、をするわけだから、軍団の三年生に口を酸っぱくする担当なのだろう。

「やりすぎないように」、か。確かに暴力団撲滅並に気張っても仕方なさそうだな。そう思いつつ、どことも変わらず初対面の雰囲気醸す活動場所担当の面々に目を向ける。

靴ひもは.....緑、赤、赤。あいつと真紀と、あの男の先輩は知らないな。ただ、あいつと真紀...か。

\*

会議から数週間後、春のグラウンドに半そで半ズボンで体育座りさせられている。ああ、いやちょっと肌寒いのはまだいいんだ。それよりも――

「いいか、全力で走り切れ。全力でってのは最後にゴール前でダッシュしろってことじゃねえぞ。最後まで余力を残さず走れってことだ」

と、ジャージ姿の多田先生さまがおっしゃる。ほれ、これだからこの先生の授業はメンドくせえ。そもそも何で年度初めの体育が三〇〇〇mなんだよ。女子は二〇〇〇mしか.....は仕方ないかもしれないが、体力テストでシャトルランやったばっかじゃんかよ！ という反乱声明は心に封印しつつ、忠誠を体育座りで示す。同じく気怠さを隠そうとしている同朋たちの顔を伺おうとする。が、やはりこの場でも約一名の信仰熱心な姿は変わらない。

「過去には、完走した後に意識失ってAEDを使ったやつもいたんだ。そのくらい自分を追い込んで追い込んで追い込むんだ。負けんじゃねえぞ」

という一体誰が好き好んで突っ込もうとするかわからない臨界状況への勧誘に、ノーセンキューの意思を自分で確認する。今日は放課後に執行部の会議も部活もあるし、ここで体力をあまり消耗するのもよろしくない。

ただ諫山の首の振子だけは、終始震度四を観測し続けていた。

\*

「スー、ハアアツ、スー、ハアアツ」

できるだけ白線の近くに身体をよせる。もはや何度目か分からないグラウンドのカーブの終わりへさしかかる。

別に脚がついてこないわけじゃない。最初の脇腹の痛みも今はない。やや足首がだるい気がするくらいで.....。

「スー、ハアアツ、スー、ハアアツ」

ストレートを一〇〇m進む。スタートラインが見える。

あと一周！ このペースでいい。続ければいいんだろ！ このまま、このままよお！

そう思って、スタートライン上で残り一周だ！ を嘯みしめた時だった。

一秒か二秒おきくらいに「アウ！ .....アウ！」とグラウンドの空気に、苦しみを一瞬一瞬で一気に放出するような叫びが響き渡る。

「スー、ハアアツ、スー、ハアアツ」

生憎、声の主を探す余裕はない。とりあえず、この一周を処理したいという心の勢いに流され、身体を前に出す。

最後のカーブの終わりまで来た。最初スタートラインだった線が、ゴールラインに見える！ 自然と体が前へ出ようとする。

ストップウォッチを持つ先生があと五〇メートル、二〇メートル.....。

よっしゃあ、やっと終わったああ！

「ハアアツ、ハアアツ、ハアアツ、ハアアツ」

止まらない呼吸。刹那の解放感に浸る。周りにも完走して腰を抑えてるやつも、へたり込んでるやつもいる。

だが、一緒になってへたれようと思う間もなく、

「フアアアツ！ アアツ！ フアアアツ！ アアツ！」

と、さっきまで数秒間隔だった喘ぎ声が、走る呼吸のテンポに変わって耳に刺さる。声のする方を向く。後ろにいた男子や一五〇〇mでまだゴールしていない女子達が走っている。そのまばらな人影群のうち、ゴールラインまで半周くらいのところに声の主がいた。

.....諫山。

そんなに大げさに走らなくてもいいだろ。真面目気取ってんな、皆一生懸命走ってんじゃねえかと、やや怒りを感じつつ、最後の一〇〇 をやつは迎える。

「フアアアアツ！ アアアアアアツ！ アアアアアアアアツ！」

とこっちに近づくにつれて、血を一滴残らず絞り出すような喘ぎになっていく。ペースは落ちもせず、上りもしない。

「諫山さん、やばくない？」「運動部じゃないんでしょ？」と、先に終えている女子が話している。やばい、のか？

周りの女子は、陸部やバスケ部などのガチ運動部連中ばかりだった。やつはそういう連中の次くらいを走っていたのだろう。

「ウアアアアアアアアアアツ！ ウウアアアアアアアアアアツ！」

俺は、呆然と立ち尽くして、やつを見ていた。数十メートル手前までくる。

やつの表情は.....と、凝視しようと思った刹那にやつはゴールを踏んでいた。

だが、やつのペースが落ちない。そのまま走ろうとしている。

「ウウアアアアアアアアアアアアアアツ！ アツ.....！」

おい。おい待ちよつとてよ。

「おい、諫山！」

声を張ったのは、多田先生だった。ストップウォッチを付近にいた生徒に渡して追いかける。

追いつく前に、やつは止まらずに体制を崩し、肩から倒れる。五メートルくらい転がって、止まった。

「ウアアアアアアツア.....アア！ アア.....アアツアアアツ！」

身体を何度も反らせ、右手で半そでの胸元を握りつぶし、首を見えない紐で締められているような呼吸なのか叫びなのかわからない奇声を、グラウンドに数十秒響かせる。

「やばい」

と、俺は背筋に鳥肌が立つのが分かった。気づくと、なぜか前に出ていた右足が、後ろに下がった。

多田先生が駆け寄って、声をかけている。女子数人が駆け寄って、陸部の部員が靴を脱がせている。

「AEDいるのか？」「いや、先生が何も言わないし大丈夫じゃね？」と、隣のクラスメイト達が呟いている。

「諫山さん、去年から部活入ってないよね。序盤に先頭引っぱって走ってたからビックリした」とあるバスケ部の女子も会話している。

叫びが聞こえなくなったが、やつの背中は激しく呼吸している。だがしばらくして、先生もそのそばを離れた。

「あいつ、バカじゃないのか」

と声が聞こえたのは、自分の口の中からだった。

＊

持久走のあった日の放課後。教室で執行部の資料をまとめたファイルをかばんにしまう。執行部の会議が終わり、これから遅れて部活に行くところだ。二年のほとんどは部活に行くか、帰宅している。二年の廊下や教室はもの静かだ。

俺の後ろの席では一緒に戻ってきた諫山が、机の上の単語帳におでこをあてて突っ伏してる。そういや明日は、英語の小テストだったな。

「部活は？」

「やめた、去年の冬に」

「合わなかったのか？」

「違う、もっとやらなきゃいけないこと見つけたから」

「ふうん。……勉強してくのか」

「うん……」と気の抜けた返事がくる。

「帰って休んだ方がいいんじゃない？」

といつつ、テスト範囲の書かれた資料をかばんから探す。

「帰ったら寝るからダメ」

「いや、だから寝ればいいじゃん」

お目当ての資料を手取る。

「寝ると勉強しない。小テスト落ちる……。それはだけはいけないから」

どうやら英単語の意味取りと書き取りが春休み課題から二〇語くらいずつ出るらしい。問題わかってるんだから、全然楽勝なような気がするのだが……。

「春休みの課題から出って書いてあんじゃん。もしかしてやってないのか、お前」

「やってるに決まってるでしょ、執行部やる気に来てるんだから。バカじゃない」

と顔を上げて、切れ気味に返される。最後の罵声はいらないだろ。真面目ぶりやがって、とや腹が立って、

「そんな疲れた中で勉強しても意味ないと思うけどね。二千で疲れるのなんかわかってただろ」とちよっかいを出してみる。

「別にわかってたし。でも二千だったら仕方ない」

と、目を廊下に逃がす。

「仕方ないって、どうしてだよ」

「持久走は体力使うものだからに決まってるでしょ！」

至極当然である、という顔だ。

「いやいや、使うにもほどつてもんがあるだろ。使い切ってどうすんだよ」

「先生が全力でやれていつも言われてるし」

「手抜けばいいじゃん。真面目にやっても苦しいだけだし」

「そんなの絶対やだ！」

唐突に背筋を伸ばしてこっちを直視してくる。

「何でだよ」

「何でって、やだから！ 自分に嘘は絶対つきたくないから！ 嘘つくくらいなら、二千の苦しみの方がマシ。……鈴鹿の千キロだって、走り切るれだけじゃ意味ないし、走り切れなきゃ意味がないだから！」

なんだそれ、全く意味わからんわ。そしてまたそうやってマジに見てきやがる。

「あっそ。じゃあ、明日ちゃんと合格してくださいね」

と、呆れあきれ、バッグを持って立つ。

「しなきゃいけないんだから当たり前……でしょ」

トーンの落ちたやつを後に扉を目指す。立ち去り際に横目をやる。単語帳を読んでいるやつの顔はむすっとして、目はキョロキョロと紙の上を転がっているだけのようなようだった。

\*

「あ、優磨君」

部活終わりの帰り道。同じ中学方面だと、やはりよくこうなるものだなと思いつつ、追いついてくる立川真紀を待つ。

「お疲れ」とお互いに定型文を交わして、並んで帰路へ向く。

中学から通っている橋の上から、一瞬川上へ顔を向ける。錆びついた小さな船たちが、今日も川岸につながられている。

すると橋の中ごろで真紀がカバンを背中の裏で両手で持ち、川上の方を向いて、立ち止まる。真紀の背中とカバンが見える。俺も足が止まる。

「あのさ、優磨君……」

……。

「うちと、付き合わない？」

……。

「だめ、かな？」

振り向いて頭を少し傾けつつこの上ない純朴な両目で見つめてくる。何と甘いアニメ声だろうかと思ひ、

「なんなんですか、唐突にその安っぽいシチュエーション提供と気持ち悪い声は」

と切り返す。すると、顔をしかめフンと鼻を鳴らす。

「もう、少しは乗ってよ！」

「知らんわそんなもん。うう、寒気がする」

「優磨君が暗い顔してるから、あたしの甘々な告白シチュエーションをプレゼントしてあげたの！」

真紀は同じ町内会の幼馴染で、何回か元カノと彼女を繰り返している。今は彼女ではなく元カノの妹だ。だからこそ、お互いに扱いはもうよくわかっている。

「これじゃあたしだけが痛いやつみたいじゃん」

「痛すぎて空気の凍りつきが止めらんないわー。まるで——」

何で今、それ言おうとした。

言葉が続けられない。

「まるで何？ 言ってよ。いつもならどんな中傷でもあたしにいつてくれるじゃん」

「はあ、何？ そういうの求めてた？ そうやって苦しみわざわざ希求するなんて——」

だから、何でだよ。しゃべれねえじゃねえか。

「言えばいいんじゃない？ あたしだよ？」



「……諫山、かよ」

「好きなの？」

「断じてない！ 死んでも！」

真紀が身を引く。顔が引きつっている。

「ごめん……」

真紀の久々の謝罪に驚く。そんなにマジに見えたのか、さっきの。

「悪い、マジんなって」

「正直あたしも困ってるんだ、諫山さん」

「え？」

「各軍団ごとに練習始まったでしょ？ それで、見回りとかしてるんだけどさ、いちいち細かいんだよね。今日も青軍の練習時間が伸びたのを一人で注意しに行くし。『先生に報告しましょう』とか言うし。昨日だって、紅軍が使用後に体育館掃除しなかったからって『何か処罰を』とか言うし。おかげであたしまで軍の三年生から白目で見られてる気がして、体育館入る時とかすごく怖いんだ」

「そっか。お前はもろあいつの被害者ってわけだな」

「被害者は言い過ぎだと思うけど。でもこれからどんどん三年生体育祭に熱くなるでしょ？ やっぱ怖いよ。大嶋先輩も『毎年こうだからゆるくていい』って言ってるのにさ」

活動場所担当の三年生、大嶋先輩っていうのか。

「先輩に相談とかしてるんだ」

「うん。でも同じ担当だから、同類視されてるかなって」

「うーん。俺には分からんわ。とりあえず部活の先輩とかに相談してみたら？ 仲いいでしょ？」

「あ、そうだね！ 最初からそうすればよかったね」

「は、ぶっ飛ばすぞ？」

やっぱこいつといると、気が楽になるな。

「まあそれにしても、メンドイやつだな」

「でも、この前ちょっとどうして執行部やってるかって話したの。私は、『みんなの楽しい体育祭のお手伝いして、ちょっとでもやりがい感じたり、ありがとうって言われたいから』って言ったんだ」

「そういうもんじゃね、大体。俺もそうだし」

「そうだよ。でも彼女はねー」

\*

「よーし、この前の小テスト返すぞ。七〇点いってないやつは再テストな。はいじゃあ、相田から名簿順にドンドンこい」

英単語の小テスト返却。予告されずに出現したアクセント問題にはビビったが、所詮五問だけだったし。

「千場一」

席を立って紙を受け取ると、97の数字が見える。合格を確認して席に戻る。

答案をしまっている横を諫山が通過するのが分かる。ま、これくらいだった、ちょっと勉強すりゃ誰でもとれるだろうと、

「受かりましたよねー、諫山さん」

と振り向いて挑発してみる。

するととっさに机上のテストを裏返す。紙の左上が点数を隠すように折られている。やつも俯いて白い紙を呆然と見ている。

「ごめん」

やつが小さくつぶやく。

「え、落ちた？」

うそだろ。問題が分かってる単語四〇個だぜ？ 落ちるもんかよ、普通。

「ちょっと、黙ってて……」

「あ、わりい」

体を前に向ける。

テスト返しが終わり、授業が始まる。

ズツ、ズツと、背後から鼻をすする音が聞こえる。時折嗚咽が聞こえる。

一つの机に潜もうと努めるその音は、ペンをつづる音にも覆われず、教室中に漏れだしている。誰もしゃべらない。いや、先生は教科書を読んだし、俺たちも後に続いて音読した。だが、この教室の空気は既に、俺の後ろの席から発される音に支配されていた。

\*

英語が終わり、昼休みに入る。諫山はすぐに立つ。

「どこ行くんだよ」

「多田先生に報告……です」

今にも崩れそうな声を残し、教室を出ていった。

なぜ泣いていたのかとか、落ちたのではないのかとか、また大げさなやつだかとクラスメートが話している。

やつの机を見る。ノートと教科書が開かれている。その下敷きになっているテストを取る。

58。ダメ全然じゃんと思ってよく答案を見る。アクセントは全滅し、意味取りがかなり間違っている。だが、

「え？」

と声を漏らしてしまう。書き取りは、スペルミスの二問以外は全て正解しているのだ。

テストの脇でやつのノートが開いている。ページの余白が、やけに黒い。いや、この裏が黒いのか、と思いめくる。

「なんだよ、これ」

今日はよく口が働く。仕方があるまいて。ノート一行の間に二行並べて書かれた英単語が、見開二ページ分いっぱい埋まってるのだから。白い部分なんてアルファベットのOくらいだ。しかも、余白も縦横関係なく英単語で占拠されている。前のページもその前のページも、黒いうじ虫のようなアルファベットたちで制圧されていた。

やつのテストとノートを持って、体育教官室へ走った。

\*

ノックをして扉を開ける。

「失礼します。二年の千場優馬です。多田先生に用があつてまいりました！」

と、体育教官室の入室音量認証を受ける。「はい」と多田先生のお声が聞こえる。

中に入って行く。イスに座る多田先生と、その前で正座している諫山がいた。やつは両手を膝に置いて、泣いていた。

「なんだ」と先生さまが睨んでくる。コワッ。これは俺も正座しなきゃいけないパターンかと思いつつ、

「今、小テストの話ですか」

「そうだ。初めに言ったように、このままであれば活動時間をは減らす」

諫山が膝元でスカートを強く握っているのがわかる。

「先生、諫山は実質合格ですよ。だから減らさないでください」

俺は冷静沈着に諫山のテストとノートを先生に渡す。先生は受け取る。

「.....お前、これ誰のだ」

「諫山のです！」

と堂々と言った瞬間、先生の質問の意味を理解した。今後の俺の人生に幸があるか、唐突に不安になる。

「諫山、これこいつに貸したか」

とやつに、渡したものを見せる。諫山は目をハッとさせて先生の手からサッと取り去り、うずくまって首を振る。てめえ、せつかく人が助けに来てっやって――

「千葉、お前は今日の放課後ここに来い」

「はい！」

やっぱりなあ。

「それはともかく、このままだと活動時間は減らすように指示はする」

「何ですか。諫山はしっかり勉強しましたよ。そのノート見ればわかるじゃないですか」

「それは、俺は見えてないからわからない」

「見ればわかりますって。諫山、先生にそれ見せてくれよ」

「やだ.....」とうつむきながら首を振る。

「んでだよ、活動時間減らされていいのかよ！」

それに対してやつは濡れた顔をあげて、

「あんたにはあ、関係ない.....でしょお」

と反論してくる。

「大ありだわ！ 大迷惑なんだよ、時間減らされると。他の担当も三年生も困んだよ！」

「だって、落ちたんだから、ど、どうしよおもないじゃん！」

「だから見せろって言ってんだよ、何とかなるから」

「お前らいい加減にしろ！」

先生が怒鳴る。教官室に一瞬静寂が訪れ、俺とやつはやや拍子抜けしてしまう。やつのすすり泣きも止んだ。

「執行部同士の話をごこでするな！ 自分たちで決めてからここに持って来い。活動時間の話もなしだ、出てけ！」

「え？ だって先生、さっき活動時間減らすって.....」

と諫山が言いかけたところで、

「だったら執行部で決めた内容かテストを持って来い！」

一瞬身を引いた諫山が手元を見て、テストを取り出そうとする。

「おい」

気づくと、その腕を俺の手がつかんでいた。

「話し合いが足りなくてすみませんでした。もう少し話し合ってみます！」

と白々しく言い捨て、礼をする。諫山を無理やり引っ張り、出口へ向かう。

「ちょっと待ってよ、まだ」

「失礼しました！ ほら、お前ももう教官室出てるんだぞ！」

「え、え？ し、失礼しました」

言い切るのと同時に、教官室の戸を閉めた。

腕を離さず、生徒会室に向かう。

「何してくれてるの？ ってか離してよ！」

「うっせえ、先生言ってただろ『決めた内容かテスト持って来い』って。つまり、まだ先生はお前が落ちたことを確認できてないってことだよ」

「だからテスト見せようとしたじゃん」

「だから、じゃねえよ。それじゃ困るからこうしてんじゃねえか。いいからまずは会長さんのところに行け！」

\*

「それで、諫山はんは自分がテストに落ちてしまったことを先生に報告すべし、千場君は報告するに及ばず、ということで意見対立問題を総務に持ち込んだちゅうこつちやな」

生徒会室、会長さんとやつと俺の三人で話し合っている。

「というか、執行部全体の問題ですよ。会長さんはどう思いますか？」

と、ハチャメチャな方言にすっかり気兼ねさを取り払われた俺は、軽い口調で話しかけてみる

。「ん？ 僕も諫山はんのテスト見とらんから何とも言えんなあ」

とどこから持ち込んだか分からないソファに両腕を広げておつかかる。

「じゃあ.....これを」と言って、諫山がテストを差し出そうとした時だった、

「おい、見せんや。.....見たら僕が困るやろ。見せたら君、実行委員辞めさせるで」

会長さんが目の色を変える。

「え？ な、何ですか？ そんなこと.....ダメだと、思いますよ」

諫山が凍り付いた表情で反論する。目元がうるんでいる。

「は、何がダメやて？ 辞めさせられるで、簡単に。今の執行部は自由が認められ、生徒が自分たちで主体になって運営しとる。自由が認められる限り、先生の入る余地はないんや。その中で一番の決定権持つてんは誰かの。ルール守る大切さわかるとる諫山はんやったら、一番の決定権に従わなければならないことくらいようわかるやろ」

さすがにやりすぎではないかと、はたから見て感じているが、口出しできる余地が見当たらない。多分こつちが圧殺される。

「でも私はあ、グスツ。自分に嘘をつくのはあ、グスツ。.....イヤです！」

すでに頬を涙が流れている。だがやつは、会長さんを睨みつけている、ただまっすぐに。

「ほな、勝手に報告してもろてもいいけど、『諫山さんは昨日執行部役員辞めました。だから関係ありません』って言って逃れられるからね。結局何も変わらんよ。そんなに報告したいんやったら、今のうちに執行部辞めてくれや」

「それだけは.....それだけは絶対にイヤです！」

と諫山は叫んで唐突に起立し、ドアを無理やり開いて生徒会室を出ていった。

それを追おうとした時、会長さんが口を開く。

「ぜいたくで、夢見がちな子やな、諫山はんは」

「.....」

時計を見てから生徒会室を出て、やつを追った。

そろそろ昼休みが終わる。

\*

やつを追って、体育館に着く。紅軍が応援練習をしていた。諫やつは紅軍の三年生に近づき、「もう練習時間終了ですよ。次の授業に遅れないように解散させてください」

と、壁掛けの時計を指して注意を促している。

「え、何で？」

と、団長の三年生が対応する。

「何でって、時間を守って先生方に信頼されているからこそ、体育祭ができるからです。早くや

めてください」

「うん、それはそうかもしれないけどさ、君にそれ言う筋合いあんの」

「私は執行部ですから注意してるんです」

「そうそうだから、体育祭にかまけてテスト落ちてる君が、どうして執行部づらできんのかって聞いてんの」

「え、え？ 何でそれ、知ってるんですか……」

団長は紅軍の団員の方を向いて、

「あい、じゃああと一回第一応援歌やって終わろう！」

と声を張る。もう一度諫山の方を振り向く。

「あー、練習の邪魔だからどいとして、執行部失格の人」

応援歌が、団員の床を踏む音が、赤色の小道具を叩く音が、予鈴を掻き消す。あいさつが終わり、生徒たちが帰っていくさなか、授業開始のチャイムが鳴る。体育館には、次の体育の授業を受ける生徒がアップに入ってくる。

諫山は一步の移動も一本の指の運動もせず、立ち尽くしていた。

「おい、次授業あるんだから行くぞ」

無言で歩き出す。前から時折振り返りやつの顔を見る。眼は地に落ち、行き場も動力も失い、不法投棄されて林の中に埋もれていく車のようだった。

\*

放課後、諫山は椅子に座っている。机の上には、最後の授業で使った現代文の教科書とノート、そして筆箱が乗っている。後者に差し込む夕日で、`GT、のキーホルダーが光っている。

「部活行けば。あるんでしょ」

留守番電話の音声のようにしゃべる。

「まだ話し合いの結果がついてない」

自分の机の上から返す。

「何の」

「テストのだよ」

「あんた、私にそんなに恥かかせたいの？」

「ちげえよ。お前これでいいのか？ 先生にチクンなくていいのかよ」

「あんたもみんな困るんでしょ？ 体育祭楽しめないんでしょ？ 楽しめなくて失敗しちゃうんでしょ？ だったら別にチクンなくていいじゃん、ルール守る必要なんてないじゃん。信頼も何もどうでもいいじゃん。もうそれでいいよ。もう全部、どうにでも……なればいいよ」

死んだ目で、やみくもに、乱暴に語る。

「そんなんでいいのかよ。部活やめてまで執行部になって、それでイッテ！」

現文の教科書の角が、ひぎの皿に直撃する。

床にうずくまる。諫山は立ってノートも投げつけてくる。

「うっさい！ 何、あんた彼氏ですか？ 親友ですか？ 先生ですか？ ないわ、マジない。分かったつもりんなられてクソ腹立つ。死ね！ あんたに何がわかんのか？」

そう言い終えたところでその場にしゃがみ込む。

「やりたかった部活もやめて、勉強時間も捨てて、決めること決めて、もう執行部だけに打ち込もうって、これしかないって思って執行部に入ったのにさあ……。なったのにい」

うずくまり、嗚咽交じりにしゃべり続ける。

「しっこおぶ、しつかあく！ もう、もう何も私には残ってない……。辛い、つらいよお……殺してえ、殺しせうお！」

もう言葉になってない。廊下中に響く声をあげて、ただ泣いている。何もなくなって今は泣く

ことに、ただ一生をかけているような、そんな風に。

こいつはバカだ。一つのことしか見えないバカだ。不器用だから見落としもたくさんするし、上手な生き方もできない。でも、ただ一つのことには命を懸けるほど真面目になる。今も、ただ泣くことだけに一つ真面目になっている。

俺はこいつみたいに泣けない。今は涙も出ない。こいつみたいに、ただ一つのこと縛られて、縛って生きはしないからだ。だが何だかそれが、無性に悲しかった。

\*

二〇一五年、夏。三重県の某所のスタンド席。十数台のレースカーが二列にひしめき合いながらカーブを曲がって来る。レースカーを率いる、黄色いランプの車が、横の道に逸れていった。

「わー！ ねえゆう君、来るよ来るよ見て見て見て！」

「すごい音だな」

先頭にいた車が、爆音とともに加速を始める。続いて後続も負けじと加速をはじめ、爆音が共鳴して轟音がスタンド中に響き渡る。

場内アナウンスが叫ぶ。

——さあ、`HANDBACS SUPER GT 二〇一五 第六戦、。伝統の鈴鹿一〇〇〇キロレース！ GT500のマシンが、はるかはるか先にあるチェッカーフラッグをかけて、今一斉にスタートを切りました！——

「よかったな、お前、鈴鹿一〇〇〇キロ見に来れて」

「クー、痺れるう！ まだまだ始まったばっかあ。これからはおもしろいんだから！ あ、GT300も来たよ」

こいつはバカだ。一つのことしか見えないバカだ。不器用だから見落としもたくさんするし、上手な生き方もできない。でも、ただ一つのことには命を懸けるほど真面目になる。今も、ただ目の前の好きなことに一つ真面目になっている。

俺はこいつみたいに好きになれない。今は叫びもでない。こいつみたいに、ただ一つのこと縛られて、縛って生きはしないからだ。だが何だかそれで、よかったような気がする。

## 特別な後輩—Ex-girlfriend（落谷アツムネ）

---

特別な後輩—Ex-girlfriend

落谷アツムネ

地元に戻るつもりなど、元々なかった。

合唱部の定期演奏会にOBとして出る為、しかもたったの二泊三日で帰らなければいけないのだから尚更である。

それでも結局、俺はこうして荷造りをしていた。

少し懐かしくなったから。

会いたいひとが居たから。

「……ああ、そうだ。帰ってきてたんだ」

いよいよ本格的に盛りだす暑さの中で目が覚める。東向きの窓からは既にオレンジ色の稜線が覗き、こぼれた光が部屋に差し込んでいた。ジャージのまま一階に降りると誰もいない。もうみんな出掛けたのか。

昨日どこそこの街で猛暑日だったとテレビキャスターが伝えている。耳に流しつつ昨夜の残りですら適当に朝ごはんを済ませ、出かける支度をしただけで軽く額に汗が滲んだ。こんな日は、暑くならないうちに家を出たほうが賢明というものか。

左手に山、右手に田んぼを見ながらバスは峠を越えていく。市街地に入ってすぐのバス停で、懐かしい顔がステップを上がってくるのが見えた。一番奥に座っていた俺と目が合い、どちらからともなく手を振る。

「お、おはよう」

「おはよう。奇遇だな」

彼はミヤザキ、俺と合唱をしていた仲間の一人。同期の中では一番波長の合う奴だ。

「お前、去年来なかったから今年も来ないと思ってたわ」

「色々とな、心変わりがあったんだよ」

「アイツに会いたくなかったとか？」

「……うるせえ、アホ」

「凶星か」

「うるせえ」

ミヤザキのくせにと毒づきながらも、道中を共にしてくれる存在がいることに俺は内心ほっとしていた。おそらく俺ひとりじゃ、心細くて後輩が練習しているところに顔を出せそうになかったから。

演奏会の舞台である鶴<sup>つる</sup>谷市文化会館、その裏手のバス停で降りた。草が茫々と砂利を食い散らかして、夏を訴えかける。加えて蝉まで鳴くのだから始末に負えない。

「お、ナツメだ。お一つす」

「久しぶり。今年は来たんだね」

控室で出迎えてくれたのはナツメ、彼女もまた俺の同期の一人だった。今はとある大学の合唱団で活動していて、去年はコンクールの全国大会に出場したとか。

「お前だけ？」

「他はホールでリハーサルでも見てるよ」

「なるほど」

ちょうど休憩に入ったようで、廊下が俄かにざわめき立つのが耳に入る。懐かしい顔を拝もうと外に出ると、ちょうど目の前を駆け足で横切るとタイミングが重なった。

アイツだった。

「お、久しぶり……」

俺に目もくれなかった。

「あら……」

まあ気まずいよな、とロビーのベンチに腰を下ろす。分かっているながら、時間が解決してくれていることに期待していた俺も俺だが。

「お疲れ様です、先輩」

「おう、お前か」

二つ下の後輩、ミズキが目の前に立った。

「今年は帰って来たんですね」

「待ち遠しかった？」

「ええ」

すぐ横に座る。

「お前らが三年生か。早いな」

「先輩だってもう大学二年生じゃないですか」

「まあね」

こうして時が経っても、やはり後輩は後輩のままなんだなとほんのり考えた。

「そういえば先輩、聞いてます？」

「何を？」

「ここ、もうじきに無くなるって」

「知ってたよ。だから見納めにね」

「ああ、なるほど」

老朽化が進んだこの文化会館を取り壊し、跡地に新しいものを作ることが去年の時点で決定していた。解体工事が始まるのは来年の一月、つまりこの建物で演奏会を行うのは今年が最後となるわけであって、これが俺の今回の里帰りを後押しした一因でもある。

「ところでさ」

「はい」

「メグミ、元気？」

「メグミちゃんですか？」



「ああ」

「……ええ、元気ですよ」

「そうか」

メグミはよく笑う子で、一緒にいると楽しくて、いつも周りに元気を分け与えてくれる子だった。

いつか対人関係に疲れて泣いた日も、彼女は俺に寄り添い温もりでもって慰めてくれた。

それが、俺が彼女と付き合うことになったきっかけ。

それからたった一か月で終わる彼女との関係のうちで、一番忘れられない思い出。

「さっき挨拶されたら無視されちゃってさ。まだ根に持たれてんのかなって」

「どうでしょうね。そもそも先輩の勘違いってことは？」

「そうかな」

根に持たれている。

自分で言うとおきながら、チクリと刺さるものがあった。

恋人同士という関係を自慢したかった俺と、隠しておきたかった彼女。自分の心情を分かってくれないことに腹を立てたか、はたまた失望したか、俺は一か月の記念日にこっぴどく振られた。

「デリカシーのない人は嫌いです」なんて捨て台詞まで吐かれて。

「俺、やっぱりコソコソ付き合っていたい人の気持ちが分かんないわ。今でも」

「先輩こそ根に持っているんじゃないんですか？」

「そうかな？」

「そうですよ」

腕時計に目をやり、ミズキがおもむろに立つ。

「じゃあ、そろそろ練習再開するんで。また」

「ああ」

ミズキが見えなくなってから俺は腰を上げた。

定期演奏会は毎年、四つのステージで構成される。

まず幕が上がると同時に校歌が始まりオープニング、第一ステージから順にコンクール出場曲、企画ステージ、組曲、そしてOB・OG合同演奏ときてそのままエンディングでもって終幕。あの最後の緞帳が下りきった瞬間、今でも思い出す。

「練習、見てこなくていいの？」

控室に入るなり、ケータイをいじっていたナツメが俺を見て言った。

「うーん……なんか居づらいというか」

「メグミちゃん？」

「お前もそれを言うか」

机の上にプログラムが山を作って、一枚の紙が下敷きになっている。「OB・OGへ 一部ずつお取りください」と書いてあるのが読めた。

「まあ、否定はできないかな」

実際のところ別れて二年たってもまだ蟠りが消えてはいないのだから。

「溝は深いみたいだね。あたしにはわからないけど」

「まあ、そんな具合だよ。……で、ナツメは何でここに？」

「あたしが行ったら怖がられちゃうから」

「ほう。二年経っても『鬼のパートリーダー』は健在なのか」

「むしろ悪化してるかもね。あの子たち、後輩にある事ない事いろいろ吹き込んでるみたいだから」

「嫌われてんの？」

「さあ。別に引退した身だし、嫌われたところで痛くもかゆくもないけど」

「……お前らしいな」

「ここには同窓会やりに来てるようなものだからね、あたしの場合」

俺はプログラムを手にとってパラパラめくり、企画ステージの曲目に目を止めた。

「なあナツメ」

「ん？」

「奥華子の『ガーネット』ってどんな曲だっけ？」

「ほら、あれだよ。『時をかける少女』の」

「あーハイハイ」

「それがどうかしたの？」

「いや、ここに書いてあったんだけどさ。このタイトル、どこかで見たなって」

そうか、今年はこんな曲を歌うのか。あとは中島みゆきの『時代』と、ジッタリンジンの『夏祭り』と……他にタイトルも聞いたことがないようなのが三つほど。合唱をしている身だが音楽には疎いんだ、俺は。

「……あ、もうOB OG練習の時間だ」

「何それ？」

「合同ステージの曲の練習だよ。まさか楽譜ないの？」

「いやいや、そこまで抜けてないわ」

「じゃあほら、行くよ」

「えー」

「『えー』じゃない」

「どうせ今年も木下牧子の『鷗』と『夢見たものは』だろ。今さら行かなくても歌えるからいいよ」

「あんた去年出てないじゃん。つべこべ言わないの、ほら」

「……ハイハイ。わかりましたよ」

流石は鬼のパートリーダー、合唱のことになると容赦ない。

「なあ、久しぶりにあそこのラーメン食いに行こうぜ」

練習を終えて、ミヤザキから唐突に提案された。

「あそこ？」

「ほら、高校の近くの」

「.....ああ、あそこな。いいよ、行こう」

「ナツメも来るか？」

「ん、あたしはパス。もうソプラノの同期とご飯に行く約束してるから」

「そっか。じゃあミヤザキ、行こうぜ」

「おう」

「また後でな、ナツメ」

「うん」

会館から徒歩五分、ラーメン屋までの道のりは現役だった頃と比べて心なしか短くなった気がした。

「懐かしいな」

「ああ、全くだ」

昼時にもかかわらず、店の中は閑散としている。この境界で学生相手に商売しているところは、学校が夏休みに入ってしまうばどこもこんな具合だ。

「ラーメン二つで」

「はいよ」

真ん中の四人席に向かい合って座る。俺は入口に背を向ける方を選んだ。

「思い出すな」

唐突にミヤザキが呟いた。

「いきなりどうした」

「お前が最初の彼女と付き合いだしたときの事だよ。あの時もこうやって二人でラーメン食ってたなって」

.....まったく、嫌な性格してやがる。

「お前、もう恋愛には懲りたのか？」

「どうかな」

「意味深だな」

「好きに捉えればいいさ」

戸の開く音がして会話が途切れる。視線を上げたミヤザキが、しばらく入口の方を凝視したまま固まった。

「あら、先輩方もここに居たんですね」

ミズキの声だった。

「ああ。何だか懐かしくなってさ」

ミヤザキが応える。俺は背後に感じるもう一人ぶんの気配とその正体を察して、思わず息を殺した。

「うちら注文したばかりだし、よかったら一緒にどう？」

「いいんですか？」

「ああ。積もる話もあるだろうしさ」

ニヤニヤしながらこっちに目配せしてくる。気を利かせているのか単に面白がっているだけなのか.....多分、後者だ。

「じゃあ私そっちで」

ミズキがミヤザキの隣に行く。

「先輩、隣いいですか？」

「あ、ああ」

すぐ横に来たのは、思った通りメグミだった。

「久しぶりですね」

「おう」

注文しなよ、とミヤザキが促す。少しでも興味が逸れてくれるのがありがたい。

「餃子定食ふたつですね。かしこまりました」

店員が伝票に書き込み、引っ込んでいく。

「二年ぶりですね、先輩」

「ああ」

「元気してました？」

「してたよ」

「.....なんか素っ気なくないですか？」

「ん.....」

最初に吹っかけてきたのはそっちだろ、と言いそうになって言葉に詰まる。元カノとはいえ、さすがに後輩にあたるのはいいわけがない。

「お前に嫌われたんじゃないかって思ってんだよ、ソイツ」

「え？」

「けさメグミに無視されたって、先輩が」

「え、いつですか？」

「えーと、メグミが控室に入って来たとき」

「あ.....ごめんなさい、気づきませんでした」

ミヤザキが嘖き出す。

「やっぱりお前の勘違いだったじゃねえか」

「いや、だって、普通あんな態度されたら誰だって勘違いするって絶対」

「まあよかったじゃないですか、実際なんてことなかったんですから。ね？」

.....まあいいか。根に持たれていないなら。

「ありがとうございましたー」

外は相変わらず暑い。ちょうど南中を過ぎたところだから当たり前だが。

「もう六時間半かあ.....」

横で腕を見やりながらミズキが呟く。この後はゲネプロ（全体の通しリハーサル）を一度した

後に軽くダメだし、それが終わるといよいよ本番の幕が開く。

「緊張してる？」

「うーん……あんまりしてませんね」

「そっか」

ミヤザキが笑う。

「最後の定期演奏会なんだな」

「そうですね」

「後悔すんなよ」

「大丈夫です」

文化会館に戻る道中、ミヤザキとミズキがどんどん先を行くせいで俺とメグミが置いてけぼりを食らう形になった。

あいつら、あんなに仲よかったんだ。

「微笑ましいですね」

「ああ」

「もうすぐ一年半ですからね」

「へ？」

「ミズキとミヤザキ先輩。……あれ、もしかして付き合ってるの知らなかったんですか？」

は？

「初耳なんだけど」

「あ、そうか。先輩、去年来なかったから……」

「どういう事だよ」

「ミヤザキ先輩、卒業する時に告白したんですって。で、あんな具合です」

「マジ？」

「去年演奏会に帰ってきてたOBOGは皆とっくに知ってると思いますよ。二人とも隠すつもり全然無かったから」

「……はあー」

何故だろう、無性にモヤモヤする。というか、ムカつく。

「驚いてます？」

「驚き呆れてるよ」

ミヤザキを見る目が変わりそうだ。

「それはそうと、何で去年は帰ってこなかったんですか？」

「んー……気まずかったからな、正直」

「気まずい？」

「お前に会うのが、だよ」

メグミが急に視界から消える。つられて俺も歩みを止めた。

「ごめんなさい」

「え？」

「先輩、私がいから帰ってこなかったんでしょう？」

「ん、いや、確かに気まずかったけど面倒くさかったのが一番だったし。お前が気にすることないんだよ」

「でも……」

「はい、この話題もうやめ。ゲネ頑張るぞ」

「あ、ちょっと」

練習再開の時間まで残り三分。とっくに戻っているだろう二人を追いかけて、俺は半ば強引にメグミを引っ張った。

控室に帰ってくるとミヤザキが寛いでいた。色々と言いたかったはずが、いざ面と向かってみるとどう切り出したものか分からなくなる。それを察してか否か、何食わぬ顔でミヤザキが話題を振ってきた。

「本番、OB OGは出番まで客席で見てていいんだって」

「あ、そうなん？」

「ああ。去年はそうだった」

「じゃあ企画ステージだけ見てよっかな。ミヤザキは？」

「全部見てるよ」

「そっか、ミズキ最後だもんな」

ぽろっと出た。

「あれ、お前に言ったっけ？」

「さっきメグミから聞いた。どうせならお前から直接聞きたかったけど」

「だってお前、去年来なかったんだもん」

何も言えない。

「……とりあえず、お幸せに。俺みたいにはなるなよ」

「ほう、さすが経験者の言葉は重みがあるねえ」

「うるせえな。どうせなら『ありがとう』の一言くらい返してくれよ」

「『ありがとう』」

「……」

「冗談だよ。ありがとうな」

「どういたしまして」

「お前も早く新しい人見つけられるといいな」

「余計なお世話だ」

まさかミヤザキに心配される日が来るとは。

「世も末だ」

「何か言ったか？」

「いや、何でもない」

……ああ、こんなに面白いならやっぱり去年帰ってくればよかったわ。

「そういえばお前、打ち上げは行くのか？」

「打ち上げ？」

「演奏会の後OBOGで飲み会やるんだよ。なんならオレの家泊めてやるから一緒行こうぜ」

「行く」

「それでこそお前だ」

「だろ？」

「ま、まずは本番だけだな」

「わかってるよ」

腕を見やる。ゲネプロが終わる時間を指していた。

組曲ステージが始まったら舞台袖で待機、それまでは基本的に自由行動でいいらしい。そんなに適当でいいのか、と人知れずツッコミを入れつつ俺は控室で缶コーヒー片手に暇を持て余していた。

「さて、どうすっかな」

もう演奏会はコンクール出場曲のステージに入っている。こんなに退屈なら最初から演奏を聴いていても良かったな、と少し後悔しつつ俺はロビーまで空になった缶を捨ててに行くことにした。

「あれ、あんた……」

受付にはスーツに着替えたナツメがいた。

「演奏聴いたら寝そうだったからさ。そういうお前は何でここに？」

「頼まれたの」

「あらあら、お疲れ様です」

ロビーにはテーブルが用意され、そこに花束やら菓子が並べてある。部員の友達や親が、差し入れだったり演奏会のお祝いに贈ったものだ。ちなみに俺が三年の時はクラスメートがブラックサンダーを一箱くれた。消化するのに二週間かかった。

「ナツメは花束とか贈った？」

「女声陣にはみんなに小さめのをね。あんたはメグミちゃんにあげたの？」

「いや、何も。ぶっちゃけ考えてなかったわ」

「そっか。ミヤザキはすごい用意してたよ、ほら」

ひときわ目を引く花束、そのメッセージカードにはこう書いてあった。

“ミズキへ

最後の定期演奏会、お疲れ様。

これからコンクールや受験勉強もあるけれど、ミズキならきつとうまくやれると信じています。頑張ってください。”

「……俺の知ってるミヤザキじゃないんだけど」

「恋をすると人は変わるらしいからねえ。いつぞやの誰かさんみたいに」

「ああそうかい」

何かアイツに差し入れしてやりたくなかったが、あいにく他人に差し出せるような代物など何も持ち合わせてはいない。考えて考えて、俺は自販機で買ったペットボトルの緑茶に「メグミお疲れさま」とだけ書いた。

「安っ」

「気持ちが大変だろ、こういうのは」

「さすがに限度があるでしょうよ」

「大丈夫だって」

「……まあ、あたしの知ったことじゃないけど」

“これより、十分間の休憩に入ります。演奏の再開時刻は、会場の時計で十九時二十五分を予定しております。……”

廊下に足音が漏れ来るのを聞きつけて、俺は花束のすぐ横に緑茶を置いた。差し入れだと分かってくればいいのだが。

「『あなたと過ごした日々を』……か」

企画ステージを見て、舞台袖にスタンバイして、合同ステージに乗って、エンディング。俺はその間、いや、幕が下りてからもなお『ガーネット』が頭の中で繰り返し流れていた。

「ナツメ」

「ん？」

「今年の演奏会、よかったよな」

「そうだったんだ」

「あれっ」

「あ、あたしステージ乗るギリギリまで受付いたからさ」

「そっか」

祭りのあと、観客の見送りも舞台の片付けも何もかも終わった。時刻は午後十時を回って有志は打ち上げの飲み会へ、現役は迎えを呼ぶなりして人影はまばらになってゆく。

「打ち上げ行く？」

「ああ。何時から？」

「十時半から鶴谷駅前の『赤のれん』で」

「ああハイハイ、あそこね」

駅の方へ向かうナツメに手を振り、俺はここでやっと控室に置いたままの荷物を取りに戻った。明かりさえ消えた部屋から戻ってくると、ロビーにもう人影はなかった。ただ一人のものを除いて。

「あれ、もうみんな帰った？」

「そうみたいですね。多分、先輩で最後かと」

「そっか」

待っててくれたのかな、なんてメグミに淡い期待を抱く。

「とりあえず追い出されてもなんだし、外に出るぞ」



「はい」

アスファルトが吸い込んだ昼間の熱気を吐き出して、夜でもじわりを照りつける。それでも時折吹き抜ける風が露出した肌を撫でてゆくので気持ちがいい。

「迎え待ってんのか？」

「はい。先輩は？」

「打ち上げ行くところ」

立っているのに疲れて、彼女のすぐ脇にしゃがみ込む。

「でも女の子ひとりにできないし、一緒に待つよ」

「いいんですか？」

「ああ。別に急ぐ用事じゃないし」

こんなに胸がざわつくのは、たぶん演奏会が終わった直後だからだろう。俺は自分自身にそう言い聞かせた。

「最後の演奏会、お疲れ様」

「ありがとうございます」

「企画ステージ、すげえ良かった。泣くかと思った」

「流石にそれはないですよ」

「いや本当に」

メグミが大きく抱え込んだ花束をおろす。ふわりと百合の匂いが舞った。

「先輩」

「ん？」

「ごめんなさい」

「いきなりどうした？」

「お昼休みの時、言ってたじゃないですか。あたしがいたから気まずくて去年は帰ってこれなかったって」

「.....その話はもういいよ。おしまい」

「でも.....」

「今こうやって俺とメグミ、普通に喋れてるよな」

遮る。それから一息おいて続けた。

「それでいいことにしようぜ。結果オーライってことでさ」

仲直りするのにも、一年余計にかかってしまった。ただ、それだけの話だ。

「はい、今度こそおしまい」

「.....はい」

メグミは一瞬ふてくされた顔を見せ、それから苦笑いした。

「先輩は優しいですね」

「そうかい？」

「あたしが言うのもなんですけど、普通あんなにひどい振り方されたら愛想尽かしちゃいませんか？」

「そりゃ別れてすぐの頃は辛かったけどさ。今となっちはいい思い出、ってヤツかな」

「大人ですね」

「まあ、ただ単に仲違いしたままじゃ気分悪かったってのもあるけど」

正直なところ、「別れてもずっといい友達でいようね」なんてシチュエーションは都市伝説だと思っていた。しかしこうやって自分がその身になってみると、案外そこに行きついてしまうものらしい。

「新しい彼氏できた？」

「はい、って言えたらいいんですけどね」

「そっか」

「だから、正直ミズキが幸せそうにしてると羨ましくて仕方ないんですよ。たまにノロケてくるし」

「そりゃ災難だな」

あとでミヤザキに根掘り葉掘り訊くか。酒の席だし、何か面白いことが聞き出せるだろう。

「.....先輩」

「ん？」

「あたし、後悔してるんです。先輩と別れたこと」

「.....ほう」

「すごく厚かましくて申し訳ないんですけど、その.....先輩がよかったら、もう一度あたしと付き合ってくださいませんか？」

答えには迷わなかった。

「.....ごめんな」

言葉を続ける代わりに、俺はポケットからリングを取り出して左手の薬指にはめた。

「もう約束しちゃったんだ。まだペアリングだけど」

「『まだ』ですか」

「ああ」

「そうですか」

「ごめん」

「いや、気にしてませんから。もしかしたらって思っていましたし、本当にダメ元だったので」

「そっか」

「はい」

「.....タオルならあるぞ。要るか？」

「下さい」

散らかった鞆の中から抜き出し、メグミの肩に乗せる。

「.....先輩の匂いがしますね」

「余計なお世話だ」

本当のところ、黙々とただ泣かれるよりはずっと気が楽だったが。多分、メグミもそれを分かっているのだろう。

ひとしきり泣いて、メグミはタオルから顔を離した。

「先輩の彼女さん、見てみたいです。写真無いんですか？」

「立ち直るの早いな」

「泣いたらスッキリしました。それで、写真は？」

「……あるよ」

春に彼女の引っ越しを手伝った時、思い出にと撮ったのを見せた。

「はあ……綺麗な人」

「そうだろ」

「お名前は？」

「ユウナ」

「ユウナさん、ですか」

メグミの口からため息が漏れた。

「結婚式には呼んでくださいね」

「どうかな」

「冗談ですよ。……お幸せに」

「ああ、ありがとう。お前にもいい人が見つかるように祈っとくよ」

「ありがとうございます」

別れて、時間が経って、お互いに成長して。

ひょっとすると今、俺たちは付き合っていた頃より仲良しになっているのかもしれない。

「先輩」

「ん？」

「来年も帰ってきてくださいね。あたしイケメン捕まえて自慢しに帰ってきますから」

「ほう。そりゃ帰ってくるしかないな」

「約束ですよ？」

「オッケー。楽しみにしてる」

それから程なくして、俺はメグミが迎えの車に乗るのを見届けてから打ち上げに向かった。

「……『いつか他の誰かを好きになったとしても』、ってか」

すでに俺は、メグミのノロケが聞けるであろう来年の演奏会が待ち遠しかった。

・あとがき

どうも、読み専ならぬ書き専になりつつある落谷です。

今回は案山子66号収録「ライカルーザ」から約二年後、案山子二〇一四年夏号収録「春は別れ、空高く橋かかる日に」から約五か月後のお話です。ちなみに作品中に出てくるナツメちゃんは

案山子二〇一三年夏号収録「或る春の夜」で初登場してます。こういう世界観を共有するパターンのお話大好き。というわけで、先にあげた三作品を読んでおくとも内容の理解が捗るかと思えます。特に「ライカルーザ」。是非。

・今回、下敷きにしたもの

奥華子『ガーネット』

中島みゆき『時代』

古川本舗『Girlfriend』

久石譲『Summer』

麻枝准『夏影』

JITTERIN'JINN『夏祭り』

ORANGE RANGE『祭男爵』

## 混合「中」 (Puney Loran Seapon)

---

混合(中)

Puney Loran Seapon

【前回のあらすじ】

奈津美「『混合(上)』を読めば、全部分かるでしょ」

康介「ちょ……奈津美、それは適当すぎなくあwせd r f t g yふじこl p」

奈津美「生意気な声は、この口から聞こえてくるのかしら？」

康介「やめ……にや、にやにをそんにやに苛立っているんだい？」

奈津美「あら、苛立ってるなんて……そんなことないわよ？ 別に前回の【登場人物】の所で、私だけ名前すら出して貰えなかったことなんて、全然気にしてないし……ねっ！」

康介「ぎゃー！ ちょ……そんな所抓らないでえ！ てか、仕方なからう。この間は話の中に  
出てこなかったんだから！」

奈津美「だから、気にしてない！」

康介「では、その手に持っているものはっ？」

奈津美「あんたの悲鳴が、話の幕開けの合図よ！」

康介「きよ……きよえー」

弾丸(?)

やばい。

俺は咄嗟に、ドアの覗き穴から目を離す。

「せんぱーい。いますよねー？」

ゴンゴンと扉を叩く音に続けて、どこか面白がっているような声が聞こえる。なぜこいつがここにいるのか、俺には理解出来なかった。心臓が胸を叩くのが痛くて堪らない。確か、住所を教えたことは無かったはずだ。

居留守を使うか？

そう思った俺だが、慌てて首を振る。不本意ながら、殺し屋故に気配を消すことは得意ではあるものの、今の口ぶりから察するに、もう俺がここにいることはバレている。声が聞こえたタイミングから見ても、最早それは明らかだろう。ならば、変に隠れて不信感を募らせるより、さっさと出た方が得策だ。たとえそいつが、警察関係者だとしても。いや、警察関係者だからこそ、怪しい行動は慎むべきか。それに、こいつなら最悪、ドアを無理矢理こじ開けかけない。

一秒でそう決断した俺は、ほんの少しだけドアを開け、顔を出す。白衣を着た男が、そこに立っていた。

「あっ、先輩！ ご無沙汰してます！ 僕の事、覚えていますか？」

「……久しぶりだな、藤二」

「ははは、嫌ですね先輩。ちゃんと『TOUJI』って呼んでくださいよ」

こいつは、俺が昔アルバイトをしていた頃に出来た後輩で、古谷藤二だ。当時、藤二は確か高校生だったと記憶している。大学も、俺と同じ所に入ったと思う。後輩といっても、俺が先輩風を吹かせられたのはたった半年だ。それからは、こいつにどこか小馬鹿にされているような感覚を、俺がアルバイトを止めるまでたっぷり味わう羽目になった、という苦い思い出がある。

「……何の用だ？」

さっきの訳の分からない発言も、あの頃からちっとも変わっていない。面倒くさいのでスルーして、俺は用件を尋ねる。藤二は今、警察のはずだ。白衣を着ているが、一体どこの部署だろう？ この間、テレビのニュースに藤二が出ていて驚いたのは、俺の記憶に新しい。

だが、面倒くさいと思うのと同時に、俺は動揺を隠すのに必死だった。最後に会ったのが何年前だったか忘れたが、そんな奴に、まさかたいした用も無いのに会いに来たわけではあるまい。都合の悪いことに、相手は警察で俺は殺し屋だ。こいつが来た目的はこの件についての事で間違いないはずだ。

刑事が訪ねてくることは偶にあるものの、こんなに動揺することは無い。発言にちょっと気をつけるだけで、すぐ帰ってくれるからだ。だが、相手は藤二。こいつは異常なまでに勘が鋭いので、受け答えは勿論、一挙一動にまで気を配る必要がある。

勿論、俺には藤二を忘れた振りをする選択肢もあったが、俺はそれをしなかった。ポーカーフォイスには自信があるものの、さっきドアを開けたとき、一瞬顔に出ていた気がするからだ。

「大した事じゃないんですけど、先輩、今ちょっとお時間よろしいですか？」

藤二は、にこやかに俺に聞くものの、既にドアの端に手を添えていて、俺が「暇じゃない」と言って即座に戸を閉めることを防いでいた。

「ああ」

だが、俺はそう言って戸を大きく開け、藤二を招き入れる。適当な事を言って追い返しても良かったが、多分こいつは後でまた来るだろう。ならば無駄に時間をかけるよりも、いっそ今家に入れて、言葉巧みに丸め込んでしまう方がいい。

それにしても、と俺は藤二を奥に通しながら考えを纏める。

一体、こいつは俺が殺し屋であるという疑いをどこで持ったのだろうか。今訪ねてきたということは、おそらく最近の事件で何か見つけたのだろうか、証拠の後始末はきっちりやったはずで、さらにおっさんの手回しも万全だ。監視カメラに撮られるなんてヘマは絶対していないと断言できる。

藤二を家に入れた俺は、お茶の用意をしながら、ここ数ヶ月にした仕事を脳内でピックアップしていた。だが、どれも明確に思い出せるものの、現場に証拠を残すような事をした覚えはない。ならばここ一年以内の仕事だろうかと思ったが、流石に記憶に曖昧な所がある。それでも、はっきりと覚えている範囲では、特に疑われるようなものを残した覚えは無い。

ここら辺は、藤二の話聞いて、対処法を考える必要がありそうだ。

「で、何の用だ？」

お茶をテーブルに置きながら、俺は早速聞く。久しぶりに会った相手なら、普通は世間話の一

つでもしてから用件に入るべきだろう。とは言え、あまり長居して欲しくないのも事実。殺し屋であることがバレるからとかではなく、純粹に俺はこいつにあまりいい思い出が無いからだ。

「.....先輩に、見て欲しいものがあるんです」

この私情は、藤二にも伝わったのだろう。苦笑いをしつつ、俺の出したお茶を一口飲むと、懐から二枚の写真を取り出した。

それを見て、俺の心臓はドキンと跳ねる。青ざめかけた顔を何とか元に戻すと、俺は首を傾げた。

「.....誰だ？」

そうきたかと、俺は心の中で頭を抱える。

写真に写っていた人物は、さっきおっさんに『今回のターゲット』として依頼された、須藤響一郎と天瀬響花だったからだ。

こいつについては、これから調べる予定だったので、今俺の元に、ほとんど情報が無い。彼女達について知っているのは、俺がアパレル会社の社長を殺した時の、目撃者の可能性を否定できないことくらいだ。後は、おっさんから聞いた話が、少しあるくらいである。

もし彼女達の内、殺人犯の方が既に捕まっていて、俺のことを話していたならば、その時はどうしようもない。現時点では証拠は何も無いが、こいつなら、何か適当な理由をつけて家宅捜索しかねないからだ。そうなれば、この部屋の押し入れの奥にしまっているライフルなど、すぐに見つかってしまうだろう。銃刀法違反で、俺は逮捕される。その後どうなるかは、言わずもがな、だろう。

「実は僕、今は科捜研で働いているんですよ」

「へえ」

そう呟きながらも、俺はおやつと思った。科捜研に、警察官のような権限があったという記憶は無い。写真なんか見せるから、この流れ的にてっきり捜査一課の刑事かと思ったのだが、どうやら違うらしい。ならば、この写真を見せてきたのはどういう目的なのだろうか。

そう思う一方、俺はまだ油断していなかった。こいつは色々と型破りなことをする奴なので、科捜研にしながら刑事の真似事などお手の物だろう。そもそも、科捜研にいておきながら、実は嘘でした、なんてことも十分考えられる。

「いやー、実はですね、この間も僕の頭脳が事件を解決に導いて.....最近ニュースで見ませんでしたか？ ほら、あの連続痴漢事件の」

「.....ああ、そういえば何かあったな。ダビデの肉体はもう古いとかどうのこうのと喚いている事件だったか？」

「そうですね。その事件です。あっ、浦.....じゃなくて、あの事件の犯人なんですけど、刑務所で、あの肉体をさらに鍛え上げたみたいですよ？」

「そんなことも、ニュースでやっていたな.....確か、本場のダビデ像が、そいつの彫刻に置き換えられたんだっけ？」

「そうなんですよ。今じゃもう、彼の肉体見たさに、わざと刑務所に入ってくる人もいるみたいで。有名な彫刻家が何人も、彼をモデルに作品を作っているみたいですよ」

「おいおい、仮にも警察関係者が、そんな呑気に笑ってていいのか？」

「ははは。まあ、それもそうですね。犯罪者一人捕まえたのに、新たに犯罪者を何人も増やしちや、世話ありません」

何か笑いを交えつつ、穏やかに会話をしているが、これが藤二がここに来た目的じゃないことは明らかだ。肝心の写真については、全く触れていない。

俺はお茶を一口啜ると、二枚の写真を指で叩き、聞く。

「で、その話と、この写真は、一体何の関係があるんだ？」

ついでに、科捜研のお前が何故刑事みたいな真似事を、とも聞きたかったが、それはグツと堪える。あんまり知識があるところを見せると、かえって藪蛇になりかねない。科捜研の警察的権限に関しては、あまり知らない振りをしておく方が賢明だろう。

「いや、特に関係はありませんよ。本題に入る前の、軽い雑談です。あっ、お茶をもう一杯頂けますか？」

俺は頷いて、急須からお茶を注ぐ。さっさと本題に入れ、と言いたかったが、ここは我慢だ。なにも、焦る必要は無い。まだ、俺が殺し屋であることを決定づける証拠は、どこにも無いのだ。

「で、本題なんですけど」

お茶を受け取った藤二は、それを少し飲んでから、口を開く。

「この二人のうちのどちらかに、見覚えはありませんか？ ニュースで出てきていたと思うんですけど.....」

俺は一瞬、頷きかけた。

だが、危ういところでそれを押しとどめる。おっさんからの情報の一つだが、彼女達の名前や顔写真は、まだマスコミには公表されていないようだ。

危うくボロを出してしまう所だったと、心の中で冷や汗をかきながら、俺は首を横に振った。

「いや、知らないな。ニュースで出てきたか？」

「あっ、すみません。そういえば、まだ写真は未公表でしたね.....やっちゃいました。先輩が、見たことあるわけ無いか」

なんと白々しい。

歯から少し舌を覗かしながらペコリと謝る藤二を見ながら、俺は本気でそう思った。可能であれば、頭に手刀を叩き込んでやりたい。

そこまで思った俺は、一度コホンと咳払いし、気持ちを鎮める。冷静に、冷静に、だ。

だが、これで決定だ。こいつは、俺が殺し屋であるという疑いを持ってやってきた。さっき、まだ公開されていない写真を俺に見せたことから、最早間違いはないだろう。ミスったような態を装っているが、そんなことをやらかすような奴ではない。アルバイトをしていた頃のこいつは、本当に頭が良かったからだ。むしろ、わざとやって、こちらの反応を伺ったと考える方が自然だ。

しかし、そうすると、一体俺はどんなヘマをやらかしたのだろうか。

「えーっと、ですね。この二人は、とあるホテルで起きた殺人事件の、容疑者と被害者です。名



前は、須藤響一郎と天瀬響花」

「ふうーん……悪い、なんだって？」

さっきおっさんから聞いていたせいで名前については既に驚いていたためか、危うくスルーしかけた俺だが、ここは突っ込んでおくべきことに慌てて気が付く。

「なんか片方は男みたいな名前だけど、それであっているのか？」

「……ええ。合っていますよ。そこに気が付くなんて、流石先輩」

「いや、誰でも気づくだろう。馬鹿にしてんのか？」

こっそり冷や汗をかきながら、俺はやれやれといった感じで目を閉じる。

心臓をバクバクさせながらも、同時に俺は察する。藤二が俺に疑いを持ったきっかけは、おそらくアパレル会社の社長が殺害された件だろう。これだと断定するのはまだ早い、藤二はこの話を遅かれ早かれ持ってくるはずだ。

俺のこの予想通り、藤二は次のように続ける。

「いえ、そんなことはありませんよ。で、話を戻しますと、彼女達はそれと同時に、とある事件の目撃者でもあります」

微笑を浮かべながらそう言った藤二は、懐から三枚目の写真を取り出して、俺に見せる。写真に写っていた人物は、やはり俺の予想通り、アパレル会社の社長だった。

勿論、俺はそれを見ても動揺なんてしない。いや、心は傷んでいるが。ただ、さっき予想したことが起こっただけなので、だんだんと俺の心は平常心に向かっていった。これなら、後は何とか誤魔化せそうだ。

「この人は？」

俺は首を傾けながら、写真を指で差して聞く。

「都内のアパレル会社の社長です。ええっと、この娘」

藤二が、殺された女子高生の写真に指を置く。

「こっちの娘が殺された時間、といっても、これは僕が死亡推定時刻から予想したことです...  
...近くでこの社長さんも殺されたんですよ」

「ふうーん。ちなみに、殺された娘の名前はどっちなんだ？ ええっと、さっき言った二人の内……なんて言ったっけ？」

「須藤響一郎と天瀬響花ですか？」

俺は頷く。これは、俺も知りたい情報でもあった。おっさんは、どっちがどっちだか分からないなんてぬかしていたし、警察もまだ詳しいことは分かっていないらしい。それでも聞いたのは、こいつなら何となく、犯人の目星をつけているのではないかと思ったのだ。

もっとも、正直に答えてくれる保証はないのだが。

「……それがですね。分からないんですよ」

やはりと言うべきか、藤二はそう言って溜息を吐く。

「分からない？ どういうことだ？」

「遺体の身元を特定できるものが、何も残っていなかったんですよね」

「……藤二は、どっちだと思っているんだ？」

それでも駄目元で、俺は尋ねてみた。

「賢いお前なら、証拠は無くても、殺された女子高生は多分こっちかなっていう予想はしているんじゃないか？ わざわざ、俺にこんな事を話しに来たくらいなんだからな」

藤二は暫く俺を見つめた後、お茶を一口啜る。こいつが何を考えているのかは分からないが、多分、俺にその予想を喋るかどうか悩んでいるわけではないだろう。この話をした時点で、俺がこの質問をすることは想定済みのはずだ。

さて、どう出るか.....

俺もお茶を啜り、藤二の言葉を待った。

「.....僕は、殺されたのは天瀬響花だと思っています。先輩の言う通り、証拠は何もありませんが」

「へえ、どうして？」

これが本当の事かどうかはさておき、俺は取り敢えず聞いてみる。まあ、あくまでも参考にする程度だ。どうせ後で自分で調べるしな。それに、こいつが言うことも、全部が全部嘘ではないだろう。バレにくい嘘というのは、大抵、嘘の中に本当の事が織り交ざっているからだ。

「天瀬響花と思われる人物が殺された日の夕方、放火事件があったんです。場所は、須藤響一郎の自宅」

「へえ、そんなことがあったんだ」

真偽はともかく、これは俺も知らない事だった。

「ええ。まあ、全部焼けちゃったみたいなので、結局手がかりになりそうな物は何も無かったんですけど」

「家族は？ それに、家を見つけたのなら、近所の人には聞いてみたのか？」

俺は、浮かんだ疑問を率直に尋ねる。家まで見つけたのなら、どっちが死んだのか、分かりそうなものだ。

だが、藤二は首を横に振った。

「いや、聞いて回ったんですけどね.....それが、名前どころか、顔すら誰も知らなかったんですよ。どうも、あまりご近所の方とは付き合っていなかったみたいですよ。家族の方は、全員、火事で.....」

「.....そうか」

最後の方は言いづらそうだったので、俺は代わりにそう呟いてお茶を啜る。

多分、この話は本当だろう。よもや、こいつもこんな不謹慎な嘘を吐くやつではないと信じたい。

ただ、それならそれで、俺の頭には一つの疑問が浮かんできた。

「監視カメラはどうだ？ その娘の家がどこにあるかは知らないが、今時、監視カメラに映らないように行動するのは無理じゃないか？ 今時、どこも監視カメラは割と設置されているし。引きこもりならともかく.....いや、とあるホテルで殺されたっていうなら、少なくとも外には出たんだろ。調べなかったのか？」

「勿論、調べましたよ」

藤二は少し頬を膨らませて反論する。なるほど、調べたけど見つからなかったわけか。

「困ったことに、どこにも写っていなかったんですよね。まあ、須藤響一郎さんの自宅の近くに、監視カメラが少ないっていうのもありますが……」

それでも、と藤二は言葉が続ける。

「彼女の家から数キロ圏内にある監視カメラをシラミ潰しに探していった所、ここの近くのコンビニの監視カメラに映っていました。殺された方の女の子の姿がね」

「……この近く？」

不意に、俺の心臓がドクンと跳ねる。この近くのコンビニと言ったら、俺が思いつくところの一つだ。

「はい。先輩がアルバイトしているコンビニです」

流石に、顔に出ているらしい。ニヤツと笑うと、藤二はそう言った。

多分、藤二は気がついたらろう。あのコンビニは、俺が殺し屋稼業を続けるための便宜を得ているところだ。オーナーがおっさんの知り合い、もとい元同業者だったらしい。当然、俺も急に仕事が入った時は、バイトの仕事をオーナーに任せて出る。しかも、その割合は中々に高い。もし何も事情を知らない人から見れば、少し不自然に感じるだろう。藤二が疑いを持つきっかけになるには、充分だ。

とは言え、いくら藤二と言えども、あのコンビニの監視カメラで俺の様子を見ただけでは、俺が殺し屋だとは分かるまい。精々、ちょっと不自然だ、と思うだけだろう。もっと、決定的な何かがあったはずだ。

俺はお茶を一口啜り、口を開く。

「殺された方ってことは、お前が天瀬響花と睨んでいる女の子か……一応言っておくが、俺はこの娘を見たことはないからな？」

これは本当のことだ。まあ、あまりコンビニのバイトに精を出していないので、たとえ来ていたとしても記憶には残っていない。何度も来ている客なら、いくらなんでも顔を覚える。多分、うちのコンビニに来たのは、多くても二、三回といったところだろう。

なるべく困ったような顔を作っていた俺を見ていた藤二だったが、俺のこの発言を聞いて、フフツと笑った。

「ええ。だと思えます。彼女が先輩のいるコンビニに来たのは片手で数えられるくらいしかありませんし、どれも先輩がいない時でしたから。そういえば、来ていたのは、全部休日でしたね」

「……そうか。なら、仕方ないな」

俺がそう呟くと、藤二はお茶を啜る。

「で、話を元に戻すとですね。そのコンビニを中心に聞き込みをしていくと、どうやら彼女、この近くの高校の生徒みたいなんですよ」

「……おいおい」

流石に突っ込むべきだろうと、俺は首を傾げる。

「いくら何でも、それは科捜研の仕事じゃないだろう？ いや、俺はよく知らんけども、そういうのは捜査一課の仕事じゃないのか？」

すると藤二は、少しバツの悪そうな顔を作った。が、それも一瞬で、すぐに不敵な笑みを俺に返し、舌をチョロっと出す。

「いや、まあ、ちょっとした裏技を……友人から、そこら辺に必要な物を拝借してですね……」  
なんだそりゃ。まあ、こいつなら当然か。

俺はやれやれと溜息をついて、額に指を当てた。

「……で？ 聞き込みをした後は、何か分かったのか？ 当然、その学校には行ってみたんだろ？」

俺の問いに、藤二はコクンと頷く。

「先生や生徒に聞き込みをしたところ、こっちの娘」

藤二は、おそらく自身は天瀬響花だと思っている写真に指を置いた。

「彼女は学校で、ひどいイジメを受けていたらしいんですよ」

「そこまで聞き込みをしたんだったら、殺されたこの娘の名前は、分からなかったのか？」

答えは分かっていたが、俺は聞いた。さっきのおっさんの倅の話を知っているのもそうだが、「確かな証拠が無い」と藤二自身も言っていたのだから、調べた結果は聞くまでも無い。

「先輩も意地悪ですね」

そう言いながらも、藤二は微笑を浮かべていた。お茶を一口啜ると、続ける。

「誰も、覚えていませんでした。まあ、今まで彼女の名前を推測した名前で呼んでいたのも、聞くまでも無いでしょうが。結構深いところまで調べたんですけど、学校を運営するのに必要な書類が何枚も欠けていて、結局分からずじまいでした」

やれやれと肩を竦めて、藤二は続ける。

「全く、信じられない話です。先輩もその学校に行けば分かると思いますけど、あまりいい学校では無いですね。偏差値もかなり下のところに位置していますし、生徒も不良ばかりでした」

「別に偏差値なんて、ただの数字だろ……で、その後は？」

「……まあ、名前は分かりませんでしたけど、有益な情報が一つだけ」

そう言うと、藤二はもう一人の女子生徒の写真に指を置く。俺はお茶を啜って、次の一言を待っていた。

「天瀬響花と思われる女子生徒には、友達がいたようです。それが、この娘。僕が須藤響一郎と睨んでいる生徒ですね」

まあ、おっさんの倅が知っているみたいだから、これくらいの情報はこいつも楽々掴めるだろう。

「友達の方も、誰も名前を覚えていないのか？」

俺が聞くと、藤二はコクンと頷く。ほんと、嫌な学校だな。

「顔は見たことあるみたいですが、二人は互を『きょうか』と呼び合っていたみたいですから、他の生徒は、どっちがどっちだかよく分からなかったみたいです」

そう言うと、藤二はお茶を一口啜った。

「ただ、割と仲は良かったみたいですよ？ 須藤響一郎と思われる娘も、天瀬響花ほどでは無いにせよ、あまり周りにはいい印象を持っていなかったみたいですからね。嫌な思いをしたことも、

一度や二度では無かったと思います。そういう所で、互いに共通点があったのでしょうか」

「……一体、どういう経緯で、お前が天瀬響花だと睨んでいる娘は、須藤響一郎に殺されたんだろうな」

俺は、自分でも分かる位しんみりとした口調で呟いた後、お茶を啜ろうとした。だが、既に無い。

俺がお茶を注いでいる間、藤二は俺を黙って見ていた。注ぎ終わった後、俺は再びお茶を飲む。ほのかな酸味の後、強い苦味が襲ってきた。

「藤二、一ついいか？」

入れたお茶を半分位飲み干した俺は、今尚沈黙を保っている藤二に尋ねる。ふと、沸いた疑問だった。

「お前は、天瀬響花を殺したのは須藤響一郎だと思っているみたいだが……そう思ったきっかけはなんだ？」

ここまで話を聞く限りだと、俺はむしろ、被害者と加害者は逆ではないかと思っていた。

「人間の活動範囲を考えれば、たかがコンビニに行くのに、わざわざ自分の生活の範囲から外に出るとは考えにくい。学校の通学路の途中ということも考えられるけど、イジメにあっていたんなら、それもどうだろうってところだ。俺なら、休日に学校の近くには寄らないからな」

ここで俺はもう一度、お茶を啜った。

「家がどこにあるのかは知らないが、お前は須藤響一郎の自宅から、俺のアルバイト先を見つけたんだろう？ なら、お前が見つけた彼女は、須藤響一郎と考えるのが自然だ。搜索の範囲を徐々に広げていったんだろうから、須藤響一郎の自宅は、案外この近くなんじゃないのか？」

「ええ。先輩の言う通りです。まあ、近くと言っても、彼女の自宅は少し向こう側にありますからね」

「放火の話は初耳だったからな。多分、ちょっとは離れているだろう……で、話を戻すと、だ」

「一応、補足しておきますと、天瀬響花の家は、この近くにはありませんでしたね。どこにあるかは、分かっていません」

藤二が、これから俺が質問しようとしたことについて、先に答える。さっき言った、書類がどうのこうの、というやつなのだろう。これは、俺も後で調べなおすのは苦労しそうだ。

心の中で、ウヘエという顔をしながらも、俺はさらに続ける。

「そうか……なら、なおさらだな。この近くに須藤響一郎の家があるなら、俺がその娘を見たら、間違いなく須藤響一郎だと思うぞ？ と、いうことは、殺されたのも須藤響一郎だろう。お前が、彼女を天瀬響花だと思ったのは、どうしてだ？」

俺がそう尋ねると、藤二は暫く黙っていた。そして、一口お茶を啜る。

「そうですね……」

重苦しく口を開く藤二。どうも、かなり悩んでいる様子だ。こんな顔を見るのは初めてだった。何か新鮮である。

思わずニヤケそうになるのを必死で堪えるために、俺もお茶を飲んだ。

「いえ、最初は先輩と同じことを考えたんですけどね……僕には、須藤響一郎の自宅が燃やされ

たのが引っかかるんですよ」

「なるほど」

「おそらく、あの放火とホテルでの殺人事件は無関係じゃないと思うんですよ。で、そこから考えた結果なんですけど、放火の犯人は十中八九、天瀬響花だと思うんです」

「まあ、自分で自分の家を燃やすような奴はいないだろうしな」

まさか、という意味合いを込めて言った俺の言葉に、藤二は頷く。

「ええ。僕もそう思います。その点については、先輩に賛成です。それで、天瀬響花は、学校でひどいイジメを受けていた訳でしょう？」

今度は、俺が頷く。なんとなくだが、藤二の言いたいことが分かってきた。

「そういう場面を目撃した、という話は無いんですけど、僕は須藤響一郎が、天瀬響花をいじめていたのではないかと思っています」

「味方の振りをして、実は裏でこっそりと……ってか？ いくらなんでも、発想がひねくれすぎだろ」

俺には理解できなかった。友達の振りをして、いじめのターゲットに近づくとか、人間のやることとは思えない。

ただ、もしもそれが本当だったとしたら、天瀬響花の受けたショックは計り知れないだろう。

「仮にそうだとしたら、天瀬響花が須藤響一郎への報復として、家に火をつけるも無いわけじゃないのではないのでしょうか」

「で、それに怒り狂った須藤響一郎が、天瀬響花を殺したってわけか？ でも報復なら、家に須藤響一郎がいる時を狙うだろ。あ、いや。でも、命を奪うつもりまでは無かったのか……？」

俺の呟きに、藤二は頷く。

「流石に学生に、人を殺す度胸があるとは思えません。イジメは深刻なものだったでしょうし、友達に裏切られたのもショックだったでしょうが、それが人を殺す理由になるかと言われると……」

「家が燃やされ、家族も殺された、っていう方が、殺人の動機としてはありえるな」

「ええ。家に火はつけたものの、本人の予想以上に火が大きくなり、最終的に手をつけられなくなってしまったのではないですかね？ と、言うことは、殺された死体は天瀬響花ってことになりませんか？」

そう言われると、俺も頷くしかない。まだ引っかかる部分は少しあるが。例えば、それならわざわざホテルに連れ込む理由はなんだ、とかだ。計画殺人ならともかく、今の理由なら、殺意は衝動的なものだろう。完全犯罪のために、ブティックホテルに連れ込もうとする思考までたどり着くとは思えない。

まあ、ここら辺は全て、須藤響一郎が天瀬響花をいじめていた、という藤二の予想が正しければ、の話だが。

藤二も、そこら辺は分かっているらしい。

「一応、僕の友達に刑事がいるので、僕の予想の裏を今とって貫っているんですけどね」

弱々しく微笑みながら、藤二はそう呟いて、お茶を啜った。そして、少し目を閉じて口を開

いた。

「ただ、何かしらの理由は、あると思うんですよ。まさか、何も無かったのに、いきなり殺意が芽生える訳がありませんから」

「まあ、そりゃそうだが……例外もいるだろうよ」

俺はそう言って、ほう、っと息を吐く。最後の方は、言葉になっていたかどうかは分からない。そういえば、一体何の話をしていたんだっただろうかな？

「で、話は最初に戻るんですけど」

言葉は聞こえなかったようだが、俺のその思考を見透かしたように、藤二が言った。そして、アパレル会社の社長の写真を指で差す。

「先輩は、この人に見覚えはありますか？」

「無いな」

自分で殺しておきながら即答するのも何か嫌だったが、その思考を無理矢理押し沈める。

「……そうですか。いや、僕がここに来たのは、この事件の聞き込みをするためなんですよ。いや、大分色々話し込んでいたんですが」

そう言って微笑を浮かべた藤二だが、それが目的じゃないことははっきりしている。

「ちなみに、死亡推定時刻は、今から二ヶ月程前ですね。死亡した場所は、最初にも言いましたけど、天瀬響花が殺されたホテルの近くです」

「そもそも、天瀬響花が死んだホテルの場所を知らないから、それについては、だからどうしたってところだ」

きっぱりと俺はそう言って、お茶を啜った。

「ホテルの場所は、ここから少し離れているんですけどね。須藤響一郎の自宅のあった場所から、割と近いところですよ」

「なら、なんでこんな所まで聞き込みに来ているんだ？ 聞き込みなら、そのホテルの近くでやれ。そっちの方が情報あるだろ」

藤二は、その俺の言葉に頷いた。だが、続けて首を横に振る。

「そこら辺は、別の捜査員に任せますよ。僕は直感で、こっちの方が何か収穫がありそうだと思います」

それが本当なら、なんという直感だろうか。今まさに、彼を殺した犯人が目の前にいるわけだから。ちょっと背筋が寒くなる。

だが、さっさとこいつを追い出そうと、俺は次の言葉を発してしまったのが、運の尽きだった。

「こんなところに情報なんかあるか。さっさと帰って、捜査に戻れ」

「あっ、じゃあ、先輩も来てください」

途端に凍りつく俺。こいつは一体、今何を言ったのだろうか？

「来てください……って、なんだ？」

「言葉の通りですよ。先輩も、僕の聞き込み調査を手伝って下さい。どうせ、暇なんじゃないですか？」

満面の笑みを見せる藤二に、俺はただただ手を引かれていった。気が付けば、家の外だ。

「……は？」

俺の吐いた息が、白く曇った。

友達(?)

ここは、どこだろう？

私、伊藤まゆみは、そう思った。背中が柔らかい。オトメユリの香りが心地いいものの、胸につく不安が拭えない。

「ええっ……と」

出てくる声も掠れている。

頭はどうにか正常に動くし、視界もだんだんとはっきりとしてきた。どうやら自分は、今まで寝てしまっていたらしい。

何があったのか、記憶をたどってみる。確か、勇気と別れた後、女の子と出会って、ハンカチを拾って……

「……ああ」

その後、ハンカチを拾ってあげた子が、わざわざ家まで来てくれて、それからお礼を言われて……

「……ええっと」

その後、その子を家に上げてから……

「一緒にお話し、したんだっけ？」

少しずつ、記憶がはっきりとしてきた。そういえば、あの女の子と、他愛もない話をしていたはずだ。どんな話をしたのかは思い出せないけど、途中で女の子がコップを倒しちゃって、中のオレンジジュースがこぼれたんじゃないかな？

「あっ、私のスマートフォン……」

そうだ。ジュースが私のスマートフォンに掛かって、あの子が青ざめて必死で謝っていたんじゃないかな？ 事故だから仕方がない、って言ったけど、あの子は自分が弁償するって聞かなかったなあ。

「で、確か私は……」

取り敢えずこぼれたジュースをなんとかしようと、雑巾を持ってきて、それをあの子と一緒に拭いたところまでは覚えている。

その後を懸命に思い出そうとするけど、頭の中に靄がかかったみたいで、うまく記憶の形が見えてこない。ぎゅっと目を瞑っても、靄は晴れなかった。

「……あれ。あの後私、何をしたんだっけ？」

「コップに、ジュースを注いでくれたんですよ」

不意に、足の方から女の子の声が聞こえた。見下ろそうとした私だけど、上手く体が動かさないことに気が付く。



ここで初めて、私は仰向けで横になっていることに気が付いた。

「で、まゆみさんも自分のコップにジュースを注いで……」

「あっ、そうだ。私もそれを飲んだんだっけ？」

「はい。で、コロン、と眠っちゃったんですよ。寝顔、とても可愛かったです」

女の子に言われ、ようやく霧が晴れた。でも、スッキリしているはずなのに、胸につく不安は募るばかりで、一向に消えない。

「……あの」

上半身を起こそうとしたけど、全然起こせなかった。

それでも私は、まだ思い出せないことを聞くために、声を振り絞る。

「あなたは、誰？」

さっきまで聞いていた声のはずだった。なのに、声の主の顔は思い出せるけど、名前が全然出てこないのだ。

「私ですか？」

ふと、さっきまで聞いていた声と、違う声が聞こえた気がした。

「私の名前は――」

【続く】

【あとがき】

お久しぶりです。Puney Loran Seaponです。まさかの中巻です。最初の藤二達の会話が思った以上に伸びまくって、あっという間に制限ページ数ギリギリになってしまいました。まだ一ページ余裕がありますが、きりのいい所で次回へと続きます。まさかの中巻なので、細かい話はまた今度にさせて下さい！ すみません！

尚、この話の前編は、電子書籍に載っています。が、なんと、私のホームページでも読めちゃったりします。(前編を読むだけなら、電子書籍で読む方をおすすめします)

今ググって検索できるようには申請していますが、まだ無理なので、ここにURL書いておきます。是非、覗いてみてください。ちなみに、これはクロスオーバー作品で、元となった作品の一部はこっちでしか読めません。

URLは <http://www7b.biglobe.ne.jp/~lppclub/> です。ホーム真ん中ちよい上の『部活投稿作品』のコンテンツをクリックして、読みたい作品をダウンロードしてください。ワード形式で、ダウンロードできます。それでは、また。

## クリプトビオシス（日曜日 憂）

---

クリプトビオシス

日曜日 憂

僕がそれに気づいたのは晩秋のある夜のことだった。先に寝かせた彼女の寝息を聞きながら、電灯を落とした真っ暗な四畳半の部屋で、唯一の光源であるちゃぶ台の上のパソコンに向かって、僕はあぐらをかいていた。大学の講義のレポートを作成するためだ。ワードを開いて、一文字も書けずに、点滅するカーソルを眺めて、もう一時間は経とうとしている。脳みそに睡眠欲のベールがかけられてしまったようで、もくもくと僕の意識は煙のように拡散していた。そのもやの向こうからやってくるディスプレイの光が目突き刺さり、僕は何度もまばたきした。だめだ。気分転換に一服しようか、僕が腰を上げかけたとき、青白いディスプレイの光に誘われて、一匹の小さな羽虫が画面にとまった。僕は思わず舌打ちをして、そいつを潰そうと手を伸ばしかけた。けれど、どうにも眠さが僕の活動を鈍らせていて、結局そのままじっと眺めていた。逆光のせいで、小さなシルエットとしてしか映らない、ワードのカーソルよりもずっと細く弱々しい六本の脚と、頭と胸と腹を分ける三つのくびれ。どこかへ飛んで行け、そして二度と僕の前に現れるな。そう思いながらぼんやりと羽虫を眺めていた僕は、突然、そのシルエットが変化し始めたのに気づいた。あのか細い六本の脚が、みるみるうちに縮んでいく。彼の体を分けるくびれがなくなり、一つのかたまりになっていく。脚が縮み切ると、しまいには体を支え切れなくなって、ぽんと落ちてしまった。僕は驚いて、卓上ライトのスイッチを入れた。一瞬、強烈な蛍光が僕の網膜に白い穴を開けて、その後、僕はキーボードの上に落ちたその羽虫だった小さなものをつまみ上げた。ごく小さなカプセル状の――カプセルというより樽といったほうが近いのかもしれない――枯葉のような茶色をしたかたまり。表面はつるつるして、つるつるはしているけれど、光を吸収してしまっていて、なめらかだった。さなぎかと思ったけれど、どうやら違うようだ。そもそも、さなぎとは幼虫から成虫になる間のものであって、成虫が脱皮もせず急になるようなものではない。それに、さなぎに見られるような、表面の羽や脚の形はどこにもなく、つるんとしている。ひどく軽く（これだけ小さければ軽いのは当たり前だが、それにしても重さがなかった）、鼻先に持ってきてにおいを嗅いでみると、その色と同じように枯葉のようなくすんで乾いたにおいがした。ちょうど、枯葉を一枚、溶かして固めたら、こういうものができあがるのかもしれない。その小さく乾燥した、かつて羽虫だったものを、僕はしげしげと眺めまわした。けれど、五分もすると僕はそれに飽きてきた（なにせ、乾いた小さなかたまりには何の起伏もないのだから）、きつとこういう特殊な変態をする昆虫もどこかに存在するのだろうと決めつけ、それをゴミ箱に放った。ほとんど重さを感じないほど軽かったにも関わらず、きれいな放物線を描いて、その塊はゴミ箱に飛び込んだ。ふ、とひとつため息をついて僕は立ち上がり、ライトを消した。再び光源はパソコンのみになった。ちゃぶ台の上のたばこを手に取り、窓を開けた。棧に肘をついて、ゆっくりとたばこを吸った。

その夜は結局ワードに一文字も打ち込めなかった。

翌朝、僕が目を覚ますと、彼女が僕の顔を覗き込んでいた。

「いつの間に寝てたの」

結局僕は、あきらめて彼女の寝ているベッドにもぐりこみ、すぐに寝てしまったのだった。

「課題は？」

彼女も起きたばかりなのか、髪は寝ぐせがついたままで、まぶたは重そうに二重になっていた。

「あきらめた」

「提出、今日なんでしょう」

「うん」

「どうするの」

「だから、あきらめた」

彼女はそれを聞いて微笑むと、「だめなひと」といたずらっぽく言って、僕に軽く口づけた。そのとき、僕は昨夜のことを思い出した。

「不思議なことがあったんだよ」

「妖精さんに邪魔でもされた？」

くすくすと可笑しそうに笑いながら、彼女は身を起こした。僕もそれに合わせて、上半身を起こす。

「あるいは妖精さんだったのかもしれない」

「夢を見たのね」

「違う、夢ではなかった」

そう応えつつも、自信はなかった。いつ寝たのかも思い出せないのに、あれが眠る前のことだったと言い切れるのか。そこで、「ああ」、僕は気づいた。

「証拠があるかもしれない」

僕はベッドから降りた。それから、ゴミ箱の中を覗く。おとといに中身を空けたばかりだったから、ほとんど空っぽだった。すぐに見つけた。

「これだよ」

枯葉色のかたまり。つまみあげて、まだベッドに座っていた彼女の目の前へ持って行く。彼女はきょとんとしながら、僕の指先がつまんでいるものを見つめた。

「なあに、これ」

「わからない。目の前で、虫が、急に、これになったんだ」

枯葉のにおいが鼻腔を刺激する。「さなぎ？」と彼女は僕の指先からかたまりを受け取って、いろんな角度から見始めた。

「さなぎじゃないと思うんだけど」

「そうね。さなぎにしては――」

彼女の細く白い指先で、枯葉色のかたまりがくるくると踊らされる。彼女はつぶさにその一挙

手一投足を目で追う。

「おかしいわね」

「そうだろう」

しばらく眺めて、でも、昨日の僕と同じように、すぐに飽きてしまったのか、

「でも、きっと、さなぎか何かよ」

彼女は僕にかたまりを返した。

「そうかなあ」

「そうよ。きっと。わたしは専門家じゃないから、わからないけど」

「専門家、ねえ」

僕のかたまりを、昨夜と同じようにゴミ箱に放った。

「捨てちゃうの」

「持っていてもしょうがないからね」

「生物学の先生のところに持っていったら？」

「知ってる先生、いないものなあ」

「そっか」

彼女はベッドから降りると、一つ、伸びをして、

「朝ごはんにしよう」

二限は哲学入門の講義だった。哲学は退屈ではないが、哲学の講義は退屈だ、と僕は思う。というよりも、この講義を受け持つ教授が退屈だ。唾液がよほどねっとりとしているのか、発音は不明瞭で、喉が泥で覆われて狭くなっているのか、声は小さかった。ただレジュメを配って、それを読み上げるだけ、たまにそれ以外の話をするとき、自分の若いときと今の大学生を比べて、彼がノスタルジーに浸るだけ。

「ノート、見せて」

僕の隣に座っていた彼女が、小声で僕にささやいた。先週、彼女はこの講義に出ず、別の課題に取り組んでいたようだった。

「とってない」

「とっておいてって言ったのに」

彼女は口をとがらせた。僕は苦笑いして、

「とらなくても大丈夫だよ、こんなもの」

彼女はためいきをついて、一つ微笑み、

「そうね。レジュメで十分ね」

「レジュメすらいらなないかもね」

僕は小さく笑って、それから目を戻した。白髪が申し訳程度に生えている禿げ頭を見ながら、僕は頬杖をついた。すると、後ろからげらげらと笑い声が聞こえた。僕たちは教室の窓際、真ん中からほんの少し後ろのところに座っていたのだけれど、そのもっと後ろには、しかたなく教授

のノスタルジーを聞いている……いや、聞いてすらいらない人たちが座っていた。どいつもこいつも、こそこそと何か話しては下卑た笑い声をあげている。べちょべちょとした不気味な笑いだ。退屈な老人の退屈なノスタルジーをただ右の耳に入れて左の耳から出すのは簡単なことだったが、彼らの下卑た笑い声は、右の耳から入ると右脳にこびりついてするどいかゆみをもたらし、左の耳から入ると左脳に降り注いでぐちゃぐちゃに腐食させた。いらいらしながら、僕がちらりと彼らのほうを振り向くと、一瞬、枯葉のにおいがした。

途端に彼らは、ぐずぐずとそのディテールを溶かし始めた。鼻が溶けて、穴を埋めながら低くなっていく。まぶたが溶け落ちて、眼球をまんべんなく包み、その目は二度と光を映さない。唇は色を失い、どろどろと溶け混じって口腔を塞いだ。髪の毛はまるで生えてくる映像をの再生を見ているかのように見る間に短くなっていき、しまいには一本も無くなってしまった。まつげやまゆげも同様だ。耳は癒着したあと、溶けてその複雑な構造は跡形もない。そうやって溶けていきながら、肌の色は濃く染まっていき、枯葉色に近づいていく。衣服も同じように枯葉色に染まり、ポケットやボタンも沈んで無くなった。腕は肘と手首が折りたたまれたあと、一つになって手羽先のようになって、さらに胴体に融合していった。首は肩にずぶずぶと沈み、頭だった溶けたかたまりもいっしょに呑みこまれてしまった。

あとには、つるつるした五つの枯葉色のかたまりが残った。さっきまでひそひそ話していた彼らは、みんなかたまりになってしまった。濃い枯葉のにおいが立ち込めて、一瞬で冬が来たようだった。

「ねえ、」

僕は驚いて、彼女を呼んだ。しかし、彼女は僕の呼びかけには応じなかった。僕が彼女を振り向くと、少しだけ口を開いて、じっと前を見つめていた。彼女の視線を追いかけて、僕も前を見た。黒板と教卓。その教卓の上に、つるつるした枯葉色のかたまりが乗っている。教授はいない。否、教授はいる。授業の進行は止まったはずなのに、僕たち以外は、誰も、そのことに気づいていないらしい。下卑た笑い声が聞こえてこないことを除いて、いつも通り、教室は静かなままだった。

「ああ——」

彼女は小さくためいきを漏らした。なにかに怯えたような、震えたため息だった。

「これって」

「昨日の夜、僕が見たのと、」

僕は、あの小さな、ゴミ箱に放り投げた、枯葉色のかたまりを思い出していた。あれと大きさは違えど、

「同じだ」

僕と彼女は、部屋に帰ると、すぐに口づけをして確かめた。彼女の身体は少し震えていた。

「あなたからも似たにおいがするの」

唇を放すと、彼女はそう言った。

「似たにおい」

「そう。枯葉みたいな、乾いたにおい」

彼女は寂しげに僕を見つめた。彼女に言われて、はっと僕はあのかたまりの意味を思い出した。光を反射しないで、ひっそりと樽のようなかたちをして、乾いた枯葉のにおいを漂わせる意味。

「あのさなぎよりも、まだ薄いけれど」

「枯葉のにおいが、する」

「そう。ずっと。最初から。ずっと」

僕は彼女を見つめ返した。彼女の瞳は、夜よりも闇よりも深い黒をしていて、その深淵を覗き込んでいたら、引きずりこまれて落ちてしまうんじゃないかというくらいで、

「僕は君がいるから眠らない」

彼女が小さく息をのんだ。

「君がいるから、眠れない」

そっと彼女の頬に手を伸ばした。指先で、なめらかで柔らかい頬を撫でる。その指が濡れた。

「そうだったの」

彼女も僕の頬に手を伸ばした。なめらかで柔らかい指先で、そっと撫でてくれる。その頬は乾いていた。

「君がいるから、起きていられた」

濡れて光沢を増した彼女のまつげを見ながら、僕はその目じりに指を伸ばす。

「でも、眠りたいのね」

濡れた声。彼女はいつでも、僕のことを見通す。僕のころは、彼女には薄いガラスの膜に見えるのだろうか。

「そうかもしれない。そうだね」

僕は微笑んだ。とても乾いた微笑みだったかもしれない。彼女は目を見開いたまま、しばらく唇を噛んで、それからうつむいた。

「ごめんね」

僕は謝った。赦されるとは思っていなかったけれど、それでも、謝らずにはいられなかった。その声だけは湿っていたかもしれない。

「でも」

再び彼女が顔を上げたとき、その顔は微笑んでいた。

「わたしはあなた。あなたはわたし」

「違うよ。君は君だ」

「でも」

「君からは、においがしない」

「あなたの望みは」

「君は望んでいない」

彼女はまた顔を崩しかけたが、すぐに微笑みを取り戻した。綺麗だった。

「あなたは、いつも、あなたよりわたしなのね」

「それは君も同じことだろう」

「そうね。なら、なら、もう――」

彼女が僕にもう一度口づけをした。その唇はとても湿っていて、美しく、また不快でもあった。それから、

「――もう、いいのよ」

彼女が僕を許した。

僕は変態を開始する。彼女は、変態する僕を、微笑みを絶やさずに、静かに見つめている。枯葉色の泡が視界をさえぎり、鼻の穴が溶け塞がって呼吸ができなくなる。耳も塞がって何も聞こえない。骨が溶けて姿勢を保つことが困難になり、脚がなくなって、僕は彼女の足元にうずくまった。彼女はしゃがんで、僕を見つめ続けた。全身の水分が抜けていく、陶酔的な快樂が僕の身を包む。

そうして僕は、やがてつるつるした枯葉色のかたまりになって、永久に彼女の足元にいた。

終

あ　と　が　き

どうも。薄い作品になってしまいました。突貫工事でやればそうなりますよね。難しいですね。締切に余裕を持って書きたいですね。

○執筆中お世話になったアルバムたち

『mbv』 My Bloody Valentine

『Sing』 GRAPEVINE

『Amygdala』 DJ Koze

## 夢の通り路（芳野 朔）

---

夢の通り路

芳野 朔

耳飾りがモチーフになった歌はいくつかあるけれど、ほとんどは失恋の歌だったような気がする。

ぼんやりとそんなことを考えながら、彼女はすっかり冷めきってしまったブランデーココアを飲み干した。底に溜まっていた甘みとアルコールが、どろりと喉の奥に流れ込む。やっぱりスプーンで混ぜながら飲むべきだったと、彼女は口元を拭いた。

失恋の歌によくいる、自分が悲劇のヒロインになったと陶醉しているような女を、彼女は心底嫌っていた。私が悪いのと泣く癖に、どこかで「それは違うよ」という言葉を欲しているような女。思い出の品を置いて悦に浸るような女。夢見がちで、可哀そうな自分を演じている女。

私は、そんな女じゃない。

彼女は淡々と立ち上がり、キッチンの流しにマグカップを置いて、蛇口をひねる。冬場の冷たい水が勢いよく出てきて、瞬く間に汚れが洗い流されていく。マグカップの底と縁を指で軽くこすって、ハンカチで水気を拭き取った。彼の使う洗剤やスポンジを使う気になれないのだ。

ここは彼女の部屋ではない。付き合っていた男の部屋だ。ブルーのカーテンに黒いテーブル。物があまりない、シンプルな部屋になった。彼女はキャリーバッグに詰め込んだ服をかき分けて、その隙間にマグカップを押し込んだ。私のものを、ここに置いておきたくはない。置いていてはいけない。

部屋の主はここにはいない。仕事帰りに飲みに行くとメールがあったが、それは嘘であることを、彼女はとっくに知っていた。今どこにいるのかも、彼女はなんとなく予想はついている。

小さくため息をついて、彼女は部屋の真ん中に座った。口の中がまだ甘ったるい。まるで自分の気持ちのようで、不快感がより強くなる。

午前四時。テーブルの上に置いてあるデジタル時計は、一秒、また一秒と時を刻む。一秒経つ間も、世界は刻一刻と進む。変わらないものはないのだ。こうしている間にも彼女の髪は伸び、爪も伸び、細胞が死んでいっている。目に見える変化だけが変化ではないのだ。それに気付くのが、彼女はほんの少し遅かった。自分の気持ちだって、こんなに早く変わってしまっているのに。

ふと、テーブルの上にあったコピー用紙が目に入った。無意識に彼女の手が伸び、折ったり切れ目を入れたりしている。私は何をしているんだろう。彼女は勝手に動く手を、ただただぼんやり眺める。

できてしまったそれを見て、彼女は初めて表情を歪めた。

転がっている折鶴。二羽いるように見えて、それは一枚の紙で折られたものだ。鶴のお腹の部分――底の部分がつながっていて、まるで水面に映っているような。

夢の通り路、という名前の折鶴。



彼女が落ち込んでいた時、よく彼が作ってくれたものだった。あつという間にでき上がるそれは、本当に魔法のようだった。鶴が見事に作られていくのを見るのも、彼の指を見ているのも好きだった。そして最後に、二つでひとつだねと微笑んでくれるのだ。

きっと、アイツはもう私のために鶴を折ってはくれないし、心から笑ってもくれない。

悔しいことに、目の奥が熱くなってきた。もっと悔しいのは、これを置いていこうとしている自分がいることだった。ずっと否定して、嫌悪してきた女になろうとしている。それが許せない。でも、置いていきたい。心が引き裂かれそうなのと、自己嫌悪と、潤む視界で、大声で叫びたくなる。それをなけなしの理性で抑えて、彼女はぐっと奥歯をかみしめた。結局、人は根本では同じなのだ。人は独りでは生きていけない。肯定されたがっている。特別になりたがっている。

私も、「特別」になりたかった。

瞬きをすると、視界がクリアになった。ぱたりと音がして、ラグにじんわりと染みができる。

その瞬間、彼女は、自分も「普通」の女であることを自覚した。強がっているだけで、本当は誰かから認めてもらいたがっている、どこにでもいる女。

彼女は「夢の通り路」を手取る。

一瞬、乾いた音が静寂を破った。

手に取った鶴をテーブルに戻した時、彼女の中では、全てが過去になっていた。

彼女はすっと背筋を伸ばし、コートを着てマフラーを巻いた。キャリーバッグを手にして、きびきびとした足取りで玄関に向かう。全てが彼女の後ろに消えていく。

玄関の扉を開けると、キンと冷え切った空気が彼女の頬をなでた。澄みきった水晶のような朝の空気を吸い込み、静かに息をはく。まだ暗い夜の底で、芥子の実よりも細かな氷が宙に舞い、消えて行った。

しんと静まり返った部屋の中。一定のリズムで、徐々に遠ざかっていくヒールの音が聞こえてくる。

誰もいない冷え切った部屋のテーブルの上には、底の部分が千切れた、二羽の折鶴が転がっていた。

## ノワールの神話（惇 暉）

ノワールの神話

惇 暉

待ち合わせ場所の廃ビルの七階に、ユキコはまだ来ていなかった。私は持って来た紙袋を床に置いた。なにもすることがないので、私はぼんやりと外の景色を眺めた。今が夜だということも手伝ってか、都心の超高層ビル群の明かりがよく見える。

世界に誇る摩天楼とは、よく言ったものだ。青白い光が煌煌<sup>こうこう</sup>とあたりを照らしているのは、確かに迫力があるのだが、私はあまり好きになれない。もっとう、柔らかい色がいい。橙色なんてぴったりだ。蠟燭を付けているような感じで、けっこうイケると思うのだが。……

そう考えるのはおまえが女だからだ、と誰かに言われそうな気がした。でも、やっぱり蠟燭の炎がよく馴染むと思う。

私はそんな取り留めもないことを考えながら、相手を待った。まあ、相手がきちんと時間を守るような人間ではないので、こういう状況には慣れてはいるのだが。そして、またどうでもいいことを思いついた。

高層ビルが集まると、まるで一つの塔みたいに見えるのだ。外側から内側に向かって、どんどんビルが高くなっているから、山のようにも見える。いや、年々ビルが高くなっていることを考えると、竹の子と言ったほうが正しいかもしれない。……

それにしても、静かだ。ここは物音一つしない。

ここは東京二十五区の中でも都心部から離れた二十四区だ。当たり前と言えば、当たり前なのかもしれない。でも、ひっきりなしに走る車の鈍い音や、酔っ払いの甲高い声が聞こえて来ないのはありがたい。

空想を巡らすのにも飽きて、私は改めて自分のまわりを見回した。視界にあるのは、錆びついたドラム缶に、今にも崩れそうな木箱。廃ビルは、殺風景の極みだ。

遠くでサイレンが鳴っている。私はどこから聞こえてくるのだろうと、耳を澄ました。じょじょにこっちに近づいて来ると思ったが、途中で遠ざかっていき、消えてしまった。

どうせまた〈新人〉と〈旧人〉同士の喧嘩だろう。私はそう思った。二十四区は〈新人〉と〈旧人〉が混じり合った土地だ。だから、下らないイザコザがしょっちゅう起こる訳で、特別区の指定を受けるのも当然だ。

生暖かい風が頬を撫でた。四月も末になると風が冷たくなって、もうすぐ夏になるんだという気にさせる。しばらくの間、私は目を閉じてその暖かさを味わった。風が少しだけ強くなった。気持ち良かった。

ヒュウヒュウという音に、コツコツという音が混じった。ああ、これは階段の登る足音だ。たぶん、いつものように時間に遅れてユキコが来たのだろう。私は一人で頷いた。

今日は晴れているおかげで、月がよく見える明るい夜だ。私は目を開けて、振り返った。

ユキコがすっかり蝶番が錆びついた扉を開けて、こっちに向かって歩いて来た。灰暗いこの場

所で、ユキコは幽霊のように浮かび上がって見えた。いつも思うのだが、私は素直に彼女の恰好がおかしいと思う。

白い着物と紅い袴の巫女装束に、黒いブーツ。そして、白い狐のお面。

私は会う度に吹き出してしまふ。でも、ユキコにはどこか壊れてしまいそうな哀しさがある。儂さとはちょっと違う、変な愛おしさを彼女は持っている。

「よっ、相変わらずシケたツラしてるじゃん」

「遅刻して来たくせに、ずいぶんな挨拶ね」

「あたしが時間通りに来ると思うかい？ とんだお人好しだ」

ユキコは憎まれ口を叩きながら、私の隣に立った。そして、彼女は私の傍にある紙袋を足で突っついた。

「なに？ これ」

「赤ワインとビール。あなた好きでしょ」

私がそう言うと、ユキコはフンと鼻を鳴らした。私はそのしぐさを見て、苦笑した。どうやらあまりお気に召さなかったらしい。

「つまみは？」

「チーズとビスケット。これもあなたの好物でしょ？」

ユキコは肩をすくめて、大きなため息をついた。どうやら、これも彼女の機嫌を損ねたらしい。酒とつまみには自信があったのだけれど、と私は思った。

「これじゃ、ガキのおやつじゃん」

ユキコは吐き捨てるように、そう言った。私はちょっと考えて、彼女にこう問いかけた。

「でも、私と一緒によく食べたじゃない。施設にいたとき」

「あれは、他に食うもんがなかったから」

ユキコは頭を掻きながら、ブーツの爪先を何度も床に叩きつけた。私はそれを見てあることに気がついた。

「なんなの、ティア。あたしの顔になにか付いてんの？」

彼女の言葉を聞いて、ますますそんな気になった。ひよっとすると、彼女は元々機嫌が悪かったのかもしれない。私はお面の切れ長の目を見つめながら、微笑んだ。それを確かめる良い方法がある。

「ねえ、ユキコ」

「なに」

「いつまでそんなふざけたお面を付けてるのかしら？」

ユキコはチツチツと舌打ちをした。きっと、彼女の心の中で私は分かってないと罵られている。私は次に彼女が言うことが予想できる。

「こいつは立派なバサラの一部なの。外したらそれが台無しになっちゃうじゃん」

「ふーん。私、バサラってイマイチよく分からないのよね。ただ、奇抜な服を作って、着てるだけの気がするんだけど」

「あーあ、これだから頭の固い軍人は困るんだよねえ」

ユキコは犬でも追い払うように、シッシツと手を振った。私は彼女のそういうしぐさを見ると、子供のときのことを思い出す。彼女は昔から嫌なことは嫌と、はっきり言う性格だった。

「こうしてれば、普通のやつより強そうに見えるでしょ？」

「ファッションに強さを求めるのはどうかと思うわ」

「ふん、自分の服を見てみなよ。カメムシみたいで、貧相」

「由緒ある自衛軍の制服を、よくそんなふうに言えるわね」

私は自分が着ている服を改めて見返してみた。確かに濃い緑色がカメムシに見えるのかもしれないが、少しは敬意を払ってほしいものだ。少し傷つく。

「まあ、いいわ。あなたの主張はよく理解できたから、さっさと脱いで」

「なにをさ？」

「今さらとぼけないでよ。いい加減、そのお面を外してもらえないかしら？」

私はちょっと嫌味込めて、ゆっくりと口を動かした。ユキコはやれやれとでもいうように、首を振った。

「ったく。分かった」

「あなたの顔を見るのが、今日の目的の半分くらいなんだから」

「けっ、こっばずかしいこと言っちゃって」

ユキコはそう毒を吐きながらも、頭の後ろで結んだ紐を緩めて、お面を外した。ふと、彼女は昔より私の言うことを聞いてくれなくなったな、と思った。

「これで満足？」

ようやくユキコの顔が露わになった。その顔は月光に照らされて、身体と同じように浮かび上がって見えた。

童顔、といえるかもしれない小さな顔。意志の強さを反映している大きな眼。すらりと通った鼻筋。不機嫌そうに曲がった眉。それに華を添えるように、ユキコは鳶色の瞳と長い黒髪を持っている。

やっぱりユキコは澄んでいる水みたいに、きれいだ。私と比べ物にならないほど。

「相変わらず、きれいな髪ね」

私はそう呟いて、ユキコの髪に触った。手のひらに、柔らかい感触が広がった。風が吹いて、私と彼女の髪が揺れた。

「切るのが面倒臭いだけ。あんただって、立派なもんを持ってるじゃん」

「白髪って言ったのは、どこの誰でしたっけ？」

「あたしは褒めてんの。あんたほど真っ白なやつはめったにいないから」

あまり褒められている感じがしない。どうしてもユキコの言葉には棘があるように思えてしまう。まあ、普段からこういう喋り方をしているから、仕方がないのかもしれない。私は自分をそう納得させて、紙袋の中からワインの瓶を取り出した。

「まあ、その話は置いといて、飲みましょ」

「ここで飲むの？」

「そうだけど」

私はチラリとユキコの眼を見た。彼女の眉の間に、深い皺が寄っていた。しかも、眉がピクリピクリと動いている。これは面倒なことになった、と私は思った。今日はどうにも彼女の虫の居所が悪い。なにかあったんだろうか？

「ここじゃ、風が当たって寒い。他のところで飲む」

彼女はそう言うと、パイと私に背を向けて歩き始めた。私は鼻から息を出して、唇を舐めた。はいはい、あなたは言ったことを意地でも曲げようとしませんもんね。私は心の中でそう呟きながら、紙袋をつかんだ。

まったく、世話が焼ける。

＊

「そういえば、あなたが来る前にサイレンが聞こえたわ」

「どーせまた、旧人至上主義者が新人解放派を私刑にしたんでしょ。この化け物め！ とか、社会の害虫め！ とか言いながら」

私たちは取り留めもない雑談をしながら、人気のない大通りを歩いた。車もまったく通らない。野良猫ぐらい出てくるかと思ったけども、それもない。商店にはすべてシャッターが降りている。まるで、世界が滅亡した後の街をユキコと私の二人つきりで、散歩しているみたいだった。

「なにニヤニヤしてんの。気持ち悪い」

「別に、なんでもないわよ」

私はそっぽを向いて、ごまかした。こういう状況をロマンチックだと思う感性は、残念ながらユキコには備わっていない。きっと、この後飲むワインやビールの味を想像しているに違いない。私はそんなことを考えながら、廃ビルで聞きそびれたことがあるのを思い出した。

「ねえ、ユキコ。そういえば聞き忘れてたんだけど」

「ん？」

「私たちはどこに向かっているのかしら」

ユキコは首から下げたお面を揺らしながら、こう答えた。

「それは着いてからのお楽しみ」

「あら、もったいぶるのね」

「ちょっとしたクイズ。さて、あたしたちは、どこへ行くのでしょうか？」

ユキコは通せんぼするみたいに、ヒョイと私の前に立ちはだかった。お面が左右に揺れた。彼女の顔には、猫によく似た意地悪な笑いが浮かんでいた。私は反応に困って、自分の頬を搔いた。こういうしぐさをすると、彼女は妙に幼く見える。

「ヒントなしじゃ、さすがに……」

「それじゃあ、面白くないじゃん！ 何度でもお手つきしていいから、さっ、答えた答えた」

「無茶苦茶ね」

私はユキコにそう答えておいて、歩道に建っている街灯を見上げた。蛾が灯りに群がって、クルクルと回っている。その動きが、さっきの彼女のしぐさと重なって、ダンスをしているように見えた。……

私は上のほうを見上げたまま、大きなため息をついた。どうにも余計なことばかり思いつく。たぶん、真面目に考えていない証拠だ。ただ、マトモじゃないところに連れて行かれそうだと、いう予感はある。彼女の性格からして。

ふと、ユキコのほうへ視線を戻した拍子に、あるものが目に入った。私は答えにしようとした言

葉を飲み込んだ。

「なに黙ってんの？ そんな馬鹿正直に考えるもん？ これ」

そう言いながら、ユキコは後ろを振り返った。目聡い彼女のことだ。私が彼女の後ろが気になっていることに、感づかないはずがない。私はまた、ため息をついた。やっかいな問題が出てきてしまった。頭が痛い。

私はユキコの顔をそっと覗き込んだ。彼女の表情がさっきとは、ガラリと変わっていた。

ユキコの顔から、表情が消えていた。こういうとき、彼女がどういう感情を持っているか、私は知っている。

最上級の嫌悪と軽蔑。

ユキコがそういう態度を見せるものはいくつもあるけれど、と思いながら、私は彼女の視線を追って振り返った。そして、なるほどと納得した。

私たちのほうへ向かって、男が三人歩いて来る。

ユキコの地球上で一番嫌いなものは、男だった。特に私たちの前を歩いて来る、バサラの恰好をした若い男は大嫌いだった。

「落ち着いて。ユキコ。深呼吸して」

私は彼女の耳元でそう囁いた。嫌いな人間に出会ったとき、彼女がすることは決まっている。こういう場面に、私は何度出くわしたか分からない。

ユキコはジロリと私を睨みつけると、鼻を鳴らした。私はそれを見て少しだけ安心した。嘲笑うことができるなら、私を押しつけて走り出す、なんてことはない。きっと、まだ大丈夫だ。

「うん、分かってる」

ユキコは唸るように、低い声でそう呟いた。そして、私の先に立って歩き出した。私は紙袋を抱え直しながら、彼女の後を追った。

近づくにつれて、男たちの下品な声が大きくなった。まだ、彼らがどんなことを話しているのか、聞き取ることはできなかった。どうか、ユキコの神経を逆撫でするようなことを言いませんように、と私は願った。

男たちは、お互いにゲラゲラと笑い合いながら、こっちがうるさいと感じる勢いでしゃべっている。私は足早に進むユキコのうなじを見ながら、このままいけば何事もなく通り過ぎることができるだろう、と思った。

私たちと男たちは、半分消えかかった街灯の下ですれ違った。酔っているのか、男たちの頬は赤かった。

男たちは、あっという間に私の視界から消えた。横に三人並んだうちの、真ん中にある男がユキコをチラリと見た気がした。でも、それも一瞬のことで、私の気のせいかもしれなかった。

私が心の底から安心したときだった。

「サチプロさん、今夜空いてる？」

笑いを含んだ男の声がした。ユキコがピタリと足を止めた。

ああ、なんてことをしてくれたのだろう！ 男って、やっぱり馬鹿だ！ 私は胸の中で男たちを罵った。彼女はくると身体を回転させて、男たちのほうへ走り出した。私が止める暇もなかった。

街灯の弱弱しい光に照らされたユキコの顔は、ぞっとするほど魅力的だった。唇を適度に曲げ、目尻をこれでもかと下げる。彼女の纏う哀しさが、妖しさに変わる。そして、首をほんの少し傾け走るのだ。これで目を奪われない男なんて、いるんだろうか？ 同性の私でさえ、ギクリとした。

私も、彼女につられる形で歩き出した。いつものように、尻拭いしなければならないようだ。「ねーお兄さん。一緒に遊ばない？」

ユキコは男たちの許へ駆け寄ると、そんなことを言った。彼らは冗談が本当になってびっくりしたという顔をしながら、思う存分鼻の下を伸ばしていた。

かわいそうに。私は心の中で呟いた。

「マジで！　じゃあこれから俺のウチに行こうぜ」

三人のうちで、一番背の高い男がそう言った。その言葉に対して、ユキコは大きく首を縦に振った。あざとい、けれども可愛らしいしぐさだった。男たちから歓声が上がった。もう、彼女の手のひらのうえだ。私は彼女の少し離れたところで立ち止まって、男たちと彼女を眺めた。そして、この後起こるであろうことを想像した。

どうか、自分の得物を取り出さないでほしい。

「あっ！　一つお願いがあるんだけど、いいかな？」

「いいぜ！　なんでも来いよ！」

ユキコは満面の笑みを浮かべた。あの不機嫌な顔は、どこに行ったんだろう。

「ありがとう！」

ユキコの声は弾んでいた。私は、彼女が右足をほんの少し引くのを見た。それで私は察することができた。

「じゃあ、遠慮なく！」

その台詞が合図だった。

鈍い音がして、ユキコの右足が男の股間に喰いこんだ。低い呻き声が耳に響いた。男は自分の大事な部分を押さえながら、歩道に倒れ込んだ。

やっぱりこうなる。私はそう呟いて歩き出す。次にどうなるかなんて、決まっている。私は彼女の手を、視線を送った。

案の定、ユキコの両手にベレッタM92-PFが握られていた。

ベレッタの銃口は、残った二人の額に向けられていた。彼らは口が利けなくなったかのように、黙り込んでいた。当然だ。誰だって、いきなり脳天に銃を突きつけられれば、頭が真っ白になるだろう。

男たちはノロノロと両手を上げた。

「なーんだ。こんなにフニャフニャだなんて、がっかりだなあ」

私はユキコの隣に並んで、彼女の顔を覗き込んだ。相変わらず、妖しい笑みを浮かべたままだった。これを信じたのが、運の尽き。自業自得というものだろう、と私は思った。

ゴリという、地面となにかが擦れる音がした。自分の足元を見ると、股間を蹴られた男の頭のうえに、ユキコのブーツが載っていた。まあ、これも当然だ。その男の口と眼は、痛みと恐怖で歪んでいた。

「これじゃ、てんでお話しにならないよ。あんたたち、本当に付いてるの？」

ユキコの強烈な台詞が、男たちに突き刺さった。

私は棒立ちになっている男たちに目をやった。彼らは小刻みに身体を震わせていた。怖いんだろうな。ひよっとすると、人生最大の恐怖を味わっているのかもしれない。

また、ゴリゴリという音がする。

「あーなんだかイライラしてきたなー撃ちやおうかなーどうしようかなーあたし」

「そろそろ勘弁してやりなさいよ」

私はそう言ってユキコの肩を叩いた。もうそろそろ我慢の限界だった。茶番は終わりにしよう

。「えーあたしのことをサチプロって呼んだからには、こいつらには死んでもらわなきゃ」

「今にも漏らしそうなぐらい震えてるわ。もう十分よ」

ユキコは横目で私をちらりと見た。これもお決まりのパターンだ。私は黙って彼女の顔に目配せをした。彼女の顔から笑みが消えた。逆に、男たちの顔は青くなった。

「仕方ないなあ。この優しい軍人さんに免じて、今回は許してあげる」

そう言いながら、ユキコは大袈裟に肩をすくめた。彼女の言葉を聞いた途端に、男たちの身体から力が抜けていくのが分かった。余裕があったら、たぶん彼らは笑い出していただろう。私はそう思った。

でも、安心するのはまだ早い。ユキコは銃を構えたまま、下ろそうとしなかった。私は嫌な予感がした。

「でも、これだけはあんたたちに言うておく」

ユキコの台詞には、悪意があった。その証拠に、彼女は男たちに向かって鮮やかな足払いを喰らわせた。彼らは無様に地面に頭を打ちつけた。残念なことに、私の予感は当たってしまった。

ユキコはのたうちまわる男たちを見下ろしながら、両手にある拳銃をぐるりと一回転させた。回った拳銃は、音もなく彼女の手の中に吸い込まれて、消えた。

そういえば、この男たちは〈新人〉と〈旧人〉、どっちの人間なんだろう？ 私たちのように、身体のなかに〈兵器〉を抱えている〈新人〉は、そんなにはいない。

まあ、結果はどちらにしたって、変わらないのだけれど。

「ガキがいい気になってんじゃねえよ」

ユキコはドスの利いた声で、そう吐き捨てた。もしも男たちが「サチプロ」以上に女性を辱しめる言葉を口にしていたら、これだけでは済まなかったかもしれない。

ユキコはしゃがんで、さっきまで足で踏んでいた男に顔を寄せた。そして、こう言った。

「このクソ野郎」

ユキコの中指が誇らしげに立っていた。

私は額を押さえて息を吐いた。

＊

今日は晴れているせいか、星がよく見える。特に、穴の開いた屋根から見ると、完全にプラネタリウムだ。

「星がきれい」

私がそう呟くと、ユキコはあからさまに馬鹿にしている口調で、こんなことを言った。

「まーたティアのロマン趣味が始まった」

「いいじゃない。ロマンを感じることの、どこが悪いのかしら？」

「私は悪いつて言いたいじゃない。無駄だつて言いたい」

「どこが無駄なのよ？」

「星を見たって、腹の足しにならない」

ユキコは足元にあったビール瓶を蹴飛ばした。瓶は部屋の隅のほうへ転がって、埃まみれの椅子に当たって止まった。

そういえば自分が座っている椅子も、今にもバラバラになりそうなものだった。ちょっとだけ不安になったが、その不安はすぐに消えた。頭に霞がかかったみたいに、ぼんやりしている。どうやら酔いが廻って来たらしい。

もう、酒はすっかりなくなっていた。



「話は変わるんだけど、ユキコはどうしてここで飲もうと思ったのかしら？ とっても気になるんだけど」

「誰も来なくて、静か」

「でも、そうは言っても元々は施設よ。ここは」

「廃墟になったら、元がなんだって、関係ない」

そう言って、ユキコはビスケットをつまみ、口に放り込んだ。なんだか、彼女の言葉にごまかしがあると感じるのは、私の気のせいなんだろうか？ 思い出したくない、暗い記憶が詰まったこの施設で、酒を飲みたいなんて思うのだろうか？

なにか目的があるんじゃないかと、深読みしてもあながち間違いではない気がする。私はビスケットを頬張るユキコを眺めながら、彼女にこう問いかけた。

「この部屋って、確か食堂だったわよね」

「あんたが変態に犯されそうになった部屋」

「そう、ユキコがその変態さんを撃ち抜いた部屋でもあるわね」

「まあ、運が良かったなあ。あのときは」

「ユキコにしては、ずいぶん謙虚ね」

「あたしは嘘が嫌いなんだ。知ってるでしょ」

ユキコは足を組んで、背もたれに寄りかかった。椅子がギィと音を立てて軋んだ。やっぱり、今にも壊れそうだ。

「あの後、二人してお仕置き部屋に放り込まれたのよね」

私はコンクリートの床と壁しかない、灰色の部屋を思い出していた。あの部屋は床が冷たくて寒かったことを、私は憶えている。しかも、二十四時間監視がついていた。

とにかく、私やユキコにとって、地獄部屋であったことは間違いない。

「そのうえ、三日間食事抜きだった」

私はそう呟いて、自分のお腹をさすった。あのときは空腹のせいで本気で死ぬかと思った。私の呟きを聞いて、ユキコが唇をへの字に曲げた。

「ああもう！ あんたがいろいろ言うから、あたしまで嫌なことを思い出しちゃったじゃん！」

ユキコは立ち上がって、私の目の前で行ったり来たりし始めた。彼女は酔っばらうと、よくこんなことをする。私は興奮を抑えるための、一種の治療法なのだと解釈している。

「……なにか気分をこう、パツと明るくすることはないもんか……これじゃ、ガキの頃と同じだ……暗くて反吐が出そうだ」

独り言を呟きながら歩き回るユキコの姿が面白くて、私はついつい吹き出してしまった。なんだか、からくり人形みたいだ。

そう考えた途端に、頭の中にあることが閃いた。

「ねえ、ユキコ。ダンスをしましょう」

彼女はピタリと歩くのを止め、あぐりと口を開けて私を見た。とても分かりやすい反応だった。まさしく、これぞ驚きの表情だ。私はそんな表情をあえて無視して、彼女に向かって手を差し伸べた。

「Shall we dance？」

「一体あんた、どうしたの？」

「私にもどうしてか分からないのよ。ただ、無性に踊りたくなっちゃって」

「それ、答えになってない」

ユキコは顔をしかめた。彼女がこういう女っぽいものを嫌がるのは、初めてのことじゃない。むしろ、いつものことだ。私はなるべく明るい声で、彼女を誘った。

「まあ、ちょっとした酔い覚ましみたいなものよ」

「かえってつぶれるじゃん。身体を動かすと」

「今身体を動かさないと、きつとここで寝ちゃうわ」

「そんなにあたしは弱くない」

なかなかユキコはうんと言ってくれなかった。まあ、当たり前と言えども当たり前だ。彼女はダンスなんて、金持ちの遊び程度にしか考えていない。普通なら、とっくに私はダンスを諦めているだろう。

でも、私はユキコを肯かせるための、魔法の呪文を持っている。呪文はとっても簡単だ。こう言えばいい。

「じゃあ、踊るか踊らないか、賭けで決めましょ」

ユキコの眼つきが変わった。不機嫌そうなところはそのまま、どこか物憂いところが消し飛んで、銃を握ったときのように鋭くなった。彼女は〈外敵〉に対して強い癖に、〈賭け〉という言葉にめっぽう弱い。

「ティア、賭けの方法は？」

「コイントスなんてどうかしら？」

「ぴったりだ」

私は財布から十円玉を取り出して、手のひらに載せた。ユキコはそれをじっと見ていた。なんだか急に恥ずかしくなって、私は彼女に何度もいろいろなことを尋ねた。

「あなたは裏と表、どっちに賭ける？」

「裏」

「じゃあ、私は表ね。私が勝ったら、一緒に踊ってもらおうわよ」

「上等」

ユキコは眼を細めて、コインを見つめた。私は彼女に対してコインにちゃんと裏表があることを示して、慎重にコインを人差し指に載せた。ここで失敗して、彼女の機嫌を損ねたくはなかった。私も、彼女も、勝負に声は必要ないと言わんばかりに、黙り込んでいた。

「では！」

私はそう言って、親指でコインを弾いた。キンという気持ちの良い音がして、コインが宙に浮かんで、手の甲に着地した。私はゆっくりと、右手を覆っている左手をずらしていった。

ユキコがコインにグツと顔を近づけた。

コインは表だった。

私は微笑みを作って、ユキコに向けてこう言った。

「私の勝ちね。さあ、手を出して」

私はユキコに向けて右手を差し出した。彼女はさらに不機嫌そうな表情になって、凶暴と言え

なくもない顔になっていた。

私はちょっと強引だったかもしれないと考えた。けれども、ユキコと一緒に踊ることがうれしくて、頭がいっぱいだった。この施設にいるときに、辛いことから逃げるために、楠木の下でいつも彼女と踊っていた。

「木の下で踊ったあれは憶えてる？」

「もう忘れた」

そう言いつつ、ユキコは私の右手に、自分の左手を添えてくれた。私はケータイを取り出して、ダンスに合いそうな曲を探して、再生ボタンを押した。

私が選んだのは、無名の作曲家が創ったピアノソナタだった。

「ユキコはなんでもいいから自由に踊って。私がそれに合わせるから」

「へえ。なんでも、か」

「なんか含みのある言い方ね」

「別に、なにも考えてない」

こうユキコが言ったとき、彼女の眼に影みたいなものが差し込んだ。それは一瞬ことだったけれども、私は見逃さなかった。悪意でもなく皮肉でもない、影。この影が出てくると、私は彼女の考えていることが分からなくなる。ただ、なにか企んでいるのかもしれないという気はするのだが。……

ユキコはなにも言わずに、手を繋いだまま私の周りをぐるぐると回り始めた。即席のメリーゴーランドだった。

回るスピードが、じょじょに速くなっていった。私はユキコがなにか仕掛けて来るんじゃないかと、ぼんやりと思った。一体なにが起こるのか、見当もつかないけれど。

だんだん、眼が回って来た。ユキコの顔の輪郭が滲んで、水玉模様のようにになった。彼女が今どんな表情を浮かべているのか、分からなくなった。

でも、私はどういう訳だか彼女が笑っているような気がした。

そう考えたとき、自分の足になにかが引っかかって、私は身体のバランスを崩した。してやられた、と思ってももう遅い。できることと言えば、繋いだ手を強く握りしめて、ユキコを道連れにすることぐらいだ。

私は見事に背中から倒れていった。視界の隅を黒いものが横切った。私の訓練された闘争本能が、左手からグロック42Lを突き出させた。

ユキコの手のうちで踊るのは、どうしても癩に触るのだ。

背中が派手に床にぶつかり、埃が舞い上がった。ぶつかったおかげで、逆に眼が元に戻って、ユキコの顔をはっきりと見ることができた。

倒れた拍子に、ユキコは私のう上に馬乗りになっていた。たがら、私は彼女の顔を見上げた。彼女は片眉をつり上げて、眼を見開いていた。ただでさえ大きな眼が、隅々までよく見えた。

猫の眼だ、と私は思った。

私とユキコは、お互いの首筋に銃口を向けていた。

私はユキコの眼をじっと見つめた。鳶色の瞳は、こっちが眩しくなるほど澄んでいた。彼女の

瞳は、弾道を思わせるほど、真っ直ぐだった。

これも一つの賭けに違いない。ユキコの純粋な、あまりに純粋な眼に私が耐えられるか、否か。私の眼はユキコの眼と比べると、あまりにも曇っている。輪郭がぼやけてしまうほど。だから、彼女の眼に耐えられる自信はなかった。

ふと、私は犬の眼をしているんじゃないか、という考えが頭の隅を横切った。それで、もうダメだった。私はユキコの眼をまともに見ることができなくなった。

私は賭けに負けたのだ。

私は腕の力を抜いて、銃を下ろした。ユキコは眼を細めて、私の隣にゴロリと横になった。そして、こんなことを言った。

「ちょっとは学習したら？ あんたはいつも詰めが甘い」

「そうね、ユキコは怪物だわ」

「ひどいこと言ってくれるじゃん」

ユキコはそう言って笑うと、右手の人差し指と親指を立てて、天井に向けて腕を伸ばした。

天井にぽっかり空いた穴から、相変わらず星が覗いていた。

「バンバンバン！」

ユキコはどこか投げやりな声で、空に浮かんだ星を撃った。正確に流れ続けるピアノソナタが、妙に彼女に似合っていた。私も左手の指を立てて、星に向かって構えた。

私の手の甲が、ユキコのそれに触れた。

「バンバンバン！」

彼女の声が、かつて私たちの〈家〉だった廃屋に響き渡った。それに合わせて、身体に溜まった澱を吐き出すように、私も声を出した。

「バンバンバン！」

「バンバンバン！」

「バンバンバン！」

私とユキコの声はごちゃごちゃになって、どっちが今なにを言っているのか分からなくなった。でも、なんだか彼女の中に入り込めた気がして、とてもうれしかった。

いつか、私とユキコで一緒に星を撃ち抜いたら、どんなに素敵なことだろうか。

私はそう考えて、一人で微笑んだ。

〈終劇〉

筆筒集（一）

惇 暉

塵（三）

今日から犬になる。  
両目が潰れた醜い犬だ。  
喰うことしか頭のない駄犬だ。  
こんな犬は誰も欲しがらない。  
さっさと処分したほうが得策だ。  
きっとみんなそう思うに違いない。  
だから犬は吠えながら逃げるのだ。

塵（四）

どうですか水は必要ですか？  
どうですか肉は必要ですか？  
どうですか家は必要ですか？  
どうですか紙幣は必要ですか？  
どうですかペンは必要ですか？  
どうですかノートは必要ですか？  
どうですかテレビは必要ですか？  
どうですか車は必要ですか？  
どうですか音楽は必要ですか？  
どうですか戦車は必要ですか？  
どうですか原子爆弾は必要ですか？  
どうですか腐った恋は必要ですか？

S.Aから覗いた世界

もう踊るしかない。踊って身体を燃やすのだ。  
見るものすべてに火を付けるのだ。  
もしくは自分の拳で壊すのだ。  
もしくは自分の腕で奪うのだ。  
泥の中に飛び込んで堂々と死んでやろう。  
笑って死ぬなら本望だ。  
死に損なったらピエロになろう。  
ピエロが一番楽な仕事だ。

立って眺めるだけでいい。

### 無頼漢

兵士は歩く。線路のうえを。

兵士は歌う。友を。

兵士は登る。壁を。

兵士は語る。お伽話を。

兵士は笑う。死体を。

兵士は眠る。神を。

兵士は泣く。女を。

兵士は抱く。旗を。

兵士は気付く。

己が骸だということに。

### 爆弾

どこかの老人が言ったのさ。

世界で一番強い武器は不細工な時限爆弾だと。

かつては誰でも持っているもの。

今はひねくれた人間しか持っていないもの。

爆弾はただのきれいな箱になってしまった。

パルチザンを呼び戻せ。

### 宿命の女

巫女は詠う。永遠の生命を。

大きな背中を晒して神を語る。

紅い唇が光って心を失う。

男なんぞが入る隙間なんてありやしない。

### 会話

ありもしない嘘に聞き耳を立てる。

もっともらしい嘘には耳を塞ぐ。

なんてありがたいことだ！

好きなものを切り捨てられるぞ！

万歳三唱。

拍手喝采。

薬を飲んで溺死しろ。

## 平行作業

どれが本物か分からない。  
ここに愚劣は極まった。  
玩具を投げて飛びつくだろう。  
屋台に押し潰される。  
捻れ捻れ捻れ捻れ。  
草木にすでに根はない。  
そこに純粋な水があったでしょうに。  
沼に逆立ちでもしましょうか。

## 限りなく説明に近い歌

恋人はすでに去り使わなかった写真が残る。捕まえた鶏の首を伐り庭に埋める。その血は次の便器になる。錆びた箸と皿を飲み込んで目玉が飛び出す。お一つ屁をあげましょう。瓦斯自殺にもってこいだ。身体中にできた勃起を鎮めるために猫に喰わせよう。さようなら固まった脳味噌よ。

## 廃墟

黒い帽子が詰まっている。  
中には名前が詰まっている。  
どれも面白くない。

どうして磨いてやらないのだ？

## 神様恋物語（片西 結月）

---

神様恋物語

片西 結月

「はあ……」

小さなお社の縁側に座り、後ろに手をつきながら空を眺める。鳥居の間から覗く夕日は少しずつ赤くなり始めている。階段を上ってくる時には日に照らされてその赤色を主張していた木々は、境内にその黒い影を長く伸ばしていて、今、赤く見えるのは空と目を焼くような夕日ばかりだ。

「なんであーちゃんちが、ウチの隣なんだろう……。帰りたくないなあ……」

溜息と共にひとりごちる。そのままゴロっと寝転がり、地面に着かない足をプラプラさせる。

「はあ……」

もう一度溜め息をつき、疲れてしまった足を止め、左側を向く。

「あ」

目があった。夕日に照らされ透けるように光る琥珀色の体毛と、顔の下半分を白い毛で覆われたものと目があった。目元には黒い点。木々の合間から、こちらの様子を窺うように顔をのぞかせている。

「おまえかー、おいで」

頬が緩むのを感じながら上体を起こし、持ってきていた袋の中からリンゴを取り出す。服で表面を磨き、動物の方へと差し出す。

「今日のおやつ、お前のためにとっておいたんだぞ」

動物はやや警戒するような視線を向けながらも近寄ってくる。リンゴを縁側に置くと、そばまで来た動物は前足で器用に押さえつけながら、そのリンゴに齧り付く。食べ始めた様子を見ながら、その頭に手をやり、毛並みに沿って撫でる。動物は特に気にしないという風でリンゴに齧り付いたままだ。

「あのね、コン。またあーちゃんがひどいんだよ？」

頭を撫でながら話しかける。いつの間にかリンゴはなくなっているようだが、動物は嫌がる様子もなくされるがままである。

「今日もね、僕が家にいたらあーちゃんが突然入ってきてきー」

「あー、ひろくん、こんなところにいたー」

階段の方から突然聞こえた声に、バツと振り向く。鳥居の間からのぞく真っ赤になった夕日を遮るように、まっ黒な影が立っている。ああ、あれは……。

「男の子がお狐様に入っちゃいけないんだー」

影が笑うように歪んだ。



ガクン。

頭の支えがなくなり、驚きから一気に目が覚める。窓枠に肘をついたまま支えにしていた腕の感覚が無い。しばらくはこのままにしておかないといけなさそうだ。

ガタンゴトン。規則的な音と共に体を揺すられる。自分のいるボックス席から首を伸ばして周りを見回す。相変わらず人が乗っていないガランとした車内。使い込まれた痕が残る吊革。真新しい広告だけが誰の目にも触れずに電車でのマナーを訴えている。ああ、僕の目には触れているわけか。

腰をおろして窓の外に目をやると、一面に黄金色の海が風になびかれてたゆたっている。目をこらせば、稲穂の一本一本が一齐に揺らいているのだということが見てとれる。遠くには赤く黄色く色づいた山並みが薄く青く澄んだ空とコントラストをなしている。

見慣れた人ごみ、灰色の街並みから解放されたような気分になり、深くため息をつく。

しかし、いきなり祖父が亡くなったと言われても、なんだか全く感慨が湧いてこない。最後に祖父を見たのはいつのことだったのだろうか。確か小学校に上がった頃にはこっちを離れてしまっていて、それからは一度も連れて来てもらったことはなかったのではないだろうか。そういえば、さっきはなんだか懐かしい夢を見ていたような気がする。懐かしさだけが胸に残っていて、内容は手元からこぼれ落ちてしまったように思い出せない。ただただ、暖かい気持ちだけが残っている。

— \* —

空が赤く染まり始めた頃、僕を乗せた列車はひなびた駅に到着した。短いホームがたった一つしかない。ホームに降り立って大きく息を吸うと、澄んだ冷たい空気が肺に入ってきて心地よい。この駅はこんなに小さかったらどうかと見回しながら、改札窓口に立ってくれた駅員に切符を渡し、外へと出た。

あれ？ 外へ出るとロータリーもバス停もタクシーもない。目の前には左右を背の高い山吹色の稲穂に囲まれた道が真っ直ぐに伸びているだけ。山の麓には稲穂の間からいくつか集落が生えているように見える。

「ここから歩かなきゃいけないの……？」

今朝、突然かかってきた電話で、母親に「おじいちゃんが亡くなったの。あなたが小さい時にはすごく可愛がってもらってたんだから、ちょっと帰ってきてお葬式くらい顔出しなさい」と言われ、慌てて大学に忌引きの届を出し、乗り換えを調べながら電車を乗り継いで来た。来てみたはいいものの、駅からこんなに離れてるなんて聞いてない。スマホを取り出して迎えを呼ぼうとしたが、表示されるのは圏外の文字。

「はあ……」

— \* —

意を決して歩き出してみると、やっぱり遠い。まだ歩き出して5分ほどしか経っていないが、集落に近付いている気がなくて、心が折れそうになる。普段大学とアパートの行き来くらいしかしてないモヤシっ子としては、正直つらい。

「ん……？」

落ち込んでいると、田んぼの上を流れてくる気持ちのいい風にまぎれて、ガサガサという音が聞こえている気がした。いや聞こえている、というか近づいている。

うつ向き気味だった視線を、音のする方、右の田んぼへと向けると、近くで何かがかき分けて動いているように稲穂が揺れている。警戒半分興味半分でその動きを追っていると、それはすぐ前方の道へと迫り……、稲の間から山吹色の毛で覆われた顔が飛び出した。

「……狐？」

シュッと鋭いような輪郭に、山吹色の体毛、顔の下半分は白い毛で覆われ、黒い毛の小さな斑点が目元にある。それは確かに狐だった。

狐……なんてこの辺にいるんだな。まあこんなに山のすぐ近くなら、不思議でもないのか。

稲間から顔を覗かせた狐は、なんだか匂いを嗅いでいるかのように鼻が動いていた。キョロキョロと左右を見て、こちらに気付くと少しだけ視線を上げ……、目があつた。

「なあ」

話しかけようと一歩踏み出した直後、狐は慌てた様子で稲の海の中へと戻ってしまい、少しだけガサガサと稲が揺れた後、どこへ行ったのか全く分からなくなってしまった。

「……えー」

思わず声が出る。ちょっと近寄ろうとしただけなのに、あんなに拒否されると寂しい。伸ばしかけた腕を戻して、肩にかけた荷物をかけ直す。もう一度集落の方へ足を踏み出して、ふと思う。

……なんで僕は、動物に話しかけようとしたんだろう？

— \* —

空の色がより深みの増した赤色になった頃、一本道を無心に歩いてやっと集落までたどり着いた。

ここまで来ると、さすがにどこか見覚えがある。生垣に囲まれた家や石垣の上のやや高低差のある家。確かあの生垣を突っ切ろうとして怒られたこともあったっけ。おぼろげながらも小さい頃の記憶が蘇り、ひどく感傷的な気分になる。

さらに少し歩くと白と黒の幕が目に入る。塀越しに中を覗くと2階建ての広い家が見えた。幼い頃にしか見ていなかったため、てっきり小さく感じるかと思っていたが、十分に大きく感じられた。蔵まである。記憶が遠いせいもあって、普段狭いアパートに押し込められて生活している自分がひどく場違いな存在に思えた。

『稲宮』と書かれた表札のついた門柱の間を通り、玄関へと続く飛び石を辿る。玄関には見慣れた背中があつた。

「父さん、ちゃんと来たよ。駅からこんなに遠いなら迎えくらい寄こしてくれたっていいと思うんだけどなー」

その背中にやや恨みがましく声をかけると、慌てたようにバツとこちらを振り向いた。こちらを向いた父の表情は非常に驚いた顔をしていた。

「あれ、どうし——」

「おまえ、なんで来た!？」

突然大声で怒鳴られ思わず一步後ろに下がる。わけがわからない。

「え、なんでって……、じいちゃんが亡くなったから葬式くらい参加しろって、母さんが……」

普段あまり怒鳴ることのない父に気押されながらも、今朝のことを話す。僕の答えを聞いた父はひどく苛立っているようだった。

「……親父のことは寛忠には伝えなくていいってあれだけ念を押したのに……」

「えっと……父さん？ どうしたの？」

苛立ちながら考え込んでしまった父に、わからないながらも、これ以上気に障られないよう気を付けながら、おそるおそる話しかける。

改めてこちらを見た父は僕がやや怯え気味であることに初めて気付いたようで、ハツとした表情をした後にややバツの悪そうな表情をする。

「……すまん、ちょっと驚いたんだ。おまえには何も言ってなかったな」

頭を掻いた後に、父は居住まいを正して僕に向き直る。落ち着いてくれたようでよかった。

「おまえが小さい頃にここを引っ越してから、一度もここにおまえを連れてきたことがなかっただろう？ 実は理由があつてだな——」

「おめえ、寛忠か!？」

今度は名前付きで突然怒鳴られ、びくっと肩が跳ねる。父の様子で気が緩んだばかりだったせいでなおさら心臓に悪い。

「おめえ、なして言いつけ守れねえ!？ 忠志、おめえもだ、なして連れてきてんだ!？ 父ちゃんの言葉、忘っただのか!!」

怒鳴り声のした方、父の背後に目をやると、玄関の段の上に、どこか疲れた様子の年老いた女性が、気を張ったように背筋を伸ばして立っていた。おぼろげな記憶よりも幾分老けこんではいるが、それが祖母であることが分かった。僕と一緒に祖母に名前を呼ばれた父は弱ったといったような表情で振り返る。

「……ばあちゃん、実は——」

「寛忠は私が呼ばせていただきました」

玄関の奥から、また父の言葉に被せるように声がする。母の声だ。見ると奥から歩いてくるようだ。

「小さい頃にあんなにお世話になったんですもの、寛忠もおじいさんのお葬式に参列するべきだと思って連絡したんです——」

「父ちゃんはそんなこと望んでねえ!! 父ちゃんがどれだけ必死に寛忠を守ろうとしてたのか、おめえさんも見てただろ!？」

母の言葉に喰らいつくように祖母は言葉をぶつける。横から見ていて心配になるくらい頭に血が上っているようだ。

「お言葉ですが」

非常に感情的な祖母とは対照的に母はどこまでも冷静に言葉を返す。

「あんな迷信、信じていませんので」

母はどこか嘲るような雰囲気を含みながら言葉を投げる。

「神が人を連れて行ったりなんてしませんよ、絶対。おおかた山で誰かが迷ってしまったのを大げさに話したことに、尾ひれがついて伝わっただけでしょう？」

母の言葉を聞いた祖母はさらに顔を赤くする。

「父ちゃんを……、この村をバカにするのか!!」

母にそう怒鳴りつけ、祖母は家の中へと下がっていった。その背中では語調の強さが虚勢であることを示すように寂しげであった。

「えっと……、僕、来ちゃいけなかった？」

僕の手の届かないところで、わけがわからないままに嵐は過ぎ去ったようだが、気が立った人間はいつ感情が再燃するかわからない。この場に残った父と母におそるおそる窺うように尋ねる。

「そんなことないわ。孫がお世話になった祖父のお葬式に参列しただけ。どこにもおかしいところなんかないもの」

ふう、と軽くため息をついた母は僕に向き直り答える。僕の目の前では父が疲れたような顔をしている。もうどうにでもなれといった顔だ。

「それより寛忠、そんなところに突っ立ってないで、中に上がって荷物を置いたら？ 駅から歩いて来て疲れたんじゃないの？」

母に改めて言われ、歩いてきたのだということを意識した途端にドツと疲れが襲ってきた。ああ、荷物をかけている肩が辛い。

— \* —

空いている部屋の一つをあてがわれ荷物を下ろす。さっきのことについて詳しい話を母から聞こうとしたが、ばかばかしい話よ、と言われた上で、今は忙しいから、とあしらわれてしまった。

手を合わせていらっしやい、と母に広間へと連れて来られ、母はそのままパタパタと廊下を行ってしまった。

ゆっくりと障子戸を開くと、そこには薄暗い中で納棺された祖父がいた。その顔を見るとうっすらとだが記憶が蘇ってくる。にこにことした表情で祖父のごつごつと骨ばった手で撫でてもらうのが、少し痛くはあるが無性に嬉しかった。

幼い頃に会っただけで、ずっと顔を見てこなかったことに急に胸が苦しくなり、目頭が熱くなり出す。

「ただいま」

祖父に向けてそう言ってから、一度手を合わせ広間を後にした。

— \* —

心に湧いてきた懐かしさに突き動かされるように、僕は外へと出た。お通夜までは好きにしてい  
ていいと言われたため、外を散歩することにした。

改めて周囲を見て歩くと記憶が少しずつよみがえってくる。

あその家のおばちゃんには何かにつけてよく怒られてたっけ。誰かの隣で、僕は悪くないの  
って思いながらお説教を聞いてた気がする。

あの家の犬によく吠えられてたなあ。いたずらをした時に首輪が鎖に繋がれていなくて、必死に  
逃げたこともあった。……なんで僕はしたくもない、いたずらをしていたんだろ？

もう沈みかけている夕日に照らされて赤く黒ずんだ町並みを進んでいると、すぐ目の前には山。  
村の外れに出たようだった。

引き返そうとした時、道の先、木々に覆われた山肌に一部途切れがあるようだった。何か心に引  
っ掛かりを覚え、よく見てみると、それは古ぼけた鳥居とその奥にある山を登る階段だった。

「こんな村の外れに、神社……？」

なんだか逃げ出したいような気持ちになりながらも、同時に上っていきたい気持ちが湧き上  
がり、一步一步階段を上る。すごく古そうなわりには基本的によく整備された石段のようだ。周  
囲の木々から落ちた暖色の葉が、灰色の彩りを加えている。

しばらくすると石段の先に鳥居が見え始めた。なんだか既視感を覚える。……この石段を僕は  
よく上っていたのだろうか。

「はあ……」

最上段までたどり着くと、その光景に思わずため息がこぼれた。むき出しの地面の中央にこじ  
んまりとした石畳の参道があり、左手には小さな手水場。正面には小さなお社があった。背後か  
ら射す夕日に照らされ、全てが赤く染まっている。

さすがに思い出した。僕はよくここに来ていた。何か嫌なことがある度にここに逃げ込み……  
、何かに話しかけて、愚痴を聞いてもらって元気をもらっていた。郷愁を覚え、胸の辺りがじん  
わりと暖くなる。

確か、子供は、男の子はここに入ってきちゃいけないという決まりもあった気がする。理  
由は……、なんでだっただろうか……？ とにかくそのおかげでここにはあまり人が近寄らず、  
一人になるにはうってつけの場所だったのだ。

ゆっくりとお社へと近づく。石段で少し高くなったところに扉、手前にはしめ縄。またお堂を  
囲むように縁側がある。

石段を上がり、縁側へと腰掛ける。懐かしむように撫でると、雨ざらしになった木材独特のざ  
らざらした感触が返ってくる。

そうだ、あーちゃんだ。

やっと思い出すことができ、胸のつかえがとれたような感覚に陥る。

幼なじみの彼女は気が強く行動的で、家が隣の同い年だったせいもあって、僕はよく連れ回されていたんだ。そしていたずらに付き合わされて、一緒に怒られる。僕はそれが嫌で嫌で仕方なかったんだ。だから、隙を見つけてここに逃げ込んでいた。

今となってみればもう思い出の一つで、懐かしむことさえできる。彼女は今どうしているのだろうか？ 確か最後に見たのは、僕がここに逃げ込んでいたのがとうとうあーちゃんに見つかった時で……、あれ？ 確かすぐそこの鳥居の下から僕に話しかけてきて……、その続きが思い出せない。確かそんなことがあってからすぐにこの村から引っ越すことになった気がするんだけど……。

そんなことを考えていると、左手の森の方からがさごそと草を踏むような音がした。

そちらを向くと、草と同じ高さに顔があった。山吹色の毛に白い毛の口元、狐だ。背の高い草の間から顔を出し、こちらをじっと見つめている。よく見ると目元に黒い毛があり、先ほど見かけた個体と同じなのかもしれない。だいぶ暮れてしまった日差しで右半身の毛が透き通るように赤く黒く染まり、左半身は完全な影となり、その輪郭がはっきりとしない。そんな狐が動かず、ただじっとこちらを見つめてくる様は、なんだか少し不気味に感じる。

僕は狐の不気味な様子に気おされたようにこの場を去ろうと立ち上がり、麓へ続く石段へと向かう。鳥居の辺りで石段に足をかける前に少しだけ草むらを振り向くと、狐はまだこちらをじっと見つめたままだった。少し背筋が寒くなった僕は、足早に石段を駆け下りた。

— \* —

日が完全に沈み、辺りが闇に包まれる。目に届くのは家々からかすかに漏れる人工の明かりくらいか。さすがにもう帰ろうと実家を目指す。少し暗さに目が慣れてくると、空が明るいことに気付く。星だ。周囲に外灯が無いからかよく見える。今まで見たことないくらいの数の星が瞬いているようだ。普段から星を眺めたりはしないけれど。

家に着くともう人が集まっているようだった。親族だけでお通夜を行うと聞いていたが、結構な数の人が来ているようだ。皆が集まっている広間の脇を素通りし、今の自室へと向かう。

きっとお通夜にも参加すべきなのだろうが、いくら親族とは言え、これまでろくに顔も合わせたことが無いような大人たちに混じって話をするのは、疲れる。普段からあまり社交的ではない人間からすればなおさらだ。

— \* —

部屋ですることもなく暇を持て余していると、廊下を近づく足音が聞こえてきた。その音は部屋の前で止まり、

「寛忠、入ってもいいが？」

と、障子のむこうからどこか遠慮がちに尋ねてくる声が聞こえた。祖母の声だ。

「うん、大丈夫だよ」

居住まいを正してそう答える。さっきのことが頭をよぎり、また何か言われるのではないかと、少し身構えてしまう。

祖母はゆっくりと障子戸を開け、中へと入ってくる。僕と目が合うと、弱々しく笑いかけてくれた。

「さっきは、悪えっけなあ」

僕に膝を向けて座るなり、祖母はそう謝ってきた。

「おまえのじいちゃんからよ、寛忠ば守ってけろ、この村さ近付けないでけろ、って言われっだっけもんだからな。寛忠が来てしまったの見て、ついカツとなってしまうんだあ。寛忠は何も悪えことしてねえのになあ……」

祖母が寂しそうに語る。その様子になんだか身構えてしまっていたことが申し訳なくなる。

「いいよ、ばあちゃん。何か事情があったみたいだし、僕ももう気にしてないから」

祖母に笑いかける。驚きはしたが、本当に気にしていないのだ。この気持ちが伝わってくれるといい。そう思いながら。

「んだか？ほんとに、すまねっけなあ……」

まだ祖母は気にしているようだった。祖母の気持ちを逸らそうと他の話題で話しかける。

「そういえばばあちゃん、隣に僕と同じ年くらいの女の子が住んでたよね？ 今どうしてるの？」

その言葉を聞いたばあちゃんは、一瞬考えるようなそぶりを見せてから、怪訝そうな顔で僕を見る。

「寛忠、おめえ何言ってんだ？ そだな女の子、知らねよ？」

え……？

「隣ってのが、田辺さんと畑中さんのどっちのことば言ってんだかはわかんねけど、どっちも男兄弟しかいねえウチだよ？ ……寛忠どうした？」

何も反応できずにいると、祖母が心配そうな顔で尋ねてくる。

「えっと……、なんでもないよ」

取り繕うために返事をするが、やはり上の空になってしまう。

「そうだよな、寛忠、移動で疲れっだよな」

そう言うと祖母も何かを考え込むように黙ってしまう。しばらくしてから、祖母は申し訳なさそうな表情でその口を開いた。

「……寛忠、じいちゃんも本当は寛忠さ会いたがってたんだっけ。こっちや来てしまったんだ、今日のお通夜と明日の葬儀さ、出てけねべか？」

その言葉を聞いて、止まっていた思考が少しだけ動く。祖父の優しい笑顔が脳裏に蘇る。

「うん、いいよ。じいちゃんのこと、見送ってあげたい」

自然と言葉が出た。何か事情があつて遠ざけられていたのかもしれないが、それでもやはり自

分は祖父に大事にされていたのだと思えた。

「……ありがとな、寛忠。あだなこと言ってだっけけども、寛忠さ見送ってもらえること、じいちゃんもきっと喜んでっど思う。今日はお通夜だけ出たら、あとは部屋さ戻ってきて休んでいいから。あとでこっちさ、夕飯持ってきてけっからな」

祖母がどこか安心したような表情で立ち上がり、部屋からゆっくりと出て行く。正直ありがたかった。この暖かい気持ちをかみしめるためにも、ぐるぐると回る疑問を解決するためにも、少し一人で落ち着きたい。

— \* —

うっすらと覚えている祖父との思い出を拾い集めるかのように感傷に浸る。浸って取り戻した元気で、改めて、自分の記憶について考えてみる。

一体どういうことなのだろうか。村の中を散歩した時にも、神社を訪れた時にも、確かに蘇ってきた記憶の中には、幼なじみの『あーちゃん』がいた。僕をいたずらに付き合わせたのも、僕を連れ回して遊びに付き合わせたのも、確かに『あーちゃん』だったはずだ。確かに覚えている。確かに思い出した。

なのに、祖母の話では、あーちゃんなんて知らないという……。隣の子、というのが間違いだったのだろうか？ そうか、実は少し離れた家の子だったというだけなのではないか？ そう思うとそんな気もしてきた。きっとそうだ。

そこまで考えたところで、廊下を歩いてくる音が聞こえた。キシッキシッと一定の間隔で聞こえてくる。

「寛忠、おじいちゃんのお通夜よ。」

一度思考を保留にして、母の声に従う。

— \* —

僕が広間に入った時にはもう皆が揃っているようだった。すぐにお坊さんが挨拶をして読経が始まった。読経の最中、周囲の顔も知らない親族たちが何度か僕を注視するような気配を感じた。だが読経が終わってから、通夜振る舞いが始まる前に広間を出てきたせいもあって、特に何かを言われるようなことはなかった。お坊さんの淡々としたお経と焼香をした時の独特なお香の匂いがやけに印象的だった。

部屋に戻り、ぼんやりと感傷に浸る。ああ、祖父とはもう話をすることが出来なくなってしまったのか……。

そう言えばここに来た時に、父がここに連れて来なかったのは理由があったとか言っていた気がする。聞きそびれてしまったけれど、あれは一体……。

そこまで思考を進めっていると廊下から足音が。祖母が食事を運んできてくれたようだ。

「ありがと、ばあちゃん」



障子戸を開けながらお礼を言うと、祖母は優しく笑ってくれた。

「寛忠もありがとうな。寛忠に手を合わせてもらえて、きっとじいちゃんも喜んでよ」

お盆に載せられたお椀類を祖母と一緒に小さな机に並べる。煮物や天ぷら、それにいなり寿司や巻物、味噌汁だ。きっと通夜振る舞いで出されている料理を少しずつ取り分けて来てくれたのだろう。

「ちゃんと食べて元気出せな？ 寛忠が元気だと、きっとじいちゃんも喜ぶから」

ずっと会っていなかったせいであまり実感が湧いていなかったが、大事にされているのだと感じて、胸が暖かくなり、思わず目頭も少しだけ熱くなってしまった。

立ち上がり広間の方へ戻ろうとする祖母を見て、ふと、思い出した先ほどの結論を確かめる。きっと確かめておかないと、寝覚めが悪くなるだろう。

「ねえ、ばあちゃん、さっきの話なんだけどさ。隣の家の子じゃなくても、小さい時に僕がよく一緒に遊んでた女の子がいたんじゃない？」

声を掛けられて少し考えた後にこちらを振り向いたばあちゃんは、僕の目を見て不思議そうに言う。

「やっぱり、そんな子、知らねよ？」

(後編へ続く)

## 本当の妖怪は私たち自身なんじゃないかって（浦木 英智）

---

本当の妖怪は私たち自身なんじゃないかって

浦木 英智

今日も平和だ。天文部の部室は、柔らかな日差しが柔らかく差し込んで、淀んだ空気と柔らかかに混ざり合い、僕たちの気力を奪っていく。元々そんなに意識の高い若者ではなかったはずなので、格段に無気力だ。このままどこまでも柔らかくなって、溶けてしまいそうだ。どうしてこんなにも、気力に満ち溢れていないのだろう。気だるいのだろう。眠いのだろう。時期のせいだろうか、気候のせいだろうか、それとも、将来のビジョンが見えない現状のせいだろうか。

「都市伝説の話をしませんか？」

後輩の女の子が、僕にそう語りかける。僕は視線を天井からその子に移して、こたえる。

「都市伝説？」

それは今後僕がやる気を取り戻し、ひいては明るい未来を切り開くための、何かの役に立つだろうか。

「たとえばなら、伝染病、みたいなものだと思うんですよ」

でんせんびょう、と声に出さずに口の中で反芻する。彼女は彼女なりに、いろいろと考えたのだろう。そして、都市伝説と伝染病に何か通ずるものを見つけたに違いない。であれば、話半分に聞くのは失礼だ。きちんと聞くことにしよう。

僕は姿勢を直して、彼女の話聞く体制になる。

「どういうことだろう」

しかし彼女は、どや顔でこちらを見て、そのまま姿勢を崩さない。

「特に、何も考えてないです。なんとなくです」

勘違いだった。彼女もまた、暇なだけだ。

「先輩は、どう思いますか？」

「都市伝説を？」

「はい」

それから暫く、普段使っていない脳を回転させる。人生の先輩らしく、なにか機知に富んだ、ウィットウィットした一言を披露してあげるべきだろう。

「月の人面岩、かな」

「そんなことはどうでもいいんですが」

切り替えが早く、過去を気にしないのは彼女のいいところだ。

「なんだろう」

「よく、陰毛が部屋のいろんな所から出てくる、って話があるじゃないですか」

この話が都市伝説とどう関わりを持ってくるのだろう、とかは考えるだけ無駄だ。

「ああ、あるね」

「蛍光灯の上とか、絨毯の下とか、枕の中とか。まるで、妖怪の仕業だとか、ちょっとした心霊現象だっていう人もいますね」

あまり女の子の口からは聞くことのない話題だ。そもそも女の子の口からはあまり聞きたくない話題だ。

「暇な妖怪か霊がいたもんだね」

「ご多分に漏れず、私の部屋にも出たんですよ」

「……妖怪が？」

「妖怪ですね」

こんなときどんな顔をしたらいいのだろう。ニヤニヤしたらいいのだろうか。

「ところがですね、ひとつ問題があるんですよ。この話には」

「うん？」

「つるつるなんですよ。私」

二人の間を風が通り抜ける。しかし窓は閉まっているので気のせいだった。

「……」

漢字で書けば「白板」という、麻雀の役であり牌のひとつである「白」が語源である。

「……」

何と言って良いか分からないが、沈黙の時間は気まずいのでとりあえず、「体質？」とだけ言ってみる。

「剃ってるんです」

と言われても、そうなんだ、としか言えないので、「そうなんだ」と言うておく。

「え、だって、先輩とこの間おはなししたじゃないですか。好みの女の子のタイプについて」

好みの女の子のタイプについて話をしたことがあるのは確かだ。その記憶に間違いは無い。

「『生えてない女の子』って答えた記憶はないんだけど」

「そんなことはどうでもいいんです。話を陰毛に戻しますね」

陰毛、という一点において話はぶれていなかったのではないか、と思う。

「それで、どうも怪しいなって思ったんです。こわいな一つて思ったんです」

「身に覚えのない毛が落ちてるわけだしね」

我ながらちょっと上手いことを言ったかもしれない。

「私、隠しカメラを仕掛けたんです。押入れの中に。それで、暫く出掛けて部屋を空けたんですよ。仕掛けて、出掛けたんですよ」

「妖怪の姿か、霊現象が観測できるかもしれないね」

「帰ってカメラを確認したら、うつっていたんですよ。ばっちり」と

「妖怪が？」

「兄です」

「兄？」

どういうことだろう。

「全裸の兄が私の部屋に入ってきたんです」

どうということだろう。

「それはもう、ほとんど妖怪と呼んで差し支えがない気がするなあ」

「そこで私は思ったんです。『男子ってこういう生き物よね。まったくしょうがないわ』って」

「器の大きい発言だなあ」

「兄はひとしきりオリジナルのダンスを披露したあと、自慰を始めました。私は思ったんです。

『男子ってこういう生き物よね。まったくしょうがないわ』って」

「大体の男子はそういう生き物じゃないと思うけど」

「そのときのオカズは何だったと思います？」

知らないし、考えたくもない。

「先輩と同じことを私も考えていました。兄が妹を性欲の捌け口にするなら、お供にするのは妹の下着だと、そう相場が決まっていると」

もう僕の考えとかどうでもいいんじゃないか。

「兄がオカズにしていたのは、私が押入れの中に隠していた、秘蔵のBL本だったんですよ。一本取られました。これには私も、『まったくしょうがないわ』とは思いませんでした」

「しょうがないことだらけだと思うよ」

「しかし兄には更なる試練が待ち受けていました。ひととおり行為を終えた兄は、突然、何かに気付いたようにはっとなります。焦ったように、辺りを見回します。よく聞いてみると、足音がするんです。私の部屋に近付いてくるんです」

今さら霊現象の類ではないだろうな、と思う。

「追い詰められた兄は、苦肉の策だったんでしょう、押入れの中に隠れます。兄が隠れてから間もなくして、私が部屋に入ってきました。映像の中の私は、押入れの中のカメラを回収して、そこで、録画は終わっていました」

霊現象より怖い類のやつだった。

「……」

「で、ここからは後日談なんですが」

「まだ当日談のオチが落ちてないんじゃないかな」

彼女はそっと両手で自分自身を抱くようにして、僕から視線を逸らす。

「……様子が、おかしいですよ。それから」

「そんな行為がばれたら、普通は以前のようにはいられないだろうね」

「ああ、兄は以前のままです。ケロッとしてます。陰毛も落ちてますし。変わったのは、私の方です」

「お兄さんを変えてさしあげた方がいいと思うなあ」

「兄が友人を家に連れてくる度に、妄想してしまうんですよ。カップリングを。兄の部屋に、そこにいる二人の声に、耳をそばだててしまうんです。盗聴器ごしの二人のやりとりが、なんだかとってもイケナイ、劣情を催すものに聞こえてしまうんですよ」

なんだかとってもイケナイのは盗聴器の方ではなかろうか。

「三人も連れてきた日には、大変でしたよ。私が。妄想で」

「何が大変なんだろう」

「激しく気になるじゃないですか。穴は足りるのか、とか」

「激しくどうでもいいなあ」

「夜のスマッシュブラザーズですね」

「……」

二人の間を風が通り抜ける。しかし窓は閉まっているので気のせいだった。

「……」

「別に、上手くは」

「本当は」

「うん」

「本当は、だめなんです。いけないことなんです。ホモ妄想はあくまで想像のもので、創作世界に留めておくべきなんです。そういう慎みをもって今までやってきたんです。現実世界に持ち込んではいけないものなんです。実在の、それも肉親を巻き込んで、いけないはずなんです。ああ、でも、止まらないんです。止めろって方が無理なんですよ。こんな状況で、正気を保ってられるはずがないんです」

彼女の頬は上気していた。苦しそうで、そして何より楽しそうだった。

「そこで私は思ったんですよ。……こんなにも、苦しいのに、辛いのに、いけないと分かっているのに、妄想に身をやつして、ありもしない考えにとらわれて、理想と建前の二律背反の中で、それでも自分の思い描いた世界を創造し続ける。そんな私たちこそ、普通の人間ならざる生き物なんじゃないかって……」

彼女は立ち上がる。どや顔でこちらを見る。窓から日光が差し込んで、まるで後光が差しているように見える。

「本当の妖怪は私たち自身なんじゃないかって」

彼女はどや顔を崩さない。それから体を乗り出して、僕に顔をぐいっと近付ける。

「現代に生きる妖怪は、ここにいるんじゃないかって」

手を握って僕の胸のあたりに優しく触れる。

「……」

「……」

「別に、上手くは」

「先輩」

「うん」

「先輩、今日も平和ですね」

空は青く、風はあたたかく、太陽は明るい。世界は平和で、馬鹿みたいに優しい。そこで僕は気付く。きっと、こんなにも眠いのは、普通に睡眠不足のせいだ。

「そうだね」



花咲き乱れて、神は嗤う ～無花果の章～

帽子屋

1

二〇九三年 十月 三十日 十八時六分

「EDEN感染症 一吸血感染一」

渡島姫崎郷「柏村小学校」付属の臨海学舎にて、EDEN感染症による感染災害が発生した。宿主と思われる少年「無花果望実」を含め、教員一名、児童二十四名が死亡。また教員二名が軽傷、児童十八名が顎の骨を折る等の重傷を負った。

本件のEDEN感染症は吸血衝動を引き起こすものであり、学舎に宿泊していた生徒及び教員全てに被害が及んだ。被害規模は、二〇八八～九〇年の『投身感染』に並び、近年の感染災害において大規模なものである。

今年でEDEN感染症による事故は八件に上り、政府は対応を迫られている。

f

枯れ始めた木の下に、少女がいた。

仄かに茜色に染まる空の下、市街のはずれにある施設。枯草の匂いと淡い闇に包まれた、誰もいなくなった中庭。敷石に覆われた庭の中央の、茶色の草が茂った狭い区画に一本の木が伸びている。掌の形をした葉を錦に染めた木。その下の人が二人くらい座れるベンチに彼女は腰掛けていた。

清潔な白い衣服に身を包んだ年端もいかない少女。虚ろな目で宙を見て、抜け殻のように忙としている。

空の茜色が濃くなるにつれ、闇が深くなっていく。沁みこむような冷たく、澄んだ空気が体へ入り込んでくる。影に沈んでいる中庭に、得も言われぬ静寂が降りてくるようだった。

それは夜が近づくことだ、と少女は知っていた。

夕暮れ、昼と夜の境界。赤い日が落ちて、世界が夜に身をゆだねていく境目。夜は静けさと寂しさに満ちていて、それが夕暮れ時に境目の向こうから滲みでてくるのだ。

少女は夕暮れと夜を知っていた。

随分と前に、周りがすべて未知、不思議で溢れていた頃に教えてくれた人がいた。

彼女にとって大切な人。

その人は————

「だれ、だろう……」

口に出した言葉が頭蓋に響く。

無意識にこぼれた独り言には感情も思考も含んでいなかったはずなのに、胸の奥が冷えて、体が震えた。

忘れている。大切だったはずの誰かを、忘れている。

目を閉じて、過去を辿る。しかし、瞼の裏に浮かび上がるものはない。記憶の底を覗いても、何も見えない。彼の顔も、声も、何もかも。塗りつぶされたか、それとも忘れ失せたか。ただ空白があるのみだった。

「……やっぱり、だめみたいだな」

体を包んだ不気味な寒気を溜息と共に吐き出す。

もう何度目かになる自問へ返ってくるのは、結局変わらない自答だけだった。

少女には一週間より前の記憶がない。

一年前に大きな事故に巻き込まれて、ここ——病院へ運ばれて、一週間前に意識を取り戻したらしい。そのいきさつも、この人から聞いただけで、事故のことも覚えていない。

夕暮れも、夜も、病院も、このカエデの木も知っているのに——知識だけは残っているのに。自分の中にあるあらゆるを教えてくれた誰かがいたはずなのに、彼らの像は欠片も残っていない。

「わたしは……誰？」

どんな人だったの？

思い出せない、覚えていない。今までどんなふうに喜んで、どんなふうに怒って、哀しんで、楽しんで——生きてきたの？

この一週間、記憶を覗く度に頭の中を巡った言葉。

些細なことでもいいから、自分の過去を見つけない。欠落から生まれた不安は、狂おしいほどに少女に過去を望ませた。

だから、捨て置かれた知識の中に自分の残滓を探した。

しかし、どこにも残っていなかった。

探す度に不安はどこまでも広がって、それを埋めてくれる希望はどこにもなくて——それでも過去の自分を追ってしまっ——やがて少女を満たしたのは優しい諦めだった。思い出すときは『できなくてもしょうがない』と諦めを混ぜてするようになった。そうすれば、少し楽だったから。

「戻ろうかな」

夕方、この時間帯は中庭に人がいなくなる。知らない人と関わりたくない少女は決まって夕方に出てきて、その発作的な追憶をしていた。それが内気な性分の故か、記憶がないのに人と関わるのを怖がった故かは自身にはわからなかったが。

とはいえ、もうすっかり秋めいている。この時期、この時間帯は冷え込む。そろそろ戻らないと風邪をひいてしまうだろう。

ますます茜色の濃くなる空を見上げながら、少女はゆっくりと腰を上げようとした。

その時、不意に石畳を踏む音が聞こえて、少女は入口の方へ目を向けた。



「いい加減、予定の時間には戻ってきてほしいものだな」

無感動のような、呆れたような低い声で呼ばれる。そこに立っていたのはぼさぼさの髪で、無愛想で、ところどころ汚れている白衣を纏った男性だった。眼鏡の奥のくたびれた半眼でこちらを見ていた。

「何度も言うようだが、俺はこの時間にしかお前さんを診られんのだ。外出するなどは言わんが、もう少し早めに戻ってくれ」

「先生、心配してくれるんだ？」

「当たり前だ、だから明日からはちゃんとしてくれよ」

抑揚の薄い返事だったが、本心で言ってくれているのだと少女は何となく思えた。

思わず、笑みがこぼれた。

烏頭野先生。少女の専属医。日に一回のカウンセリングをしてもらっていた。

無愛想だが、隠し事がへたな人。それが少女の印象だった。

最初は外見と低い声色から怖い人と思えなかったが、話していくうちにとても優しい人だとわかった。

少し逡巡した後に、少女は答える。

「ごめんなさい。でも……いや」

優しく、お世話をしてもらっている烏頭野にわがままは言いたくなかったが、夕方だけは譲れなかった。

「ああ、うん。そう言うとは思ってた。しかし、もう外も寒くなってきた。長居すると体に障るから、気をつけろよ」

そう言って、烏頭野は少女の隣に座る。さて、と一呼吸入れて、烏頭野は内ポケットから煙草を取り出して、啜えた。

今日も中庭でカウンセリングを始めることになった。

カウンセリングといっても、内容は今日の出来事の報告だ。

思い出そうとした事。その内容と結果。それだけ。

それだけしか話す内容なんてなかった。

けれども、烏頭野はそんな少ない話を親身に聴いてくれる。余計なアドバイスや、同情なんてどこにもない姿勢で。他人との会話が苦手な少女にとって、それは好ましかった。

今日の話——夕暮れと夜の話が少女が終わると、烏頭野はなるほど、と肯いて啜えていた煙草をケースへ戻した。

「焦ることはない。ゆっくりじっくり、戻すことを続ける。それが一番いい。最初から無理すれば、心に負担をかけるだけだ」

「先生、それまで付き合ってくれるんだ？」

「ああ。治るまできっちり付き合わせてもらうよ。お前さんの先生だからな、頼ってくれ」

頼りになる。自分の話を聞いてくれる。

彼と話すとき心の陰りが次第に薄れていく。温かい気持ちになれる。少女の中で烏頭野は諦めよりも大きな支えになっていた。彼の隣は独りのベットの中よりも居心地がよかった。

他には、なにかないか？ と聞く烏頭野に少女は首を横に振った。これで今日のカウンセリングも終わり。いつもこのくらいの短い時間、彼と会話するのが今の日常だった。

烏頭野が立ちあがるのに続けて、少女もゆっくりと立つ。

茜色だった空はいつしか蒼に染まり、日が落ちたことを知らせていた。烏頭野も、もう戻らねばならない時間だろう。看護師に聞いたところ、ここでは別の仕事も兼務しているようだった。

歩みを進める彼の後を、少女はついていく。

そうだ、と何か思い出したように烏頭野は不意に足を止めた。

慌てて立ち止まった少女の前に、彼は膝を着いた。

少女が疑問を投げかける前に、彼はポケットからそれを差し出した。

「また捨てただろう」

静かに咎めるような口調に、少女は反論できなかった。

真っ直ぐこちらを見据えるまなざしに、思わず目を逸らした。

気押されて、やっとの思いで声に出した返事は思いのほか小さかった。

「……捨てたよ」

「これは必ずつけておけ」

「……先生もそっちの方がいいの？」

「確かにお前さんの記憶が戻るまでこれはつけない方がいいかもしれない。受け入れるのは難しいからな。けどな、No.9308とか言われるよりましだ。こればかりは、受け入れるしかない。お前さん自身なんだ。大事にするんだ」

少女は受け取らざるを得なかった。

前に捨てた時にも、同じように怒られた。

捨ててはいけないものだと、受け入れなければならないものだと。そう言われた。

言われたけれど、捨てた。

それは持つてはいけないものだったから。捨てるべきものだったから。意味を、価値を、自分をそれに見出すことができない、いや、わかることができない少女にとって、そんなものを自分自身なんて思えなかったから。

烏頭野は立ちつくす少女に背を向けて、ゆっくりと離れていく。少女は彼の大きな背中を追い掛けようと、『無花果望実』と書かれた土に汚れたネームプレートを胸につけた。

渡島津神郷「五ノ池小学校」にて、EDEN感染症による感染災害が確認された。

ここ二年間、五ノ池小学校では児童の飛び降りが頻発しており、それらの全てが現象感染によるものだった。EDEN感染症の専門機関である『ガーデン』が、宿主の少女「烏頭野未来」を収容したことでこの感染災害は解決した。

本件のEDEN感染症は高いところから飛び降りたい、という投身の衝動を引き起こすものであり、死亡者は児童十三名、教員五名。負傷者は児童、教員合わせて百八十五名にのぼった。

近年のEDEN感染症の中でも大規模かつ長期間にわたり、被害を及ぼしたものである。

§

深夜、虫の音がうるさく響く研究室に烏頭野はいた。

季節は秋めいて、冷え込むようになってきていたが、部屋の中は機械の排熱で温かく、まだ暖をとるようなものはいらなかった。

烏頭野は夕方の服装そのままに、机に向かっていて、広げられたA4のノートには、今日の日付と少女——無花果のことが書かれていた。これが彼の一日の最後の仕事だった。

すなわち、無花果の経過記録。

「現在、回復の兆しなし——か」

短く締めくくり、烏頭野は溜息をつく。

自分の書いている言葉が、酷く滑稽で、意味のないものだとなっていたから。

この記録に、無花果の回復を記すことはない。

それはもう既に決まっていることなのだ。無花果の記憶は戻らない。いや、戻せないのだ。

この記録は無花果の記憶が戻っていないことを記すものだった。

「記憶を戻してはいけない……か」

EDEN感染症。

ここ数十年で発症した原因不明の奇病の一種であり、発症と同時に災害を引き起こすもの。災害は宿主となった人間の記憶に起因したトラウマそのものである。それは衝動や、大きなものでは外傷までありうる。つまり、火傷をしたことがトラウマな人間は、火傷という現象そのものを周囲の人間へ撒き散らす。そして、その現象の影響は人間だけが被る、感染するものだった。もはやサイキネシスか何かの部類だ。

故に、現在の対処として、大規模なEDEN感染症を発症した人間は悉く自身の記憶を奪われ、この施設へ収容される。

無花果もその一人だった。

「俺は……本当に医者か……？」

カウンセリングと称して少女の記憶が戻っていないことを観察し、記憶が戻りそうになるのを阻む。

少女の過去を否定し、未来のみを肯定する。

希望（みらい）を与え、希望（かこ）を潰す。

それが、医者のやることなのだろうか。少女が望む回復は、その記憶の中にあるかもしれないのに。

一方で、記憶を取り戻した彼女に待っているのは、存在そのものの抹消だけであることも、十分にわかっていた。

それに、

「今更……なにを考えてるんだ、俺は」

そこまで考えを巡らせて、烏頭野は自分が濁いた笑いを浮かべたのに気がついた。

烏頭野は三年前にも同じ思考をした。

今よりも強く、深く、全てを賭して。大切だった少女を救うために自分のできることを模索した。

どうやったら彼女を救えるだろうか。

そして、これまでを殺してこれからを生きるか、今ここでこれまでの少女として終わるか。その二つの選択のどちらを彼女は望むのだろうか。

そういう思考を。

そして、その結末は――

「失礼いたします。烏頭野正義」

思考を閉ざすように、ドアの開く音と共に若年の女性が入ってきた。烏頭野と同じく無花果の世話をしている看護師だった。

貼りつけたような笑みを浮かべて、口を開いた。

「木蔦さん……どうしたんだ、こんな時間に」

「被検体No.9308の経過観察について、木蔦黄泉より烏頭野正義に苦言を呈します」

被検体、無花果のことだ。その名前と呼ぶなど言ってからは、無花果の前では言っていないようだったが、烏頭野の前ではやめなかった。

木蔦はガラス玉のような目でこちらを見据えて、機械的に続ける。

「カウンセリングは院内で行うよう命じられているはずですが、今回を含め、二回のカウンセリングを中庭で行っています。即刻院内での実行を木蔦黄泉は推奨します」

「無花果さんはあの時間、あの場所が一番お気に入りなんだ。患者が最良の環境で療養をして行くのは当然だ」

「ですが、烏頭野正義の被検体No.9308の経過観察は鬼灯院長の監視体制の元、行われなければならないものです。中庭では監視装置が先の被検体No.9307の暴走により故障しています。故、先程の事項を再度推奨します」

監視体制。その言葉に烏頭野は苛立ちを覚える。

確かに自分は監視されて当然だった。もともとここに勤めていたわけではない。そして、ここに踏み入れてからこの社会を知りすぎた。EDEN感染症と、この施設『ガーデン』について。だから信用されていないのも肯かざるをえないが、肯定することと受け入れることは違った。他人に

観られるというのは誰しも不快なものだ。

「なら、あんたが俺のカウンセリングを監視してればいい」

「烏頭野正義も既知のことかと思われませんが、木蔦黄泉はEDEN感染症の宿主です。八時間三〇分二九秒間、外界の空気と接触することが可能ですが、その継続には活動後一五時間二九分三一秒間抑止薬を皮下浸透により投与しなくてはなりません。それ以上の活動は木蔦黄泉の現象感染が再発する恐れがあります。よって、再度……」

「ああ、わかったわかった。明日はきちんと病室でする」

相変わらず面倒な口調だ、と烏頭野は吐き捨てる。

初めて会ったときからこんな風で、そのいきさつなど知る由もなかった。鬼灯院長の忠実なる人形を自負しているらしいが、不愉快な話だった。

烏頭野は机に向き直る。もうこれ以上話したくもなかった。木蔦も用件は済んだようで遠ざかる足音と、ドアノブを回す音が聞こえた。

しかし、ドアの開く音は聞こえなかった。

烏頭野が頭だけを後ろへ向けると、

「烏頭野正義。まだ、被検体を患者などと呼ぶのですか？」

木蔦も頭だけをこちらへ向けて、気味の悪い笑みを更に深くして、悪意をむき出しにした。

「ふざけるな！」

激昂。

怒り、憎悪。

奥歯が軋む。爪が掌に食い込む。呼吸が乱れる。

収まらない赤い感情が、力となって全身を駆ける。

床を踏み、椅子を蹴り、瞋恚のままに足を進め、木蔦の胸倉を掴んだ。

「あんたたちは、患者をなんだと思っている！」

「被検体は患者であると同時に、研究材料という意味を大きく持ちます。ガーデンは正確に言えば病院ではありません。この社会に生きる全ての人々を救済するための組織です。木蔦黄泉はその思念の元、行動しています」

「その救済が、あんな年端もいかない子を、犠牲にして成すことなのか！」

ガーデンがEDEN感染症の患者を収容するのは、社会からの隔絶のためだけではない。彼ら自身を使い、奇病の研究を行うためである。

今までの実験で、実を結んだことがあるのは事実。しかし、失敗すれば、現象感染を再発し、周囲の人間へ災害をもたらす源泉と成り果てる。

そして、そうなれば患者は間違いなく殺される。

患者としてではなく、被検体として、処分されてしまう。

彼女たちは被害者だ。たまたま運が悪かっただけの被害者だ。だから救わなくてはならない。救われなければならない。被検体としてなど扱ってはならないのだ。

捲し立てる。

汗が滲み、いやにはっきりと頬を伝っていくのがわかる。

しかし、木蔦は怒気を受けても、笑みを絶やすことはなく、

「烏頭野正義が烏頭野未来にした実験は救済のためではなかったのですか？」

烏頭野にそう問いかけた。

「あ……」

烏頭野の体から力が抜ける。掴んでいた手が離され、その場に崩れた。脱力した体を巡るのは、死体の冷たさに似たそれだった。

怒りよりも憎悪よりも濃い絶望に満たされていく。力の源泉となっていた感情そのものが黒く塗りつぶされた。音も、床の感触も、あらゆる五感が閉じて、深い後悔の中へ堕ちていく。

烏頭野未来。正義の娘。

この世界の誰よりも大切な存在だった愛娘。自分の全てを賭けても助けたかった大切な娘。

救いたかったのに、それなのに――

「未来……！」

自分が愚かだったから、及ばなかったから、救えなかった――自分の手（実験）で、殺めてしまった。

自責に押しつぶされて、烏頭野は蹲る。

木蔦は烏頭野を見下ろして、

「明後日、活性電位研究課が被検体No.9308への実験を行います。鬼灯院長は烏頭野正義にも立会を命じております。当日はよろしく願いいたします。無花果さんの救済のために」

そう言い残して去っていった。

### 3

#### 『ガーデン』

EDEN感染症を研究する政府直轄の機関。

本国には七つの支部があり、それぞれが宿主の収容、EDEN感染症の研究を軸に活動を展開している。

医療機関を前身に置くガーデンの目的は、あくまで宿主となってしまった患者の社会復帰であり、学園を併設している場所も見受けられる。その一方で、研究に重きを置き、感染症そのものの治療を重視する場所もある。

#### f

昼食を済ませた少女は病室の窓際の椅子に座って、中庭を見つめていた。ここの病院は自分と同じくらいの子供が多いようで、リハビリを兼ねて付き添いで外へ出ているようだ。

一方、少女はそんな中に混ざる気もしなかった。病室は個室。独りの方が落ちつくのだ。

こんこん、という音と共にドアが開いて、白い台車と共に木蔦が入ってきた。

「無花果さん、お昼ごはんきちんと食べられましたか？」

「う、うん。木蔦さん」

少女は少しつかえた返事をした。

少女は木蔦が苦手だった。

その優しそうな微笑みも、柔らかい声もどこか作っているように思えてしまっているから。烏頭野と違って、隠し事をしている人だから。

他人を寄せ付けないほどの大きな壁で自分の姿を隠している。その壁の向こうの、彼女の本当はどこか得体のしれないものだ、と少女は感じていた。だから、未だに苦手意識を晴らすことができなかった。

テーブルの上を片づけながら木蔦は言う。

「無花果さん、突然で申し訳ありませんが、明日の一七時に検査を行うことになりました。検査前にはこのお薬を飲んでおいてください」

「え……明日、ですか」

急な知らせで申し訳ありません、と繰り返して、片付け終わった木蔦は早々に病室を去っていった。

後に残された少女は解放されたという思いと理不尽な何かを押しつけられた思いにかられた。何かいう間もなく出ていった木蔦を恨んだ。いや、待つてというくらいの時間の余裕は、ありはしたのだが。

「明日の夕方、か」

少女は、検査という仰々しいことよりも烏頭野のカウンセリングのこの方の方を気にしていた。

ということは、明日はできないのだろう。そう思うと少し残念だった。烏頭野との会話は、病室で本を読むよりもカエデの木を眺めるよりもずっと楽しいものなのに。

日の差す窓を開けて、外の空気を中へ入れる。まだ温かい空気が、独りの部屋を満たしていく。

「よし、なら——」

それなら今日は昨日よりもう少し多く思い出してみよう。

何も見えない自分の中を見るのはつらい。けれども烏頭野と話す話題が、少しでも多い方がいいから。

そう思って、少女はポケットから小さな可愛らしいメモ帳を取り出した。

§

夕方、昨日より少し早く出てこられた烏頭野は、渡り廊下を歩いて中庭へ向かっていた。茜色の日が窓から差して、影と日向をくつきりと分けていた。

明日には無花果が手術を、実験を受けることになる。もしかしたらそれで、最悪は命を落とすことになるかもしれない。

そうはいつでも、烏頭野にできることなどただ見守るだけしかできない。実験が成功し、彼女が解放されるのを待つばかりだった。

未来を失ってから、烏頭野はただ施設の方針に従いながら生きてきた。

彼女を失った原因が、自分の研究不足にあったから。

彼は未来と共に自分の意思すら失い、ただの施設の歯車と成り果てた。

昨日の被検体への反感は嘘ではない。

だが、その反感から行動に起こしたことは一度もなかった。ガーデンの研究を知っても、今まで見て見ぬふりをしていた。いや、もしかしたら多少のリスクは仕方がないと、自分の中で思っていたのかもしれない。

なにせよ、烏頭野も木蔦たちと変わらない。

ひどく矛盾した自分。

情けなかった。何もできずに、ただ従っているだけの自分が。未来と同年くらいの少女が、モルモットにされるのを見ているだけの自分が。

自分の意思のなにもかもが、今更疼いている。

昔からそうだった。自分はなにをするにも、思うにも、気付くにも遅すぎる。

遅いのだ、何もかも。もう自分を動かすだけの理由も動機もこの世界のどこにもない。

自分が守ろうとした娘はいないのだ。

リノリウムの階段を下ると、静寂が階下に広がっていた。

夕方になるとそれぞれの看護師は患者たちを連れて病室へ戻る。だから、無花果だけが例外のようなものだ。

冷え込む空気とともに夜が近づく。

外から紛れ込んだカエデの葉が、廊下の隅にあった。

「そういえば、そんなものだと言っていたな」

無花果が記憶を辿るために用いた言葉。それらについての解釈。静寂を運ぶ夜、夜が溢れる夕暮れ、人を温かく包むカエデの葉。

詩人の描いたような意味が脳裏をかすめて――不意に烏頭野は足を止めた。

夕暮れ。

夜。

そして、カエデ。

頭の中で、何かが符合した。

「い、や……そんなはずは……」

何故今まで気付かなかった、としか言えないことだった。

無花果の記憶障害は、自分に関する記憶、エピソード記憶が完全に消失する。自分が思ったこと、感じたことは知識としてすら残らない。そういう風にできている。

だから、あれらは彼女に近かった誰かが教えた知識。

そして、その誰かを烏頭野は知っている。幼いころから本が好きで、カエデが好きだった少女を。



「無花果……まさか……」

無花果と彼女の姿が、重なった。

§

「先生、今日は早いんだね」

烏頭野は思いの外早く訪れた。

今日は昨日言われたとおりに早く戻ろうとしていたのに、と少女はなんだか複雑な気持ちになった。

烏頭野はなぜか肩で息をされていて、いつもかけていた眼鏡も外していた。

少女が問いかける前に、烏頭野が前に立って彼女の肩を掴んだ。

思わず変に上擦った声が出る。

「へっ……？」

「い、無花果さん」

「え、えっと、眼鏡なくても先生はかっこいいと思うなあ」

「い、いや、そんなことは……どうでもいい。お前さんに訊きたいことがある」

振り絞って切り返した言葉も届いていないようで、真剣な顔で、真つすぐに見つめ返される。

訊きたいこと、といわれて少女は戸惑う。

何も思い出せない自分に、訊きたいことと言われてもその答えは否定以外ないとわかっているはずなのに。

自然に烏頭野の顔から目が逸れてしまう。

烏頭野は息を整えながら、どこか意を決したような真面目な口調で続けた。

「無花果さん、記憶が戻るとしたら、どうする？」

「戻るとしたら？」

「ああ、戻るとしたら」

「そりゃ……嬉しいよ」

記憶を取り戻せる。過去を思い出せる。わたしを思い出せる。不安も消えて、何もかもが戻ってきて、このネームプレートの意味も価値もわかるなら。それが嬉しいのは当たり前だ。

だからだろうか、烏頭野の言葉に続きがあるのを察していた。

「もし記憶が戻るとして……その記憶が戻ったら死ななければならないとしたら、どうする？」

「え……？」

「自分の過去を捨てなければ、これから生きていけない。そう、言われたらどうする？」

言葉の意味を理解するまで、時間はかからなかった。

けれども、烏頭野の意図がわからなくて、少女は黙ったままだった。

捨てる、自分が生きてきた過去を。十二歳までの自分を、捨てる。今の頭の中の空白から目を背けて、前だけを見つめていく。確かに持っていたはずのあらゆるものをなかったことにして、これから手に入れていく。そうしなければ、死んでしまう。

肩へ置かれた手の力はいつの間にか緩んでいた。

確かな過去と不確定な未来を天秤にかけて、そして無花果望実と呼ばれた少女の死と名前もわからない自分の死を天秤にかけて、少女の思考は揺らぐ。

わたしは。■■■■■は。

決意と共に、少女ははっきりと言う。

「記憶を、諦める」

「それは、今でも過去がわからないままだからか？」

烏頭野は静かに、質問を重ねる。

それは違う。

きっと、そんなことじゃない。

自分の過去がわからないからとか、書かれている自分の名前を受け入れられないからとか。そういうことじゃない。

少女は、答える。

「先生、無花果望実には、きっと沢山の友達が、大切な人たちが沢山いたんだと思う。幸せだったんだと思う。そうじゃなきゃ、こんなに思い出したいなんて思わないだろうし」

「……」

「でも、今、わたしはわたしだから。命を賭けるなら、後ろの事より前の事に賭けたい。これから先を、生きたい。それに――」

「それに……？」

「それに、無花果望実に未来を教えてくれた誰かは、見えない希望に満ちているものだって、言ってくれたから」

烏頭野は目を見開いて、しばし固まって――――そして、少女を抱きしめた。

少女は慌てふためかないわけがなかったが、彼の嗚咽が漏れたのが聞こえて、戸惑うまま、されるがままになった。

長い沈黙が降りて、やがて烏頭野が少女を離して、立ちあがり、どこか照れくさそうに頬をかいた。

「無花果……いや、お前さん。お前さんは、必ず俺が助けるからな」

「えっと……治るまで付き合ってくれるって、言ったもんね？」

「まあ、そういうことだな。明日の検査には、俺も同行するが、その前にお前さんの病室まで出向くことにするよ」

「そ、そうなんだ」

そうとわかれば心細くない。

少女は思わず微笑んだ。

「すまなかったな、変なことを聴いて」

「いつもとあべこべだったね」

「そうだな.....そうだ、もう一つ訊いておきたいことがある」

「なあに？」

烏頭野は少女の聞いたことのない、あるいは大切だったかもしれない誰かの名前を口にした。

少女はその問いに、わからないと答えたが、何故だか胸の奥が締め付けられるような、そんな気がした。

#### 4

「わたくし、別の仕事が入っておりますの。天使は忙しいんですの、ピーっと音が鳴ったら、まず跪いて、それから頭を垂れて、それからでんごーピー」

「ふざけてるとこ済まないが、こちとら大真面目だ。明日、無花果望実への実験が行われる。何としても止めたい」

少女を病室まで送った後、蒼白い電灯の照らす夜の渡り廊下を烏頭野は早足で進んでいた。耳に嵌めている補聴器のような通信機に繋がっている右手は、どこか汗ばんでいた。

「いいか、お前のガーデンへ無花果望実の転入手続きをしてほしい。そちらからの推薦と言うことで、なんとかしてくれ」

烏頭野はここから少女を連れだそうとしていた。

ここへの反逆であることは間違いない。

裏切り者の先に待っているのは、追放よりも凄惨な結果かもしれない

しかし、烏頭野はそれを覚悟した。

未来を生きたいと言った少女を守ると決めた。

ここにいたら彼女はそう遠くないうちに死ぬ。被検体として、処分される。その暗い確信を烏頭野は拭えなかった。

そしてそれは、実験以外の理由もあった。

「彼女は、娘の未来と同じように大規模なEDEN感染症、吸血感染（ヘマトフィリア）の宿主だ。だから、実験なんてさせちゃいけない」

このガーデンはEDEN感染症の中でも影響の大規模であるな宿主を積極的に扱い、研究を行う場所だった。院長の鬼灯は野心家であり、様々な手段を研究しEDEN感染症をいち早く解決しようとしていた。しかしそれ故に、最も患者の死亡者数が多かった。

無花果望実は吸血感染の宿主。

実験に失敗し、彼女の現象感染が引き起こされたら、間違いなく殺すことでしか止められなくなる。

だから、大学の腐れ縁であり、同じくガーデンの院長を務める梶子という女性の手を借りようと思った。彼女のガーデンはここと違って、研究にあまり重きを置かない代わりに、患者を患者として見てくれている場所だった。最も、烏頭野にそこまでの権力などない。こうして、頼むしかないのだ。

「もう、お前だけしか頼れる相手がいらない。だから、彼女をたのん——」

そう締めくくろうとした烏頭野は、不意に違和感を覚えて、足を止めた。

通信の初めになかったそれはなかった。

気付いたときにはただの反響だと思った。

けれどもそれは違った。

それは段々と大きくなっていったから。

自分の声が、廊下の先から聞こえた気がした。

しん——と、静まり返った廊下。

蒼白い光に包まれた廊下の先は、影に貼りつかれた研究棟へ続く扉があった。そこが少しだけ、開いていた。

「こんばんは、烏頭野正義」

吐き気のするほど甘い香りと共に、あの気味の悪い笑みとガラス玉のような目が、こちらを見ていた。

その手には、血に濡れた携帯電話が掲げられていた。

§

少女は昼食後のまどろみから覚めると、日が傾き始めているのに気がついた。大きく伸びをして、細い体を起こす。

うろこ雲の走る空が、夕日色に染まっていく。日が差し込む病室の中に、自分とベッドとカーテンと、全ての影が長く伸びて、くっきりとしたコントラストが浮かび上がる。

黄昏色。誰かが、一番好きな色だと言っていたような気がした。勿論、少女には思い出せない記憶だったが。

「先生、まだかな」

昨日の夕方のことを思い出す。

烏頭野の大きな体に抱きしめられた時のことを。

今思い出しても、頭も顔も胸も熱くなって、ぼうとして、ドキドキしてしまう。迎えに来たときに、まともに顔が見られないかもしれない。

それはきっと緊張でも、恥ずかしさでもない、自分がまだわからない感情。きっと、無花果望実も経験したことのないものだと、勝手に思う。

テーブルの上に置いていたメモ帳を開いて、その感情を書き連ねる。そこに初めて書く自分の経験——知識は、どこか言葉にすると恥ずかしいものだった。

いつものように笑顔で彼を迎えよう。

明日からまた中庭で他愛のない会話をしよう。

そして、いつか彼に、言ってみよう。

大好きです、と。

メモ帳に恋という言葉を書き終わった時に、こんこん、という音が聞こえた。

f

### 『EDEN感染症』

原因不明の奇病。脳が異常を起こし、宿主を含め周囲に何らかの作用を引き起こす病気。宿主への感染経路の特定には至っていない。感染症と名付けられているが、病気そのものがうつるわけではなく、宿主の体感している現象がまるで感染するかのように広がることからその名を冠している。

また、現象感染は特定の匂いによって拡大することが知られている。

終

あとがき

小説で初見様お断りとはこれいかに。

案山子 2015年冬号

<http://p.booklog.jp/book/95033>

著者：新潟大学文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile>

今回の執筆者

七乙女昴 文月遼、

幼花 今畑鏡 自分 Ellie Blue 蒨谷アツムネ

Pueny Loran Seapon 日曜日憂 高天美月

芳野朔 惇暉 片西結月 浦木英智 帽子屋

製本版 発行： 2015年 1月 28日

電子書籍版 発行： 2014年 2月 14日

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/95033>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/95033>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ